

岩口遺跡4区

2025. 3

埼玉県坂戸市教育委員会

岩口遺跡4区

2025. 3

埼玉県坂戸市教育委員会

序 文

坂戸市は埼玉県の県央部に位置し、関越自動車道や首都圏中央連絡自動車道など関東地方の交通を支える道路網の結節点にあたります。地勢をみると市内の大部分は平坦な台地で占められており、その縁辺部には高麗川や越辺川沿いに形成された広大な沖積平野が広がっています。先人たちは安定的な台地と肥沃な土壌の沖積平野、豊富な水源などからその恩恵を享受し、約1万5千年もの長きにわたる歴史の糸を紡いできました。その痕跡は遺跡として今もなお私たちの足元に眠っています。

本報告の「岩口遺跡」は、坂戸市西端部の多和目地区に所在し、城山を対岸に臨む高麗川の河岸段丘上に位置する遺跡です。

今回の発掘調査では、遺跡西側の約97㎡が調査対象となり、縄文時代後晩期の竪穴住居跡などが発見され、縄文土器や石器のほか、土偶や耳飾など17,000点を超える遺物が出土しました。また、竪穴住居跡の覆土中からはイノシシやシカなどの獣骨や石棒などの遺物が発見されており、縄文時代の精神性や文化を研究する上での貴重な成果となりました。

これらの調査成果は、坂戸に住む先人たちが過酷な自然環境と常に向き合い共存してきた姿を現在に生きる私たちへと伝えていきます。

本書が郷土の歴史を育む文化財保護意識の醸成に寄与するとともに、広く御活用いただくこととなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで地権者をはじめ、多くの関係者の方に御協力賜りましたことを深く感謝申し上げます。

令和7年3月

坂戸市教育委員会
教育長 太田 正久

例言

1. 本書は、埼玉県坂戸市に所在する岩口遺跡4区の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、個人住宅建設に伴う事前の記録保存を目的として、坂戸市教育委員会が実施した。所在地および、発掘調査、整理作業の期間は下記のとおりである。
遺 跡 名：岩口遺跡4区
所 在 地：埼玉県坂戸市大字多和目
 字岩口後 630 番地 1
発掘作業：平成 12 年 7 月 13 日
 ～同年 8 月 29 日
整理作業：平成 12 年 7 月 13 日
 ～同年 8 月 29 日
報告書刊行作業：令和 5 年 4 月
 ～令和 7 年 3 月
3. 本地区の発掘調査について、工事主体者及び土地所有者からの協力を受けた。
4. 発掘調査及び整理作業は加藤恭朗、北堀彰男、柳楽理が担当し、一部の遺物実測、写真撮影については有限会社毛野考古学研究所に委託した。
5. 本書の執筆は、Ⅰ・Ⅱを山本良太が、その他を金子直行が行った。

6. 本書の編集は金子と山本が行った。
7. 発掘調査資料及び出土遺物は、坂戸市教育委員会で保管している。
8. 動物遺存体資料の分析については、山田敏史氏（早稲田大学大学院 当時）に依頼した。
9. 発掘調査および整理作業への参加者は下記のとおりである。

発掘調査

生田良栄、石田ゆき、大山くら、川村久子、北見芳子、木村ロク、小林由美子、小嶺要吉、関根晋、瀬戸ひろみ、中村喜代子、比留間常男、古川洋子、吉原みね

整理作業

石塚香、岩浪和恵、木暮史子、田島博子、前川喜栄、山田江里子、綿貫美鈴

10. 発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の方々からご教示・ご協力を賜りました。記して感謝いたします。（敬称略、五十音順）
飯塚真人、入江直毅、長田友成、加藤隆則、中村耕作、宮内慶介、村田章人、山田敏史、吉岡卓真、(公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

凡例

1. 本書掲載図の第 1 図は『新編埼玉県史別編 3 自然』中の「第 2 図 埼玉県の地形区分と名称」を基に作成した。第 2 図は国土地理院発行 1/50,000 地形図『川越』『熊谷』を、第 3 図は坂戸市発行の『坂戸市基本図』1/2,500 をそれぞれ使用した。
2. 本書で使用する X・Y の座標値は、世界測地系に基づく。また、挿図中の北方位は、座標北を示す。
3. 遺構図中の標高値は、海拔標高（m）を示す。
4. 遺構番号は、種別ごとに 1 から付した。
5. 本書における挿図の縮尺は挿図中にしている

例

が、原則として以下のとおりである。

遺構：住居跡・竪穴状遺構 1/60、

住居内施設（炉・遺物集中）1/30

遺物：土器・石器 1/3、小型の石器 2/3・1/2
土製品 1/2

6. 遺物観察表の表記は以下のとおりである。
法量の単位はすべて cm 及び g であり、（ ）内の数値は推定値を示す。残存率は実測部位に対するものであり、5 %単位で示した。
7. 獣骨観察表の表記は以下のとおりである。
fr：破片 m：乳臼歯 P：前臼歯
M：後臼歯

8. 出土遺物については、以下のように分類した。

縄文土器の分類

第Ⅰ群土器－後期中葉の土器群

- 1 類 加曽利 B 1 式土器
- 2 類 加曽利 B 2 式土器
- 3 類 加曽利 B 3 式土器
- 4 類 曾谷・高井東式土器
- 5 類 異系統土器

第Ⅱ群土器－後期後葉の土器群

- 1 類 安行 1 式土器
- 2 類 安行 2 式土器
- 3 類 異系統土器

第Ⅲ群土器－晩期前葉の土器群

- 1 類 安行 3 a 式土器
- 2 類 安行 3 b 式土器

第Ⅳ群土器－晩期中葉の土器群

- 1 類 安行 3 c 式土器
- 2 類 安行 3 d 式土器

第Ⅴ群土器－晩期の異系統土器

- 1 類 天神原式土器
- 2 類 大洞 B C 式土器
- 3 類 大洞 C 1 式土器
- 4 類 大洞 C 2 式土器
- 5 類 その他の異系統土器

第Ⅵ群土器－無文土器群を一括する

- 1 類 素口縁状の無文土器
- 2 類 折返状口縁状の無文土器
- 3 類 口縁部に刻みを持つ無文土器群

土製品の分類

ミニチュア土器

耳飾

土製円盤

石器群の分類

石鏃

- ・基部形態 A) 平基
B) 凹基
C) 凸基
- ・形状 a) 正三角形状
b) 二等辺三角形状
c) 五角形状
d) 飛行機状
e) 棒状
f) 不正形状
- ・側縁調整 ア) 通常ブランディング調整
イ) 鋸歯状調整

石匙・搔器

石錐

磨製石斧

打製石斧

礫器

敲石

窪石

磨石

石皿

砥石

独鈷石

石棒

石剣

石刀

石錘

石製品（垂飾）

目 次

序 文 例 言 凡 例 目 次

I 発掘調査の概要	3 堅穴状遺構と出土遺物	66
1 発掘調査に至る経緯	4 グリッド出土遺物	72
2 発掘調査の経過	5 動物遺存体分析	76
3 発掘調査の方法	IV 発掘調査のまとめ	
II 遺跡の立地と環境	1 発掘調査の成果	80
1 地理的環境	2 縄文時代晩期中葉の住居跡について	80
2 歴史的環境	3 遺跡出土の縄文土器について	83
III 発見された遺構と遺物	4 千網型耳飾の構造と変遷	86
1 遺跡の概要	写真図版	
2 住居跡と出土遺物	報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形と遺跡の位置図	第24図 1号住居跡出土土器(1)	32
第2図 周辺の主要遺跡	第25図 1号住居跡出土土器(2)	33
第3図 岩口遺跡4区調査位置図	第26図 1号住居跡出土土器(3)	34
第4図 岩口遺跡4区全体図	第27図 1号住居跡出土土器(4)	35
第5図 1号住居跡(1)	第28図 1号住居跡出土土器(5)	36
第6図 1号住居跡(2)	第29図 1号住居跡出土土器(6)	40
第7図 1号住居跡(3)	第30図 1号住居跡出土土器(7)	41
第8図 1号住居跡 炉跡と出土遺物	第31図 1号住居跡出土土器(8)	42
第9図 1号住居跡覆土内検出遺構	第32図 1号住居跡出土土器(9)	43
第10図 住居内1号土坑とシカ骨分布	第33図 1号住居跡出土土器(10)	47
第11図 住居内1号土坑遺物分布	第34図 1号住居跡出土土器(11)	48
第12図 住居内イノシシ骨集中区	第35図 1号住居跡出土土器(12)	49
第13図 1号住居跡出土遺物分布図(1)	第36図 1号住居跡出土土器(1)	52
第14図 1号住居跡出土遺物分布図(2)	第37図 1号住居跡出土土器(2)	53
第15図 安行3b式土器分布図	第38図 1号住居跡出土土器(1)	55
第16図 安行3c式土器分布図	第39図 1号住居跡出土土器(2)	56
第17図 安行3d式土器分布図	第40図 1号住居跡出土土器(3)	57
第18図 大洞式系土器群分布図	第41図 1号住居跡出土土器(4)	58
第19図 晩期無文土器分布図(1)	第42図 1号住居跡出土土器(5)	59
第20図 晩期無文土器分布図(2)	第43図 1号住居跡出土土器(6)	60
第21図 耳飾分布図	第44図 1号住居跡出土土器(7)	61
第22図 石棒・石剣分布図	第45図 1号住居跡出土土器(8)	62
第23図 シカ・イノシシ骨分布図	第46図 1号住居跡出土土器(9)	63

第47図	1号住居跡出土石器(10)・石製品・骨角器……………64	第54図	グリッド出土遺物(2)……………72
第48図	1号住居跡出土独鈷石・石棒・石剣類……………65	第55図	1号住居跡変遷図……………81
第49図	1号竪穴状遺構……………67	第56図	晩期中葉住居跡の集成図……………82
第50図	1号竪穴状遺構遺物分布図……………68	第57図	岩口遺跡後晩期土器変遷図(1)……………84
第51図	1号竪穴状遺構出土遺物(1)……………69	第58図	岩口遺跡後晩期土器変遷図(2)……………85
第52図	1号竪穴状遺構出土遺物(2)……………70	第59図	晩期中葉耳飾集成図……………87
第53図	グリッド出土遺物(1)……………71	第60図	千網型耳飾構造図……………88
		第61図	千網型耳飾変遷図……………89

挿 表 目 次

第1表	周辺主要遺跡一覧表……………5	第9表	ニホンジカ遺存体観察表……………78
第2表	1号住居跡ピット計測表……………12	第10表	イノシシ下顎骨(連合部)観察表……………78
第3表	復元土器観察表……………73	第11表	イノシシ下顎骨(歯槽が残存する下顎枝)観察表……………78
第4表	ミニチュア土器観察表……………73	第12表	イノシシ下顎骨(関節突起)観察表……………79
第5表	土製品観察表……………73	第13表	イノシシ遺存体(下顎骨以外の部位)観察表……………79
第6表	耳飾観察表……………74	第14表	岩口4区出土動物遺存体集計表……………79
第7表	石器観察表……………74		
第8表	ニホンザル遺存体観察表……………78		

写 真 目 次

図版1	1 1号住居跡	3 深鉢(第24図1)	4 鉢(第28図64)
	2 1号住居覆土内遺構確認状況	5	1号竪穴状遺構
図版2	1 1号住居跡調査風景	図版5	1号住居跡出土土器(1)
	2 住居跡入口部 3 炉跡	図版6	1号住居跡出土土器(2)
	4 P3-1~4 5 P2-1・2	図版7	1号住居跡出土土器(3)
	6 P10 7 南東コーナー壁柱穴	図版8	1号住居跡出土土器(4)
	8 東壁壁柱穴	図版9	1号住居跡出土土器(5)
図版3	1 住居内1号土坑と出土石剣	図版10	1号住居跡出土土器(6)
	2 イノシシ骨集中区	図版11	1号住居跡出土土器(7)
	3 住居内1号集石	図版12	1号住居跡出土耳飾
	4 住居内2号集石	図版13	1号住居跡出土石器(1)
	5 独鈷石(第48図460)	図版14	1号住居跡出土石器(2)
	6 石剣(第48図462)	図版15	1号住居跡出土石器(3)
	7 注口土器(第26図51)	図版16	1号住居跡出土石器(4)・石製品
	耳飾(第36図304)	図版17	1号竪穴状遺構出土土器・石器
	8 壺(第26図47)	図版18	グリッド出土石器
図版4	1 深鉢(第24図9) 2 深鉢(第24図2)		

I 発掘調査の概要

1 発掘調査に至る経緯

坂戸市は勝呂廃寺をはじめとして、市域の大半が埋蔵文化財包蔵地に該当している。そのため、坂戸市教育委員会（以下市教委）では、その保護対策として開発に先立ち試掘確認調査を適宜実施し、その所在や範囲の把握、保存に関する協議に努めている。

岩口遺跡4区の発掘調査に至る経緯は以下のとおりである。

平成12年2月2日、坂戸市大字多和田字岩口後630番地1について、当該地土地所有者から個人専用住宅の建設に先立ち埋蔵文化財包蔵地の照会があった。当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地岩口遺跡に該当していることから、市教委生涯学習課（現在の社会教育課に相当）は埋蔵文化財の所在把握を目的とした試掘確認調査が必要と判断し、調査への協力を要請した。同年7月5日に試掘確認調査の実施し、地中に遺構が残存している状況が確認された。調査結果を受け、市教委と工事主体者で埋蔵文化財の取り扱いに関する協議を実施し、発見された遺構のうち建物建設予定地直下に該当する部分について記録保存の措置を講ずることとなった。

発掘調査の実施にあたっては、平成12年7月11日に文化財保護法（昭和25年法律第214号）第57条に基づく埋蔵文化財発掘の届出（坂教生発第357号）を埼玉県教育委員会（以下県教委）教育長あてへ進達した。これに対し、県教委より同年8月1日に周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての指示通知（教文第3-267号）を受けた。文化財保護法第58条に基づく埋蔵文化財発掘の通知（坂教生発第360号）は同年7月11日付けで県教育長あてへ通知した。

調査体制については市教委直営で発掘調査にあたることとし、同年7月13日から8月29日まで実施された。

2 発掘調査の経過

発掘調査は平成12年7月13日から開始し、同年8月29日まで実施し、実働日数は30日にわたった。調査経過は以下のとおりである。

7月13日（木）表土掘削および遺構確認作業を実施、住居跡を確認し調査を開始する。以降、住居跡の掘り下げと遺物の取り上げ作業を続け、7月28日（金）段階で遺物の取り上げ点数が4,000点を超える。8月2日（水）1号住居跡調査への必要性を鑑み、調査区を西側へ約1m拡張する。8月16日（水）1号住居跡の床面精査を実施、1号土坑（1号堅穴）の調査を開始する。8月17日（木）1号住居跡の写真撮影を実施。出土した動物骨については平面図を作成する。8月22日（火）1号住居跡炉の平面図を作成し、柱穴等付帯施設の調査を開始する。8月23日（水）1号土坑（1号堅穴）の土層セクションの作成、1号住居跡より石剣および耳飾が出土する。8月25日（金）遺構の全体写真を撮影し、平面図と断面図を作成する。機材の撤収作業を行う。8月28日（月）より重機による調査区の埋め戻し作業を開始する。8月29日（火）埋め戻しが完了し、調査を終了する。

3 発掘調査の方法

重機による表土掘削は試掘確認調査後そのまま調査区を拡張する形で実施し、発掘調査開始後は人力による遺構確認作業を行った。各遺構は逐次ベルトを設定し、土層確認を行いつつ移植ゴテ等を用いて精査を行い、必要に応じて写真撮影、断面図、平面図、微細図の作成等記録作業を行った。遺構から出土した遺物についてはできうる限り、トータルステーションを用いて点上げを実施し、その他微細な遺物については遺構ごと一括して取り上げた。完掘した遺構については完掘写真、遺構図の作成を実施し、遺構平面図についてはトータルステーションを用いて作成した。遺構写真については35mmフィルムカメラ（モノクロフィルムおよびカラーリバーサルフィルム）を使用した。

II 遺跡の立地と環境

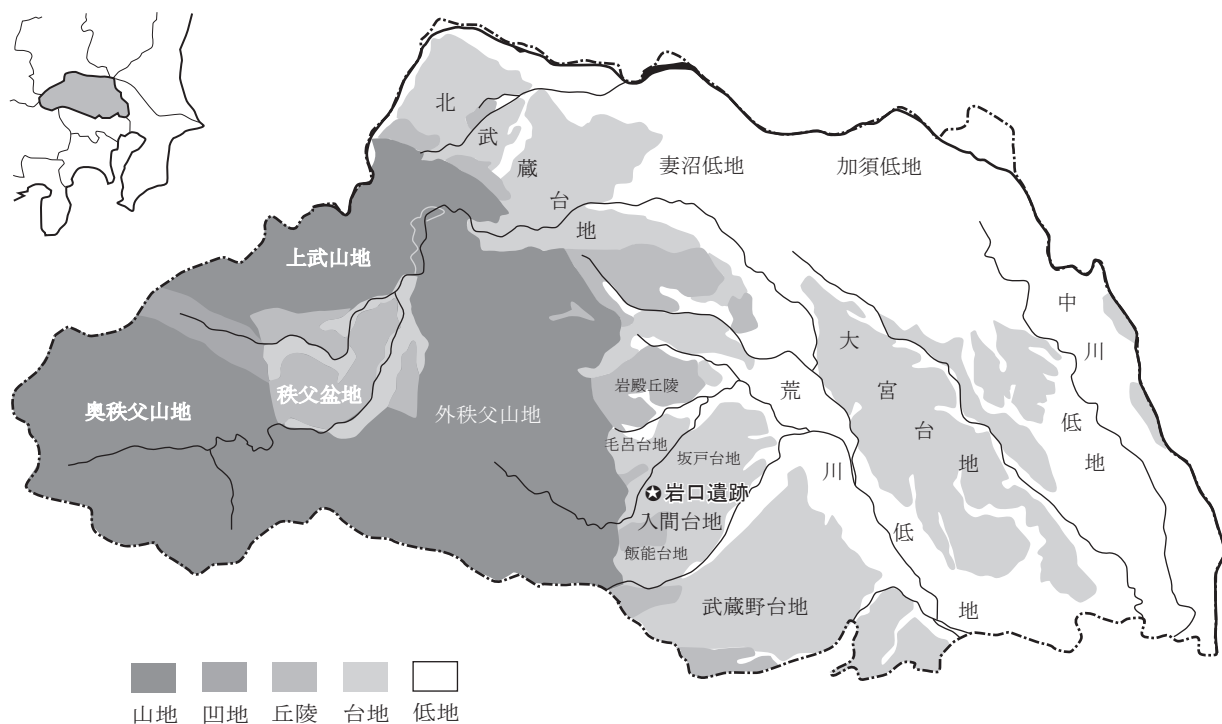
1 地理的環境

坂戸市は埼玉県中部に位置し、東側には関東平野、西側には外秩父山地を臨む（第1図）。市域内の地形は台地、丘陵地、沖積地、自然堤防に大別され、その大部分を台地が占めている。台地上の標高は、外秩父山地側に向かって漸移的に高くなっており、海拔20～50mを測る。なお、市内最高位は坂戸市多和目の城山山頂で、標高113mを測る。

坂戸市が位置する入間台地は、荒川水系の入間川とその支流によって形成された扇状地性の台地で、河川の開析によって坂戸台地、毛呂台地、飯能台地の3支台が構成されている。坂戸台地は、高麗川と小畔川によって画され、概ね起伏のない平坦面が広がる。台地内陸部には外秩父山地の伏流水を水源とした湧水が点在し、これらを源とし

た飯盛川や谷治川、大谷川などといった小河川が網流することで複雑な小支谷が形成されている。坂戸市西部から入間郡毛呂山町の東部にかけて広がる毛呂台地は、越辺川、高麗川、毛呂山丘陵に挟まれた範囲を示し、3支台の中では最も狭小な支台と言える。台地の中央部には越辺川支流の葛川が縦走し、複雑な地形を形成している。また、台地西部には「暴れ川」とも通称された高麗川の蛇行によって優美な河岸段丘が形成されている。岩口遺跡のある多和目地区は坂戸台地の西端部河岸段丘上に位置している。

なお、各台地の周囲には、高麗川や越辺川のような中規模河川によって形成された広大な沖積平野が広がっており、今もなお穀倉地帯として人々の生活を支えている。



第1図 埼玉県の地形と遺跡の位置図

2 歴史的環境

本遺跡の立地する毛呂台地では、旧石器時代から中近世にかけて数多くの遺跡が分布しており、市内の埋蔵文化財包蔵地は153か所を数える（令和7年3月現在）。

ここでは、本書で報告する岩口遺跡4区の主な調査成果である縄文時代を中心として、周辺遺跡の様相を概観する（第2図）。

坂戸市域では、古くより好事家や教育関係者によって考古資料の収集が行われており、そのコレクションによって台地上の各所で縄文遺跡の存在が知られていた。市史編さんに伴う悉皆調査によって市内で多くの遺物散布地が発見され、現在までに44遺跡が縄文時代の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。

縄文時代草創期から早期における遺跡は少なく、調査事例も僅かである。毛呂台地では西浦遺跡(18)で早期とみられる竪穴建物1棟が古墳の墳丘下より検出されたほか、岡山遺跡(15)で撚糸紋系土器の遺物集中が発見されている。また、新しき村遺跡(3)では田戸式、茅山式等の遺物が表採されている。坂戸台地では、高麗川右岸の宮裏遺跡(21)や、大谷川上流域の御新田遺跡(32)、番匠・下道遺跡(31)、台地東端部の北谷遺跡(33)などで撚糸紋系段階の竪穴建物や屋外炉群が発見されている。また、木曽免遺跡(34)や、飯盛川上流の鶴ヶ島中学校西遺跡(14)などで撚糸紋・条痕紋系段階の遺物散布が認められる。特に、鶴ヶ島中学校西遺跡では旧石器時代の遺跡分布と重複する事例も多く、台地内陸部の小河川沿いを掘り所としている傾向が看取される。

前期に入ると、台地上における遺跡数は増加に転じ、市域の全域で遺跡が確認できる。毛呂台地西部では新しき村遺跡で諸磯C式段階の遺物が採集されている。

毛呂台地西部河岸段丘上に位置する多和目地区では、岩口遺跡で関山式期の土坑を調査したほか、多和目渡戸遺跡(7)で諸磯C式段階の竪穴建物1棟と集石遺構3基が発見されている。坂上天神前遺跡(8)では、前期の遺構が城西大学の調査によっ

て発見されており、まばらではあるが活動の痕跡を見出すことができる。越辺川右岸の河岸段丘上に位置する長岡遺跡(16)では、関山式期の落し穴状遺構が検出され、良好な一括資料が出土している。

坂戸台地側をみると高麗川右岸の大家小学校遺跡(12)で黒浜式期の竪穴建物1棟、市中心部を流れる飯盛川沿いでは下山田遺跡(23)で諸磯C式段階の竪穴建物2棟が発見されるなど、当該期の遺跡が点在する状況にある。坂戸台地東部の木曽免遺跡では、半島状に突き出た台地の縁辺部において関山期の竪穴建物10棟以上と遺物包含層が確認されている。関山式期、黒浜式期の竪穴建物や土坑が、木曽免遺跡に比較的近い附島遺跡(29)や景台遺跡(35)、番匠・下道遺跡などでも発見されており、坂戸台地東端部に一定規模の集落が点在していた様子が想定されよう。

中期に入ると遺跡数はさらに増加を見せ、市内における縄文遺物の散布地も多くは当該期に該当する。時期は大半が勝坂式後期から加曾利E式段階であり、この傾向は県内の遺跡動態とおおむね同様である。

毛呂台地西部では、新しき村遺跡の他、諏訪ノ台遺跡(10)、天沼遺跡(9)などで遺物の散布が認められるほか、西坂戸遺跡(4)や北曾根遺跡(5)、城山遺跡(2)、下川原遺跡(6)などで勝坂式、阿玉台式、加曾利E式段階の竪穴建物が調査されている。越辺川右岸の長岡遺跡では複数の竪穴建物が発見されており、毛呂台地を縦走する葛川縁辺部でも西浦遺跡、木瓜田遺跡(19)などで遺物包含層が確認されている。

高麗川右岸の大家小学校遺跡では、校舎の建て替えに伴う発掘調査で中期の竪穴建物が10棟以上発見されており、近隣の二階遺跡(13)、宿頭遺跡(11)の遺物散布地なども含め、まとまった規模の遺構群の存在が想定される。大家小学校遺跡の約3km下流に位置する花影遺跡(22)では関越自動車道の建設に先立つ発掘調査の成果をはじめとして、これまでに多数の竪穴建物が発見され



第2図 周辺の主要遺跡

ており、坂戸市域では最大規模の縄文集落遺跡となっている。

坂戸台地東部では、谷治川沿いの勝呂遺跡（25）などで竪穴建物が確認されている。大谷川沿いでは、景台遺跡と上谷遺跡（36）では多数の竪穴建物が発見されており、馬蹄形ないしは密度の薄い環状の集落形態が想定されている。二階川流域の御新田遺跡、牛原遺跡（30）では竪穴建物と集石土坑などで構成される中期中葉段階の環状遺構群が発見されている。

後期になると、遺跡数は激減し、市内における調査事例はわずか数例となる。毛呂台地では、長岡遺跡で称名寺式段階の敷石を伴う竪穴建物が発見されているほか、西浦遺跡や新しき村遺跡などで若干の遺物散布がみられる。岩口遺跡では3区と本報告の4区において後期後半段階の遺物が出土しており、当該集落が晩期まで継続している様子が伺える。

高麗川右岸の大家小学校遺跡では柄鏡形竪穴建物1棟が検出されている。下流の高麗川低地帯に位置する下田遺跡（20）では、後期の遺物が旧流路中から出土しており、上流集落の活動との関連が想定される。

坂戸台地東部では大穴遺跡や勝呂遺跡、新田前遺跡（27）、柊遺跡（24）、鶴ヶ島中学校西遺跡などで遺物の散布がみられる。遺構の調査事例は市

内の他地域同様に少なく、塚越渡戸遺跡（28）で後期の竪穴建物が1棟、上谷遺跡や前林遺跡（37）で土坑敷基が発見された程度にとどまる。なお、圏央道の開発に伴い、調査が実施された牛原遺跡では緑泥片岩を使用した柄鏡形敷石建物1棟が発見されており特筆されよう。

晩期の遺跡はさらに数が減少し、市内で現在確認されている当該期の遺跡は本報告の岩口遺跡と西窪遺跡（38）のみである。坂戸台地東部、大谷川沿いにある西窪遺跡では安行式段階の土坑が発見されている。

本市域周辺の事例も多くはなく、入間台地北部および岩殿丘陵南部周辺における当該期の活動は非常に低調であった様子が伺える。

越辺川流域では、鳩山町の天神台遺跡（17）で千網式と大洞A式の土器が発見されている。また、上流部の越生町夫婦岩岩陰遺跡においても晩期の遺物が発見されている。高麗川流域では岩口遺跡の上流に位置する日高市東台遺跡で千網式土器の完形品が発見されている。

入間川流域では、飯能市加能里遺跡で後期段階より続く集落跡が調査されているほか、入間川支流成木川沿いの中橋場遺跡でも晩期の竪穴建物や配石遺構が発見されており、まとまった遺構の数少ない調査事例となっている。

第1表 周辺主要遺跡一覧表

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	岩口遺跡	11	宿頭遺跡	21	宮裏遺跡	31	番匠・下道遺跡
2	城山遺跡	12	大家小学校遺跡	22	花影遺跡	32	御新田遺跡
3	新しき村遺跡	13	二階遺跡	23	下山田遺跡	33	北谷遺跡
4	西坂戸遺跡	14	鶴ヶ島中学校西遺跡	24	柊遺跡	34	木曾免遺跡
5	北曽根遺跡	15	岡山遺跡	25	勝呂遺跡	35	景台遺跡
6	下川原遺跡	16	長岡遺跡	26	道場遺跡	36	上谷遺跡
7	多和目渡戸遺跡	17	天神台遺跡	27	新田前遺跡	37	前林遺跡
8	坂上・天神前遺跡	18	西浦遺跡	28	塚越渡戸遺跡	38	西窪遺跡
9	天沼遺跡	19	木瓜田遺跡	29	附島遺跡		
10	諏訪ノ台遺跡	20	下田遺跡	30	牛原遺跡		

Ⅲ 発見された遺構と遺物

1 遺跡の概要

岩口遺跡は西方に大きく蛇行する高麗川によって浸食された東西に細長い標高約 65 m 前後の台地上に位置し、高麗川右岸の河岸段丘上の旧河川敷面を基盤として形成された遺跡である。したがって、表土層を除去するとすぐに礫層面が露出し、遺構は礫層を掘り込んで構築されている。

本遺跡は今までに 4 地区にわたって調査が行われており（第 3 図）、本報告はその 4 区の調査報告である。1 区は本地区西側の道路新設部分の調査であり、2 区は本遺跡東端の調査区で岩口後遺跡として既に報告書が刊行されている（坂戸市教委 1991）。3 区は 4 区の南西側に位置する最も調査面積の広い地区で、岩口遺跡の中心と推定される地区であり、現在整理作業が行われている。4 区は高麗川に南面した段丘面の崖線付近にあたり、高麗川方面へと開く遺跡の開口部に位置する可能性がある地区である。

本遺跡は河岸段丘上の東西に細長い範囲の中で、東端の 2 区を除く 1・3・4 区を主体とする縄文時代後晩期の遺跡で、3 区と 4 区が浅い谷を囲んで環状もしくは馬蹄形を呈する集落となる可能性のある遺跡である。

4 区の調査区は南北にやや細長い長方形を呈し、北東コーナーに長方形の張り出しを持つ約 97 m² の面積が対象となる地区である。調査の結果、縄文時代晩期の住居跡 1 件と、竪穴状遺構 1 基が検出された（第 4 図）。1 号住居跡は方形を呈し約 4 分の 3 が調査区内に納まり、1 号竪穴状遺構は調査区の北東コーナーから張り出し部にかけて遺構の一部が検出されている。

1 号住居跡は覆土内から多量の土器や石器が出土しているが、住居跡廃絶後に堆積した覆土内に形成された土坑や、集石遺構、獣骨の集中区なども確認された。

また、1 号竪穴状遺構は、当初土坑として調査を進めたが、遺物の出土状況や南西コーナーの形状等から 1 号住居跡に類する方形状の住居跡の可能性が高いと推定された。しかし、壁柱穴などの

住居跡の付属施設等が未検出であることなどから、竪穴状遺構として取り扱った。

遺構の時期は出土遺物から、縄文時代晩期前葉から中葉にかけての所産と推定される。特に、1 号住居跡からは晩期前葉の安行 3 b 式から中葉の安行 3 d 式期にかけての土器・石器類が多量に出土しており、1 号竪穴状遺構からも晩期前葉の安行 3 b 式期を中心とした遺物がまとまって出土している。

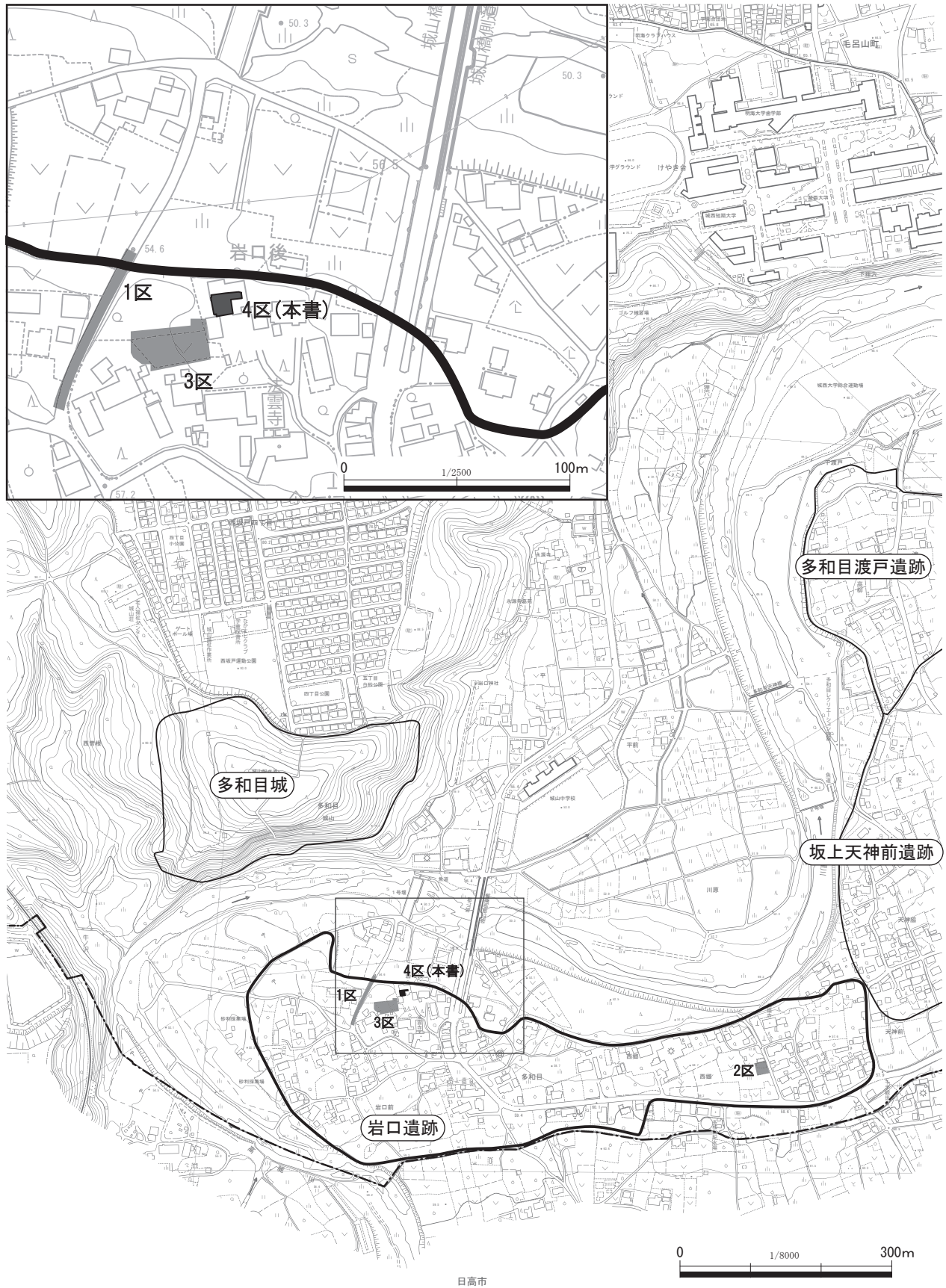
出土遺物については、凡例に大分類を示した。土器群については時期と型式別に後期中葉土器群から晩期中葉の土器群までをⅠからⅥ群に分類した。石器やその他の遺物については個々に分類を示した。石鏃に関しては基部形態で大分類し、形態や側縁の調整加工等でさらに分類した。出土遺物は完形品から小破片までを含めて、土器類 15,986 点、石器類 1,961 点の総数 17,947 点である。

出土土器 15,986 点は、その大半が 1 号住居跡の出土であり、その内ドット処理は 7,695 点で約半数、残りの半数は小片で大半が無文土器である。土器群の分類には不確定要素を多く含むが、有文土器の大分類においておよそその出土傾向の把握が可能となる。

土器群 15,986 点の内、有文土器は 1,604 点で 10%、文様のない無文土器は 13,828 点で 86.5%、底部は 378 点で 2.4%、不明土器は 176 点で 1.1% を占める。いわゆる有文土器と無文土器の合計は 15,432 点であり、有文土器が 1,604 点で 10.4%、無文土器が 13,828 点で 89.6% となり、およそ 1 : 9 の割合となる。

有文土器 1,604 点は、後期末までのⅠ・Ⅱ群土器が 296 点で 18.5%、晩期のⅢ～Ⅵ群土器が 1,308 点で 81.5% となり、およそ 2 : 8 の割合となる。無文土器 13,828 点の口縁と胴部の割合は、口縁が 1,203 点で 8.7%、胴部が 12,625 点で 91.3% となり、およそ 1 : 9 の割合となっている。

また、晩期有文土器 1,308 点中の異系統土器の割合は、天神原式が 62 点で 4.7%、大洞式が 98



第3図 岩口遺跡4区調査位置図

III 発見された遺構と遺物



第4図 岩口遺跡4区全体図

点で7.5%を占める。さらに、晩期中葉の安行3c・3d式期に限定すると、安行3c・3d式が771点で合計931点となり、天神原式が6.7%、大洞式が10.5%となる。なお、天神原式土器については大方を安行3c式並行に想定し、大洞式の細別についてはカウントせず、大洞BC式から大洞C2式までを一括して分類を行っている。傾向のみの把握といえよう。

他に、ミニチュア土器5点、耳飾30点、土製円盤4点が出土したが、土偶は1点も出土していない。耳飾では、ほぼ完形の千網型耳飾の出土が注目される。

石器類は総数1,961点が出土した。その内、剥片および細剥片が1,656点で84.5%を占め、ツールが305点で15.5%を占める。

石器の内訳は、狩猟具としての石鏃99点、加工具としての石匙・搔器9点、石錐7点、工作具としての磨製石斧6点、打製石斧10点、礫器7点、

砥石7点、加工具および食品製粉具としての敲石5点、窪石5点、磨石39点、石皿16点、石器素材としての石核79点、漁労具としての石錘2点、装飾品としての垂飾2点である。石鏃は中子を持つ凸基石鏃を主体とし、挟りの入る凹基石鏃、基部の平らな平基石鏃、石鏃の未成品などが揃い、数の多さと形態のバリエーションの多様さが注目される。

石器の中では精神性を反映した第二の道具とされる独鈷石1点、石棒2点、石剣8点、石刀1点が出土した。石剣の1本は完形で、祭祀場と想定される住居内1号土坑から、大洞C2式土器や千網型耳飾などとともに出土し、注目される。

石器独自では時期判定が難しいが、出土土器群を参考にすると石器の大半が縄文時代晩期前葉から中葉にかけての所産と推定される。

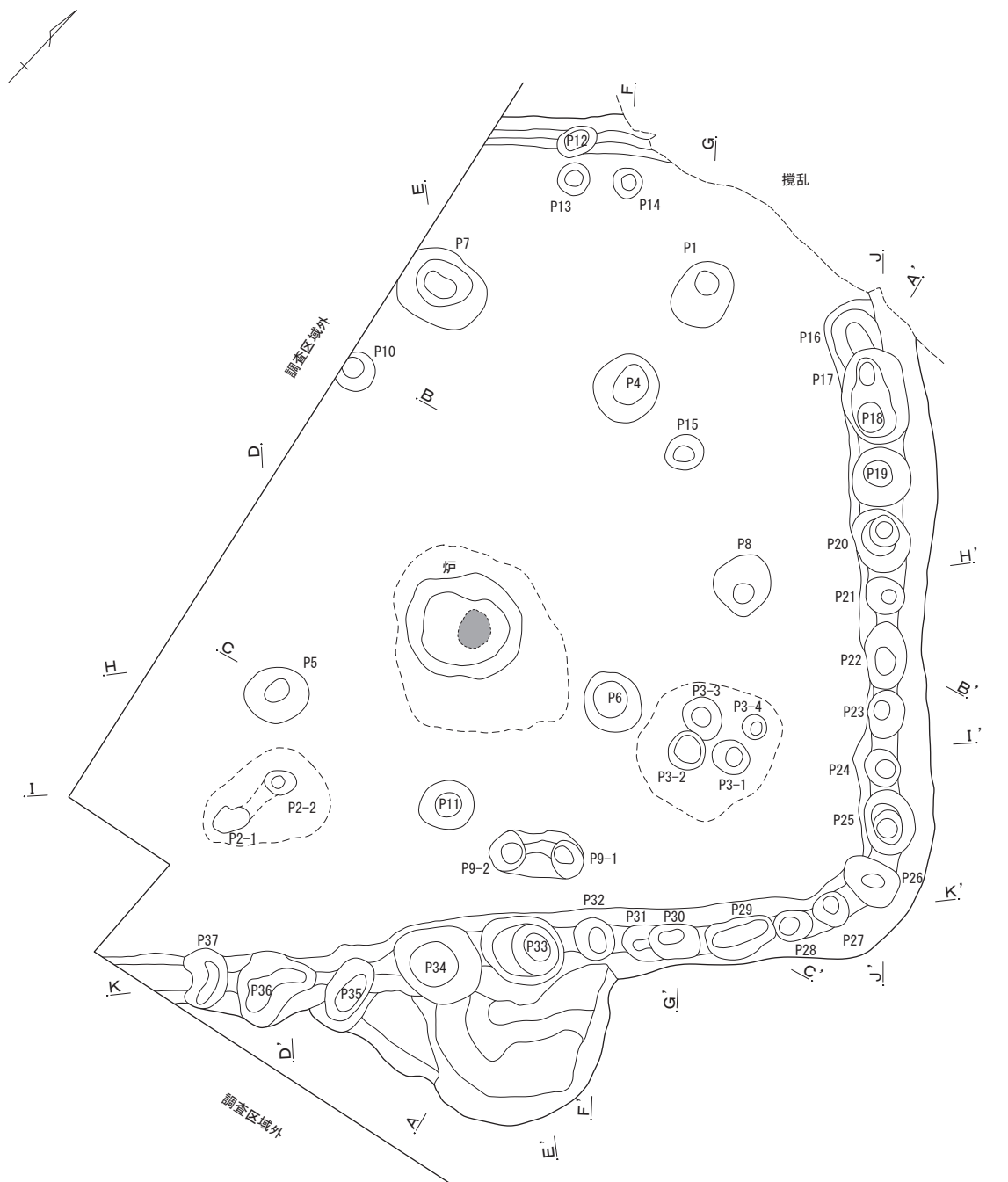
2 住居跡と出土遺物

1号住居跡（第5～7図）

1号住居跡は、調査区約97㎡の半分の面積である約50㎡を占めており、調査区内でほぼ全容を把握することが可能である。住居跡全体では約8割弱を調査したことになる。北東コーナーに攪乱を受け、北西コーナーから南西コーナーが調査区外に当たる。住居跡のプランは、南北方向に主軸を採るほぼ方形で、南北方向7.8m×東西方向

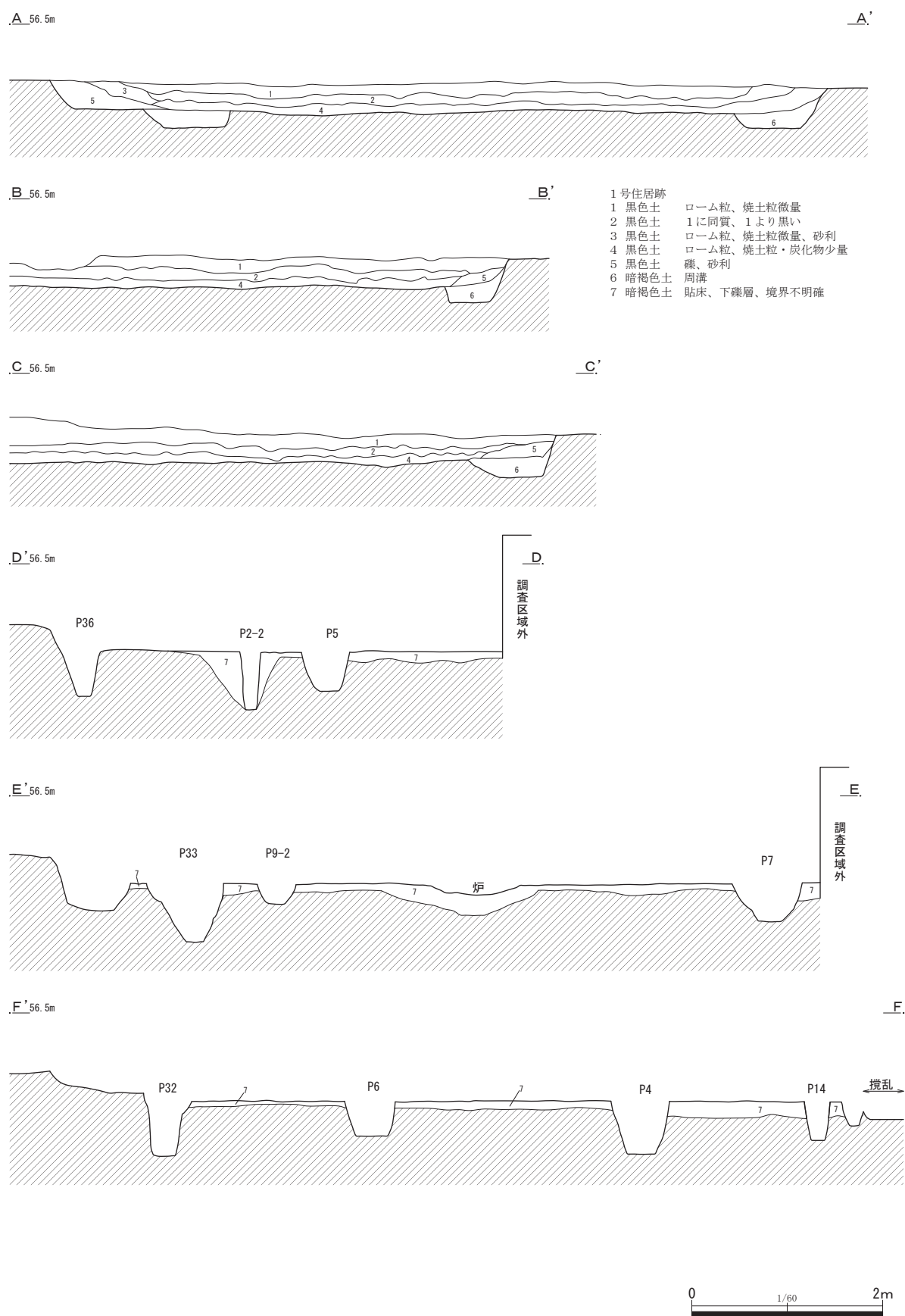
推定8m×深さ約0.3mを測る。南壁の中央部に東西1.8m×南北1.2mの台形状の入り口部を設けている。主軸はN-48°-Wである。入り口部を含めると9.2mの規模となり、比較的大きな住居跡といえよう。

炉は地床炉で、主軸線上中央部やや南側に位置し、長径1.05m×短径0.93m×深さ0.09mの東西方向に細長い楕円形を呈する（第8図）。最終段階に使用されたと推定される炉の下から、ほ

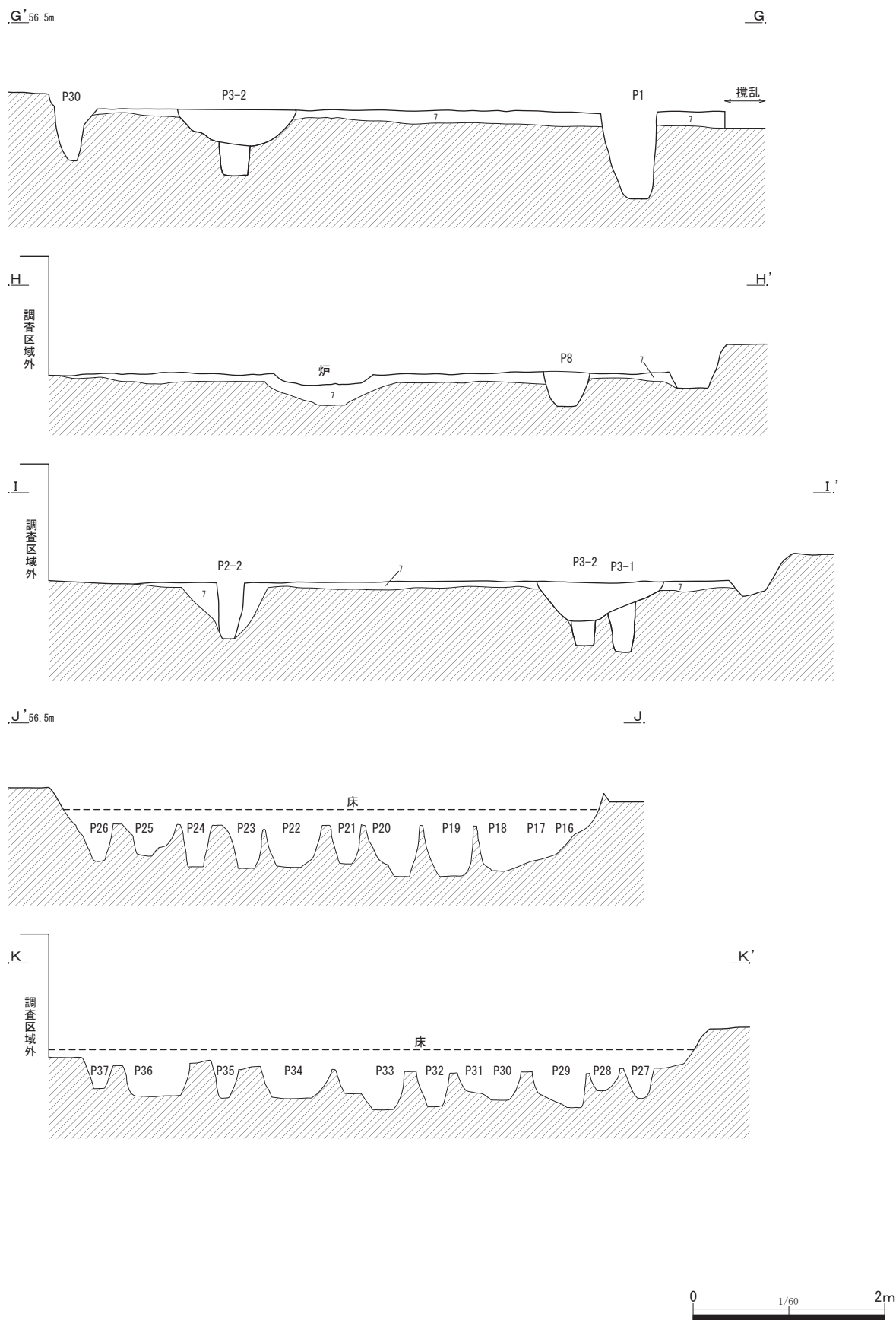


第5図 1号住居跡（1）

Ⅲ 発見された遺構と遺物

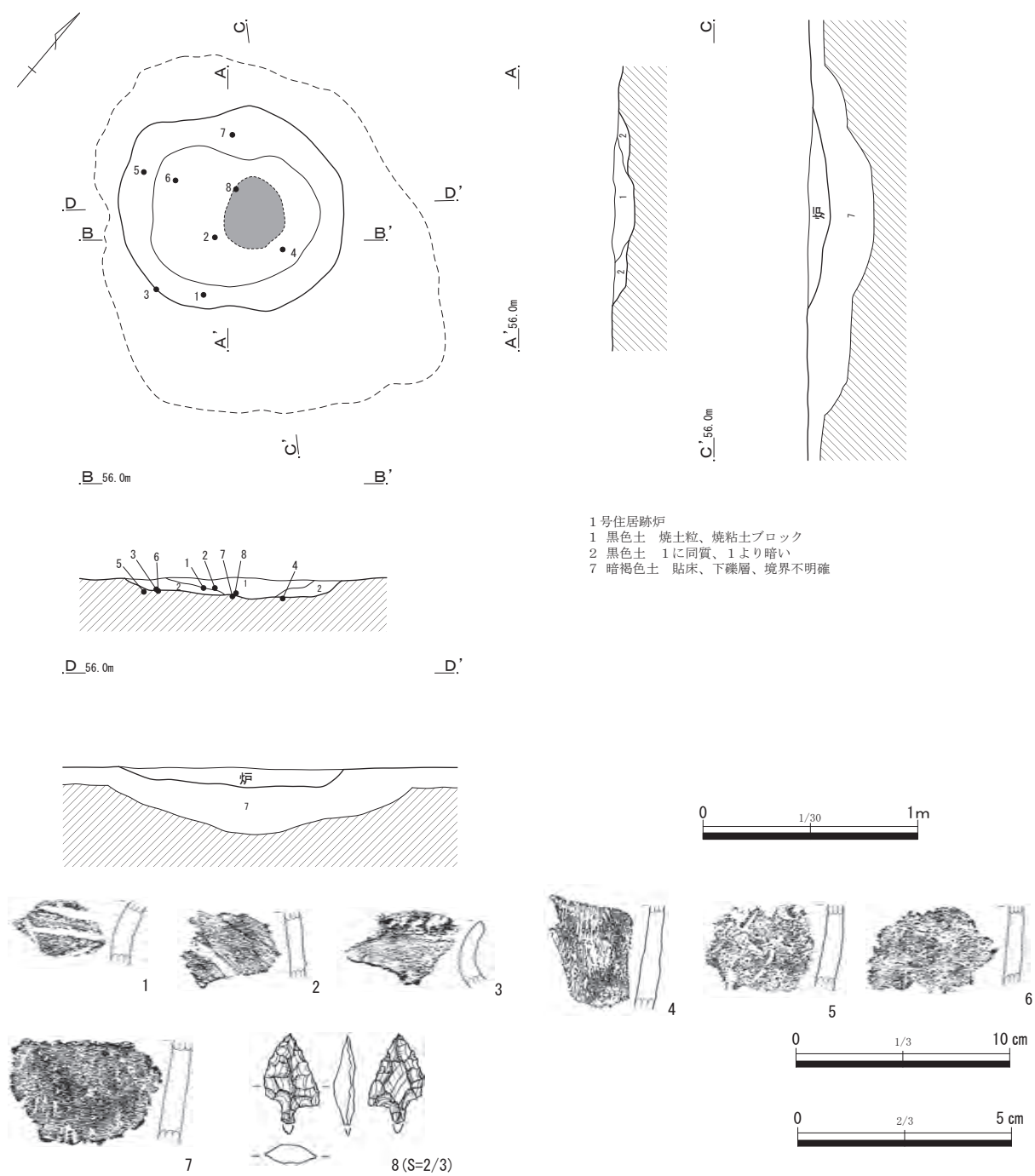


第6図 1号住居跡(2)



第7図 1号住居跡(3)

III 発見された遺構と遺物



第8図 1号住居跡 炉跡と出土遺物

第2表 1号住居跡ピット計測表

No.	径	深さ	No.	径	深さ	No.	径	深さ	No.	径	深さ	No.	径	深さ	No.	径	深さ
1	60	99	4	60	59	10	35	44	17	50	66	24	36	62	31	32	51
2-1	60	48	5	55	43	11	50	27	18	55	68	25	60	52	32	40	61
2-2	80	65	6	55	41	12	36	47	19	55	69	26	54	56	33	74	64
3-1	35	77	7	80	47	13	30	38	20	58	71	27	32	55	34	78	52
3-2	30	62	8	54	43	14	30	44	21	36	59	28	34	46	35	60	47
3-3	40	48	9-1	40	46	15	35	36	22	60	61	29	62	63	36	70	64
3-4	25	51	9-2	40	34	16	45	53	23	44	65	30	46	56	37	54	38

ば同じ位置にひとまわり規模の大きな炉跡状の掘り込みが確認された。炉跡としての明確な痕跡は認められなかったが、住居が何度か建て直されていることを考慮すると、それらに伴う炉である可能性も高い。掘り方であったとしても、炉の位置を意識していたものと推定される。

炉内からは土器片と石鏃、獣骨片が出土した。土器片を1～7に、石鏃を8に図化した。1は平行する沈線の横位区画と斜行沈線が組み合うモチーフで、橙褐色を呈し砂粒を多く含む。2はケズリ状の器面整形上に斜行する太い凹線文を施文するもので、細砂粒を多く含む。3は口縁部が大きく外反する壺形土器と思われ、外削状口唇部に斜位の刻みを施す。淡い橙褐色を呈し、小礫、砂粒を含む。4～7は無文の深鉢の胴部破片で、外面に縦位の整形痕を残す。4は内面に縦位の整形を残し、淡橙褐色を呈する。5は淡橙褐色を呈し、内面には斜位の整形を残す。6・7は暗褐色を呈し、砂粒を多く含み、内面に横位の整形を施す。いずれも晩期中葉に位置付けられよう。8はチャート製の小型の凸基石鏃であるが、左右のバランスを崩している。

住居跡の壁際には壁溝が一周し、調査区内の壁溝内に23基の壁柱穴(ピット)がぎっしり廻る。個々の規模については一覧表(表2)にまとめたが、壁柱穴は床面からの深さ約50cm～70cm代を平均とし、径も約30cm～50cm代を平均とする。ピットの径や深さにおいて、敷設の規則性は認められない。

また、床面上には19基のピットが確認され、内P1・P2-1・P2-2・P3-1・P3-2・P3-3・P3-4・P4・P5・P6の10基が主柱に相当するものと推定される。P3の場所には4基のピットが集中しており、これを基準に3回の建て替えが想定され、さらに内側に廻るP4～P6も柱穴と想定されることから、最大限4回の建て替えが行われた可能性がある。

そこで、それぞれ4回の建て替えに相当する都合5軒分の柱穴は抽出できないが、調査区外や複数回使用の柱穴を想定して、可能性のある3軒分の復元を試みる。

最も内側を廻る柱穴構成の小さな住居は、P4・

P5・P6が組となり調査区外に1基もしくはP10を想定する住居である。建て替えを考慮すると、一番古い住居となる可能性がある。これをA住居跡とする。次に、P3の場所には4基のピットが、P2の場所には2基のピットがあることから、P2を基準にすると2軒の住居が組み上がる。外側へ大きくなるように拡張していることを想定すると、P2-2を基準としてP3-2・P1・調査区外に想定1基で構成される住居跡が組み上がる。これをB住居跡とする。さらに、若干外側へと拡張するP2-1・P3-1・P1の重複使用・調査区外に想定1基で住居跡が組み上がる。これをC住居跡とする。住居の構築順はA住居跡→B住居跡→C住居跡となろう。さらに理論上ではもう1軒の建て替えが想定できるが、柱穴等の配置から推測するのは限界がある。

住居跡は掘り込みが浅く、覆土の厚さは中央部が30cm前後で、10cm前後の層厚を持つ3層の黒色土が堆積していた。3層の明瞭な区分は難しいが、下層ほど黒味が強くなり焼土粒、小礫を多く含むようになる。遺物は掘り方とした床面下も含めて、2・4層を中心として覆土中から多量に出土した。

1号住居跡覆土内検出遺構

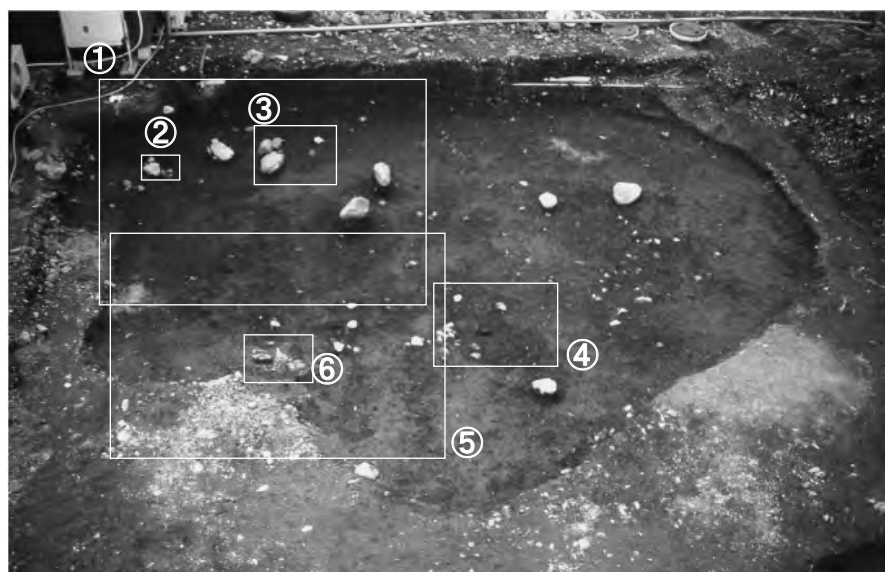
住居跡の覆土中に、集石や獣骨の集中、土坑の掘り込み等が検出された。住居跡廃棄後の窪み、または覆土堆積過程において、精神性の強い行為や遺構の構築が行われたものと想定される。遺構の分布について第9図に概念図として示した。

① 住居内1号土坑(第10・11図)

住居跡北東コーナー近くのP3の直上に構築された土坑である。長径1.35m×短径1.23m×深さ0.42mの南北方向にやや細長い不整楕円形を呈し、明らかに住居跡の柱穴P3が埋まった後に浅い土坑が掘られ、第11図に示した遺物が出土した。また、この土坑からはシカの骨のみが集中して出土しており、精神性遺物の出土とともに祭祀性の強い遺構であることが示唆される。シカ骨祭祀とも呼べるような遺構である。

遺物は完形の石剣(第48図463)、ほぼ完形の

Ⅲ 発見された遺構と遺物



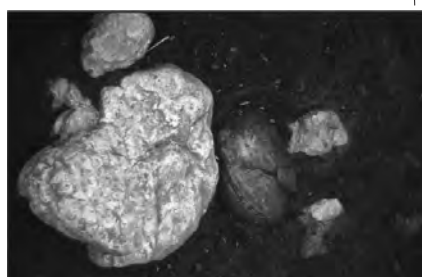
1号住居跡



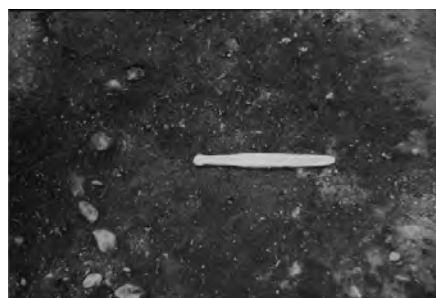
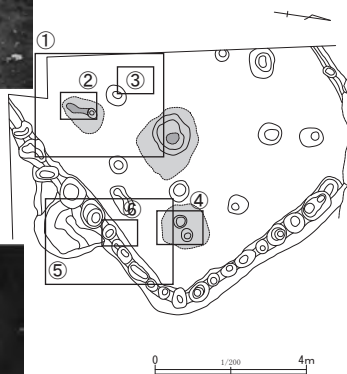
① 住居内集石(遠景)



③ 住居内2号集石



② 住居内1号集石



④ 住居内1号土坑

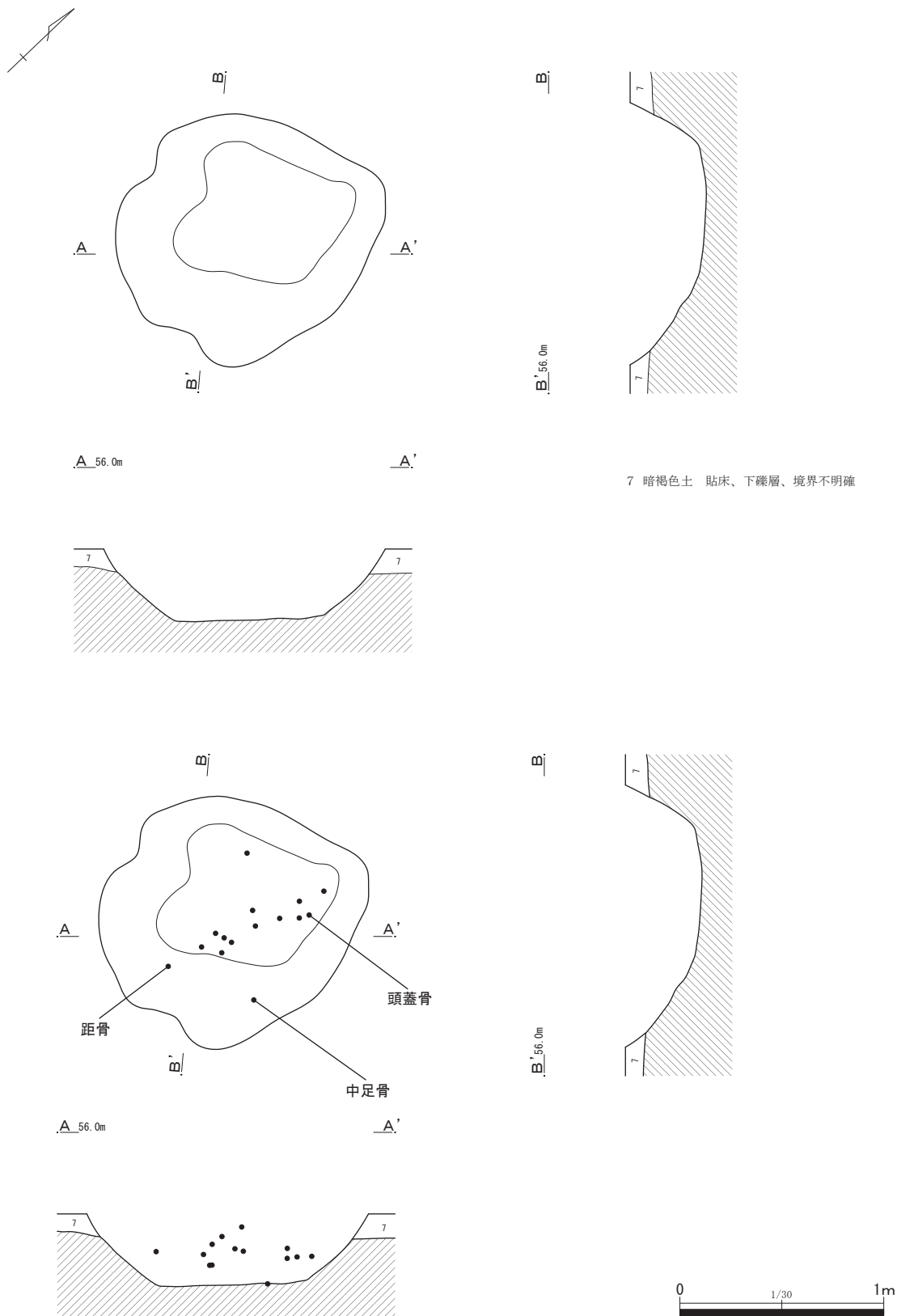


⑤ イノシシ骨集中区(遠景)



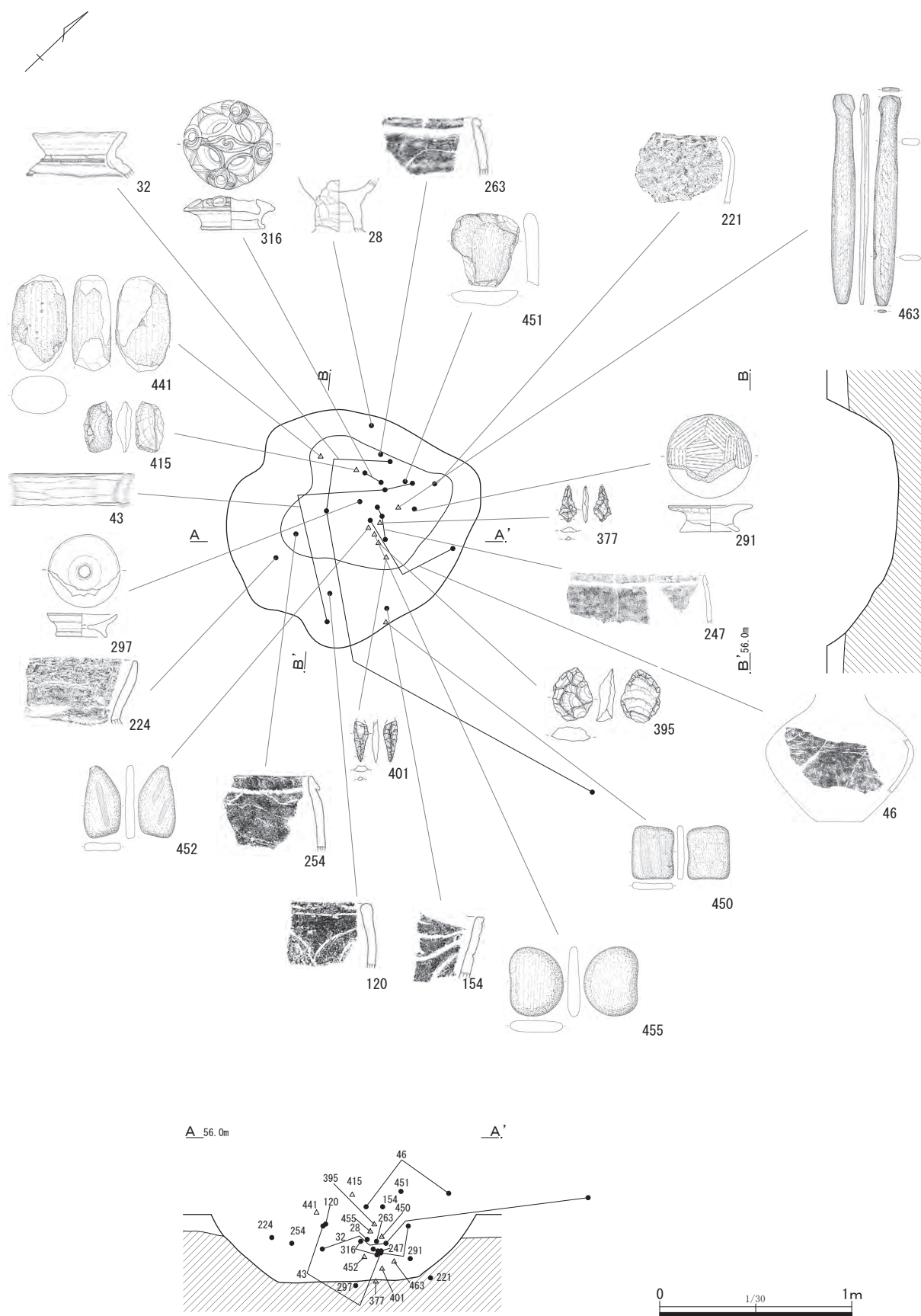
⑥ イノシシ骨集中区(近景)

第9図 1号住居跡覆土内検出遺構

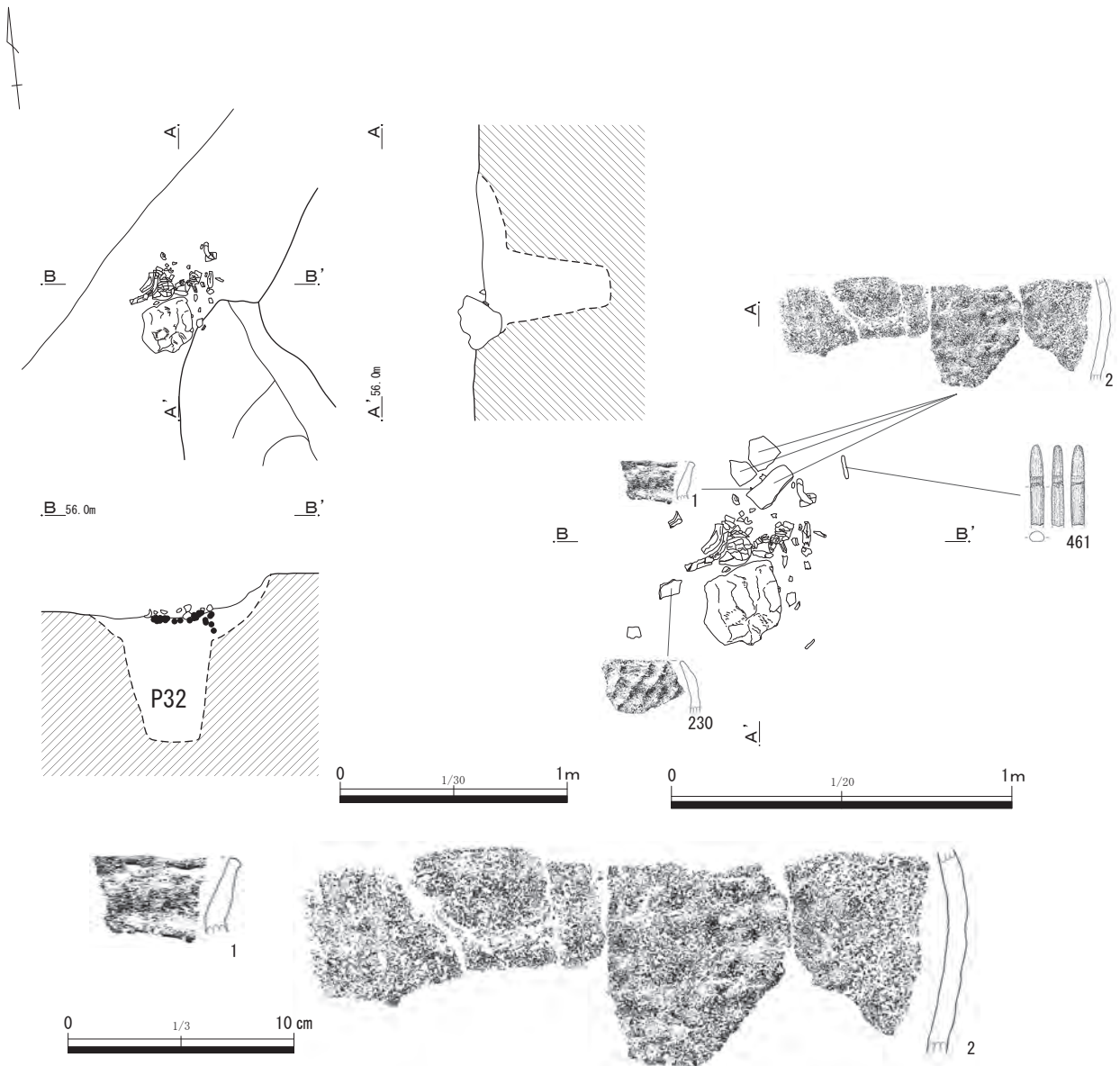


第10図 住居内1号土坑とシカ骨分布

Ⅲ 発見された遺構と遺物



第11図 住居内1号土坑遺物分布



第12図 住居内イノシシ骨集中区

千網型耳飾（第37図316）、滑車型の耳飾（第36図291・297）、ミニチュア土器（第25図28）、砥石（第46図450・451）等が、大洞C2式土器（第26図46）とともに出土しており、強く比熱しているものが多いことが注目される。

② イノシシ骨集中区（第12図）

住居跡入り口部東側の壁柱穴P32の上層から上部にかけて、径約0.5メートルの範囲にイノシシ骨のみと、ニホンザルの骨2点が集中して出土した地点である。P32との関係は不明であるが、明らかにピットの埋没最終時点で、イノシシ骨を配置している。ピット南側の肩部には大きな礫、その北側の対岸には深鉢形土器胴部の大形破片を

配置し、その中央に下顎骨を中心としたイノシシ骨を埋置した様相が窺われる。先の住居跡内1号土坑のシカ骨祭祀と対応させ、イノシシ骨祭祀と呼ぶことにする。

出土土器の1は頸部で括れ、口縁部が外反する無文の深鉢形土器の口縁部破片で、頸部に指頭整形痕が残り、口唇部は先細りの角頭状に成形される。2は胴部の大型破片である。淡い橙白色を呈し、砂粒を多く含む。器表面には指頭整形痕が残り、色調・胎土・整形等から1と同一個体と判断される。

③ 住居内1号集石（第9図）

明瞭な集石とは捉えられず十分な調査記録もないものの、大型の礫と拳大の礫の間から、異系統

III 発見された遺構と遺物

要素を持つ浅鉢（第25図14）が倒置の状態で出土している。1号集石は住居跡南西コーナー付近で、P2と壁溝P37の中間あたりにあり、径約0.5mの範囲に設置されていた。下部にピット等の遺構は確認されていない。覆土堆積中に設置、または遺棄されたものと判断される。土器が大きな石と小さな石の中間部から出土という点でイノシシ骨集中区と類似することから、関連性のある精神性の強い祭祀的な遺構と判断される。土器はクランク文と三叉文の組み合わせった文様を持ち、在地的な要素と南東北から北陸地方の要素が折衷しているものと推測される。1号集石遺構は出土土器から、晩期中葉時期と判断される。

④ 住居内2号集石（第9図）

1号集石と同様に十分な調査記録はないが、P2の西側を中心とした付近で径約0.8mの範囲に集石がみられた。大型の礫が半円形状に並べられ、中央部にやや小型の礫が並べられていたが、土器や獣骨等の出土については不明である。柱穴のピット上に浅い土坑状の施設を設けるのは1号土坑と同様であり、火を焚いた状況はよく類似する。大きな礫で回りを囲み中央部に礫を集合させる構造は、単なる集石ではなく配石遺構としての性格も考慮する必要があるが、十分な記録を残すことができなかった。

1号住居跡遺物出土状況

1号住居跡覆土からは、縄文時代後期中葉の加曽利B式から晩期中葉の安行3d式までの土器群と、各種石器類、獣骨等が多数出土している。上述した覆土内に検出された遺構以外にも、土器等の集中がみられる箇所があるため、覆土内には更なる遺構が存在していた可能性が高いと推測される。全体的には床面近くに遺物が集中する傾向がある。

出土土器の主体は、晩期前葉の安行3b式から中葉の安行3d式にかけての土器群であり、覆土中に混在して出土している。しかし、やや出土状況を細かく観察すると、その傾向を把握することも可能である。

第13図に出土遺物の全体ドット分布図、第14図に主だった土器の垂直分布図を示した。第14図の断面図は、横軸に対して縦軸が2倍となる縮

尺で示し、より分布深度をわかりやすく示したものである。粗い傾向ではあるが、安行3b式土器がやや下部から出土し、混在しつつもその上に安行3c・3d式土器が分布する様子が把握される。

まず、住居跡の廃絶時期がいつかを認定する必要があるが、安行3b式土器は住居跡の掘り方とされる部分からの出土や、床面近くから出土する傾向がある。また、最終の炉跡からは安行3c式土器が出土しており、住居跡の機能が停止した段階は安行3c式期と判断される。その後、住居跡の覆土が形成される過程で、住居跡覆土内検出遺構が構築されるのは、ほぼ同時期の安行3c式・大洞C1式期から安行3d式・大洞C2式期にかけてであり、炉跡との新旧関係に齟齬はない。

しかし、住居内からは安行3b式土器も少なからず出土しており、当初最終の住居跡が安行3b式期で、その後覆土形成過程に安行3c・3d式土器が遺棄されたものと判断していたが、最終の炉跡を明らかにすることで、住居跡の覆土形成過程を推測することができた。最終の炉跡の下部に掘り方状の落ち込みが存在することは、この掘り方が安行3c式以前の炉跡になる可能性を示唆している。住居跡の土層断面図においても床面下に厚い掘り方層が確認されていることから、この掘り方層が安行3b式の住居跡の覆土であった可能性を推定することもできる。この安行3b式期の住居跡覆土を整地し、安行3c式の床面としたのであれば、それぞれの新旧関係に矛盾をきたさない。住居跡が柱穴の検討から、すくなくとも3回以上の建て替えの可能性があり、安行3b式期で1回、安行3c式期以降で2回以上の住居構築が行われたこととも矛盾しない。しかしながら、安行3b式の大型土器片等も出土していることなどから、いわゆる掘り方内からの出土土器以外に、安行3c式期住居跡の覆土中に外部から何らかの原因で混入した可能性も考慮する必要がある。

したがって、住居跡は安行3b式期に最初の建設があり、プランを拡大させつつその覆土を整地したうえで床面とし、安行3c式期に建て替えが行われた。その後、柱間を大きく変えずに1回以上の建て替えが行われ、最終住居が埋没する覆土内の床面近

くで、各種の祭祀行為が行われていたという住居跡ライフサイクル（変遷過程）が推察される。

次に、各時期の遺物分布状態について概観する。土器群では、加曽利B式を中心とする後期中葉から後葉の土器群は、住居跡の北東コーナーを中心として北半部に分布が偏り、覆土の上層と下層に混在することから、覆土へ混入したものと判断される。

安行3b式土器は住居跡の東半部に分布する傾向があり、比較的床面に近い位置で出土している（第15図）。折り返し状口縁の無文土器60・61は広範囲に分布する破片の接合資料で、ほぼ床面に近い位置で出土している。安行3b式になるか、安行3c式になるかは判断が難しい。

列点文を施文する安行3c式土器は、住居跡東半部を中心として安行3b式と分布が重なりながら、覆土の中層から上層にかけてほぼ住居跡の全体から出土する傾向にある（第16図）。

沈線文施文の安行3d式土器は、炉の北西部でややまとまりを持って分布する一群と、住居跡東半部で安行3c式と分布の重なる地点で出土しているものがある（第17図）。9、10の復元個体も東半部の同じ範囲から出土している。層位的には、他の土器群と混じりながらもおよそ中層から上層にかけて出土する傾向にある。沈線文施文の一部の土器群が混然一体となりながらも列点文を施文する土器群とやや分布を異にすることから、両者における若干の時間差を示している可能性が高い。

異系統土器の天神原式系土器群については、第16図で列点文施文の安行3c式土器と共に示した。分布は安行3c式と同様の傾向を示すが、安行3d式の沈線文施文土器がまとまって分布する地点に、小形の壺形土器や円形貼付文の付く土器が出土している。これらの土器群が共伴と捉えられるのであれば、天神原式系土器の下限を示唆するものとなる。

大洞式系土器は鉢類を中心として、壺・注口土器の完形に近い土器が出土している（第18図）。大洞BC式は少なく、大洞C1式からC2式にかけての土器群が主体となっている。大洞C2式については、確定段階の土器群はほとんどなく、C

1式のモチーフの単位文化や、施文技法の弛緩化等を加味しつつ大洞C2式と判断したものであり、C1式からC2式古段階への移行期の様相を持つ土器群である。特定の分布傾向を示さないが、完形に近いもの等は祭祀的な遺構付近から出土しているものが多い。

無文土器については折返状口縁（第19図）と素口縁で刻みを持つもの（第20図）等を区分して示したが、特徴的な分布傾向は把握されなかった。

装飾品の耳飾は、全体的に分布するが、祭祀跡と推定される住居内1号土坑付近に集中する傾向があった（第21図）。

石棒・石剣類は住居跡全体に偏りなく分布するが（第22図）、住居内1号土坑から千網型耳飾とともに完形品の出土が特筆される。

獣骨の分布

獣骨は骨粉状のものを含み、細片まで含めて約1,900点が検出された。すべてが火を受けており、大半が骨粉状で出土しているが、種まで同定できたものは224点であった。

種類はニホンザル2点、ニホンジカ144点、イノシシ79点である。

ニホンザルは1点が上腕骨であり、2点ともイノシシ骨集中区から出土している。シカ・イノシシ骨以外ではこのニホンザルが唯一の種類である。数的に貴重なニホンザルの骨が、その部位やイノシシ骨集中区からのみ出土したこと等の意味については今後の検討課題となろう。

第23図にニホンジカとイノシシ骨の分布をそれぞれ分けて図示した。ニホンジカは住居内1号土坑に集中するとともに、主に住居跡南西地区に分布する傾向がある。イノシシ骨は住居跡入り口部東側付近のイノシシ骨集中区とした地点で、シカ骨をほとんど含まずにまとまって出土している。その他は、シカ骨と同様に住居跡南西区を中心として出土している。

ニホンジカ骨は鹿角が大半で、体部は9点のみで、最小個体数は2個体が推定された。したがって、シカ骨を外すとイノシシ骨が最も多いことになる。また、イノシシの頭蓋骨は下顎骨のみが出土しており、その特殊性が窺われる。群馬県太田



第13図 1号住居跡出土遺物分布図（1）

市石之塔遺跡（半田 1987）でもイノシシの下顎骨のみ焼骨が出土しており、類例として注目される。シカ骨とイノシシ骨のみがそれぞれ集中して出土する傾向は、単なる廃棄とは別の特殊な祭祀的な性格を想定することが可能となろう。

1号住居跡出土土器（第24図1～第35図289）

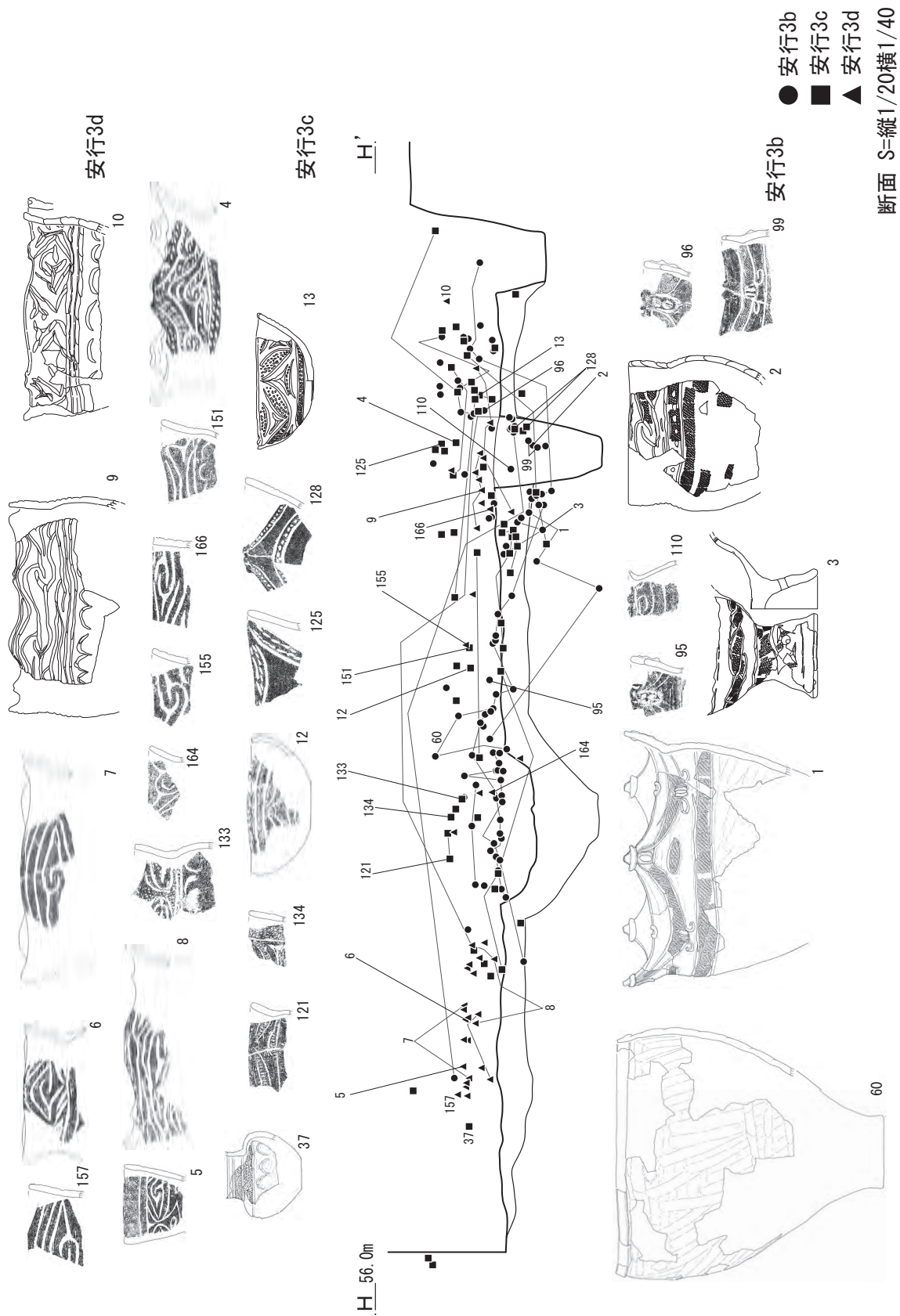
後期中葉の第I群土器

第29図73～90は後期中葉の第I群土器である。

73・83は1類の加曽利B1式土器である。73

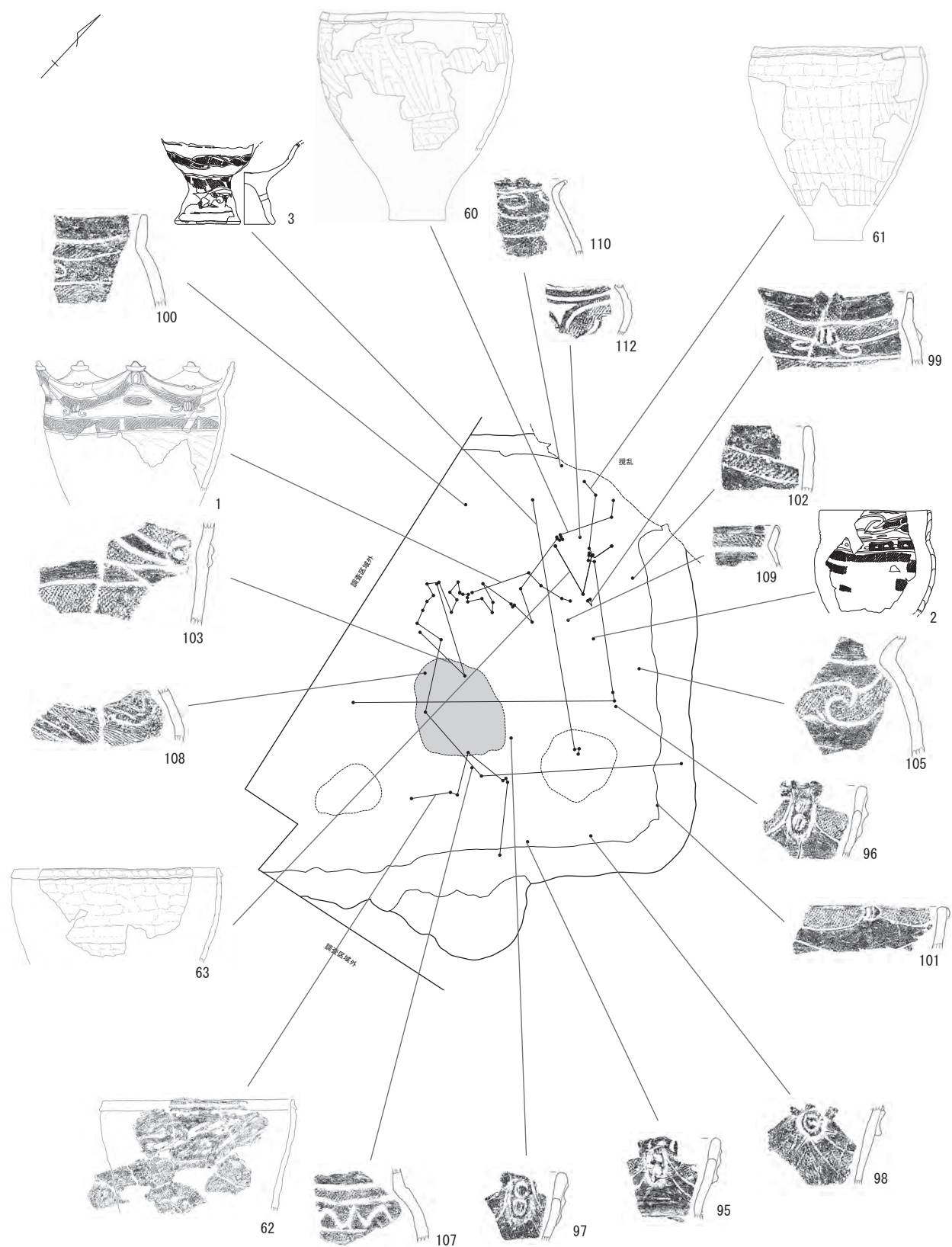
は角頭状の口唇部が内湾気味に開く深鉢で、口縁部の幅狭な平行沈線間に長方形区画を施す。内面は口唇部下に幅広の凹線状の挟り込みを施し、以下平行沈線を数段に施文する。口唇部には横位の押引状の刻みを施す。83は口縁部を沈線で区画し、胴部に太沈線の斜格子目文を施す。

74～78・80～82・84・85は2類～3類の加曽利B2式からB3式にかけての土器群である。74は3単位把手の深鉢で、把手上面に鼻穴状の2穴

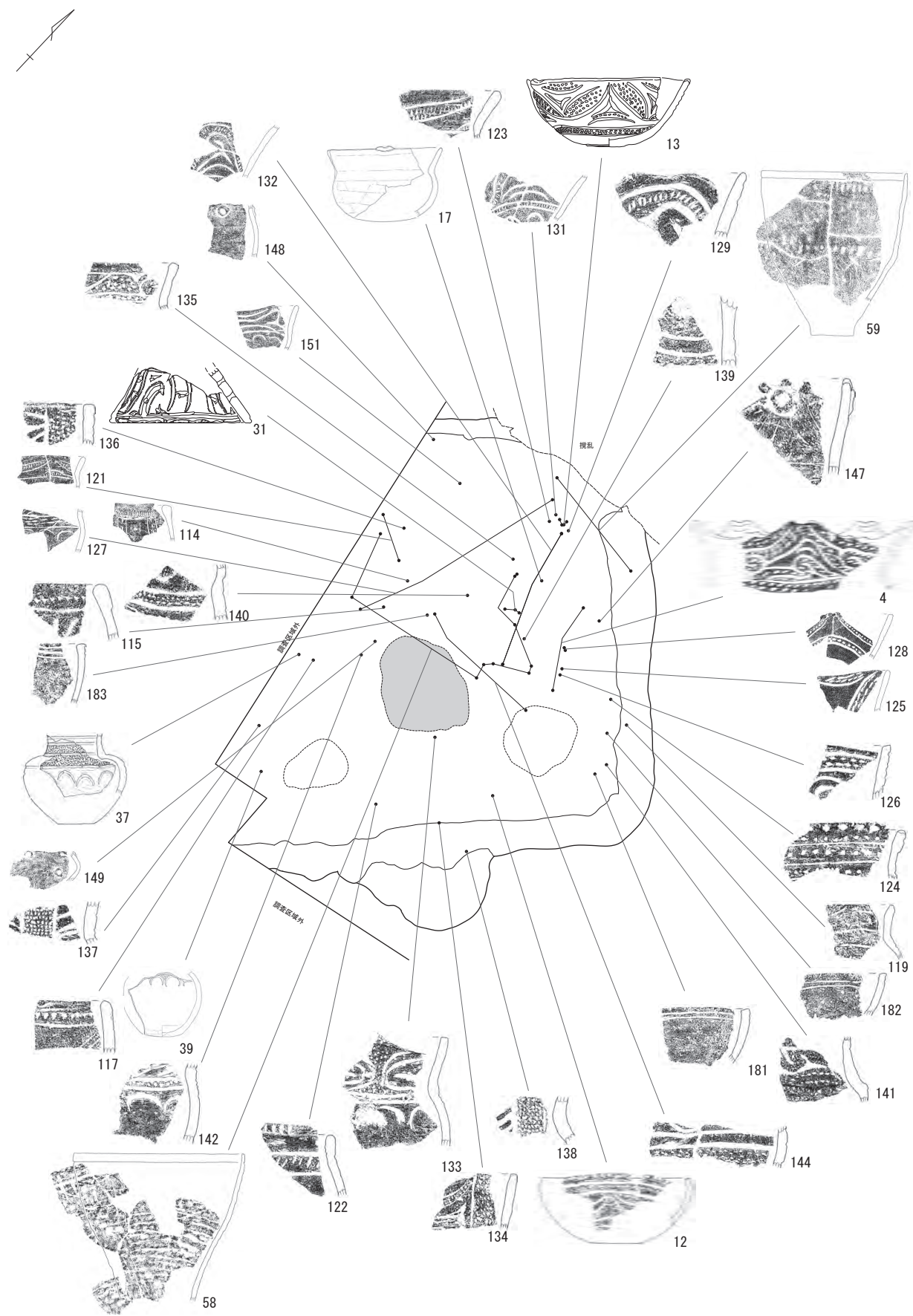


第14図 1号住居跡出土遺物分布図(2)

III 発見された遺構と遺物

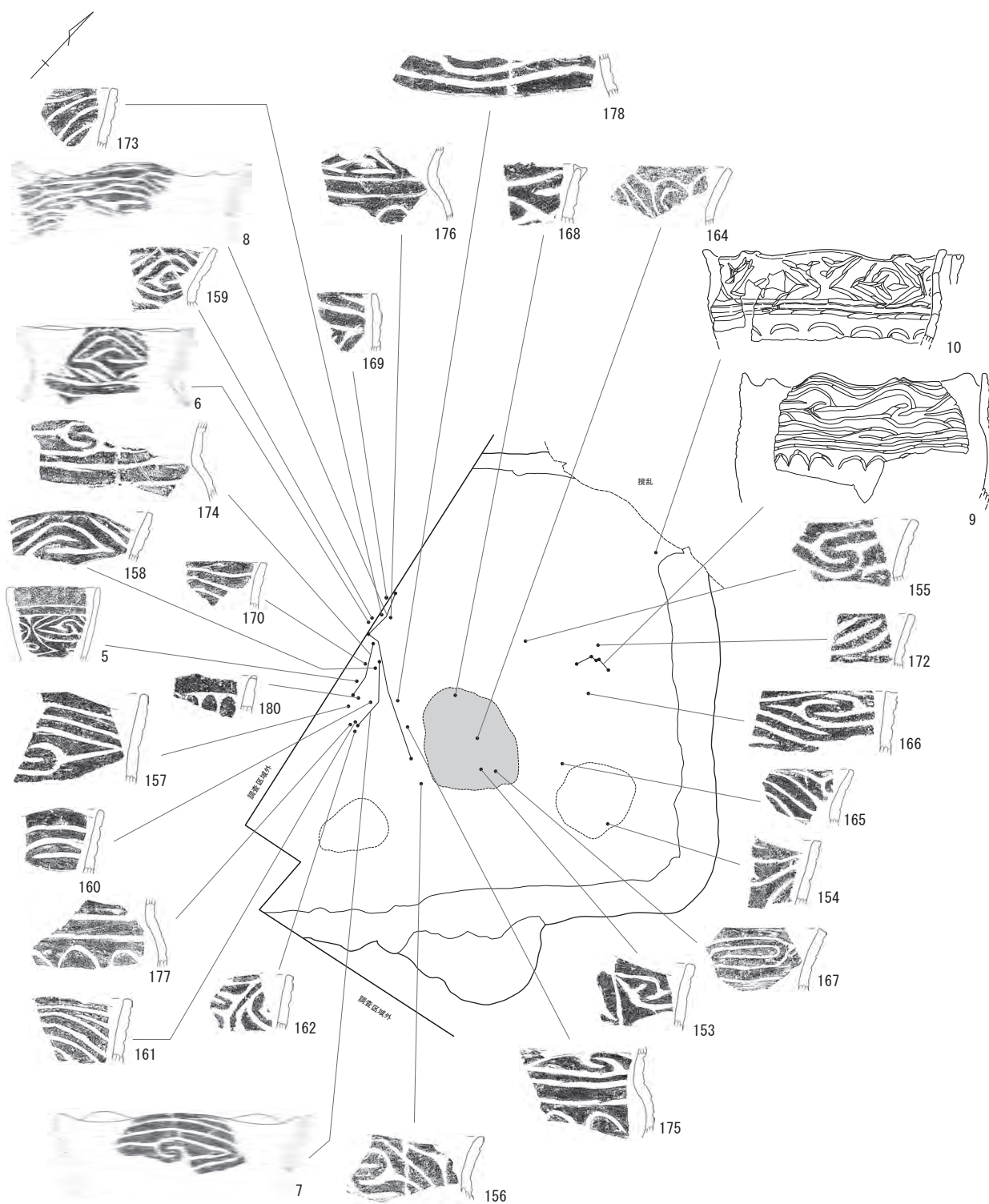


第15図 安行3b式土器分布図

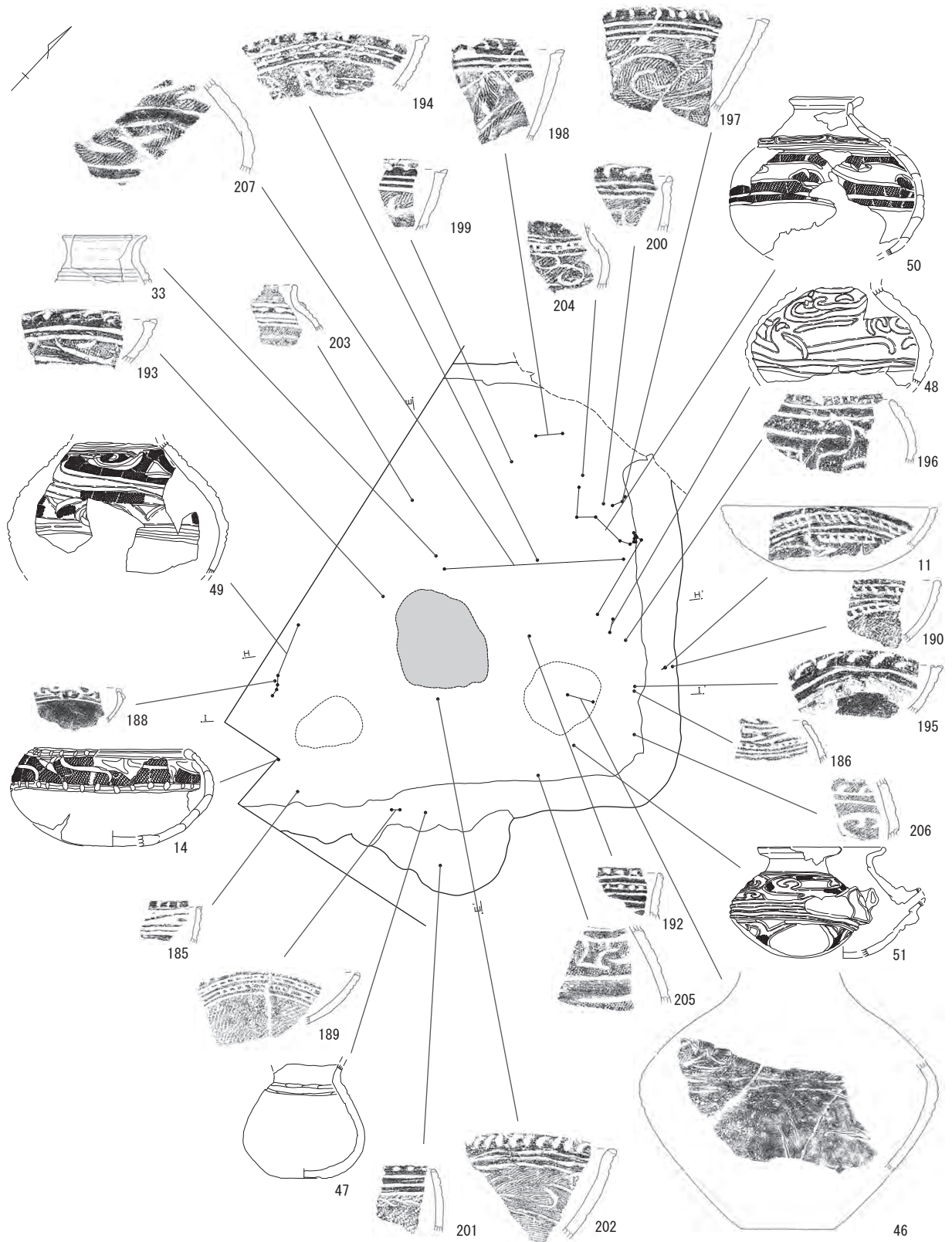


第16図 安行3c式土器分布図

Ⅲ 発見された遺構と遺物

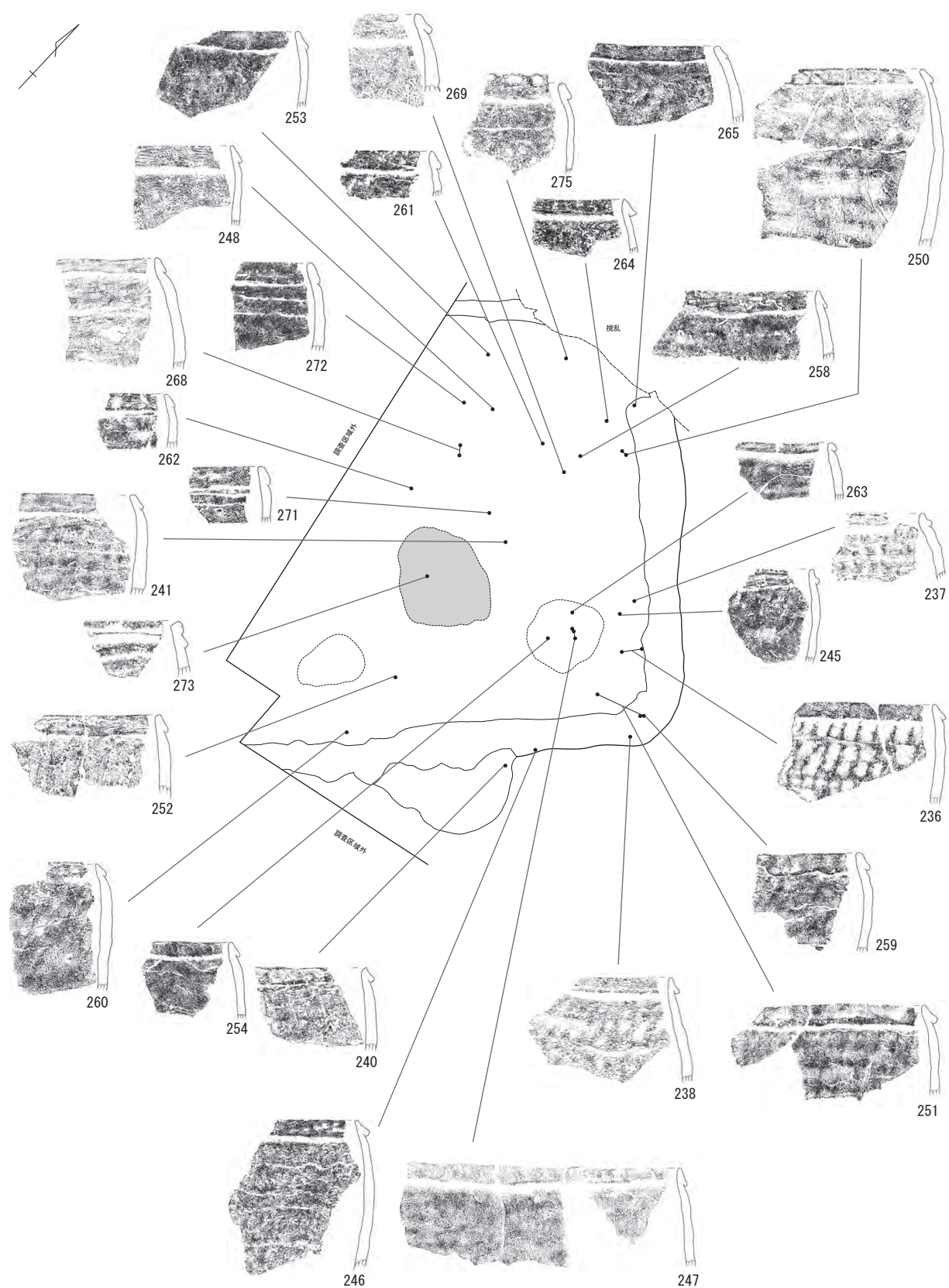


第17図 安行3d式土器分布図

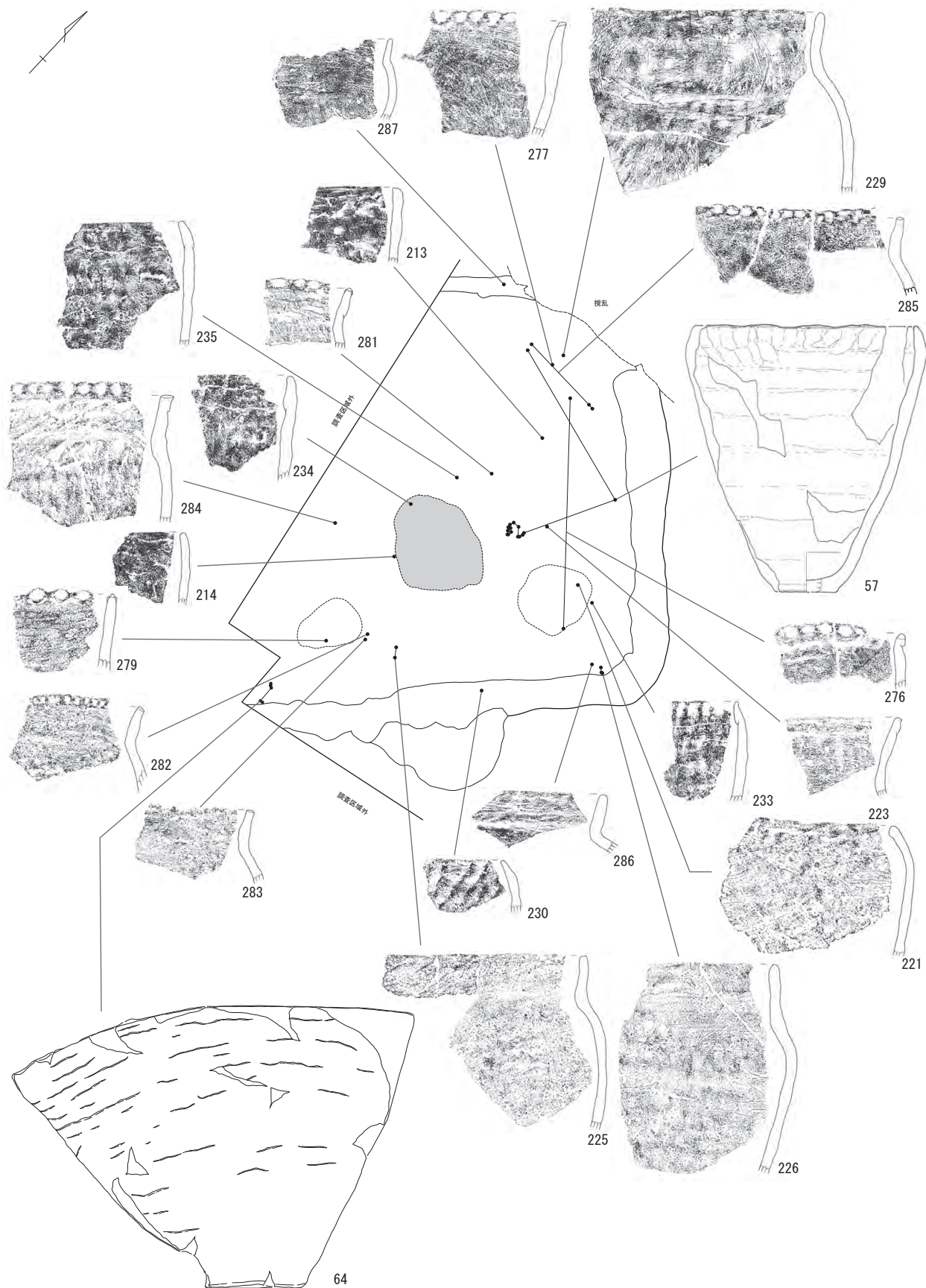


第18図 大洞式系土器群分布図

III 発見された遺構と遺物

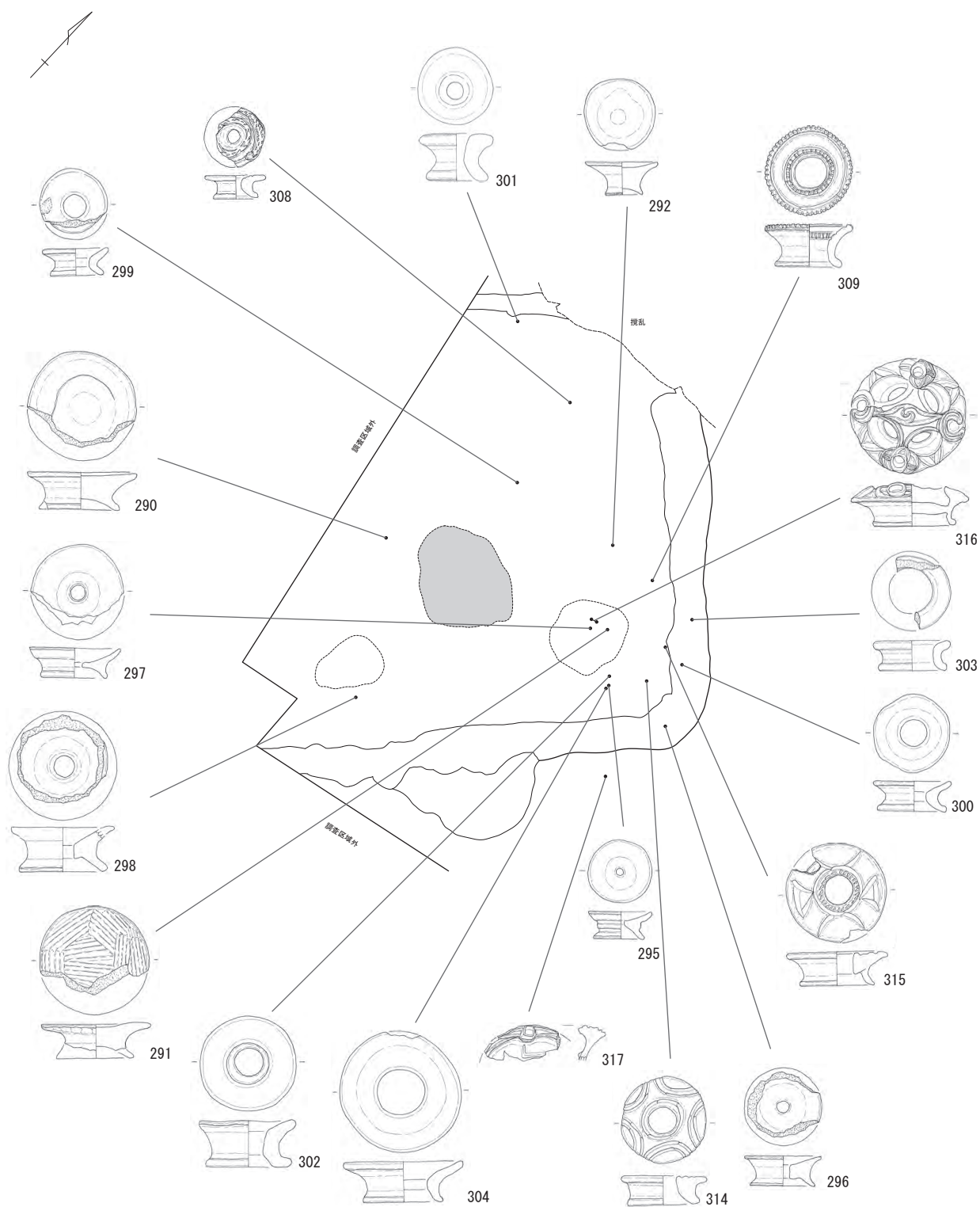


第19図 晩期無文土器分布図（1）

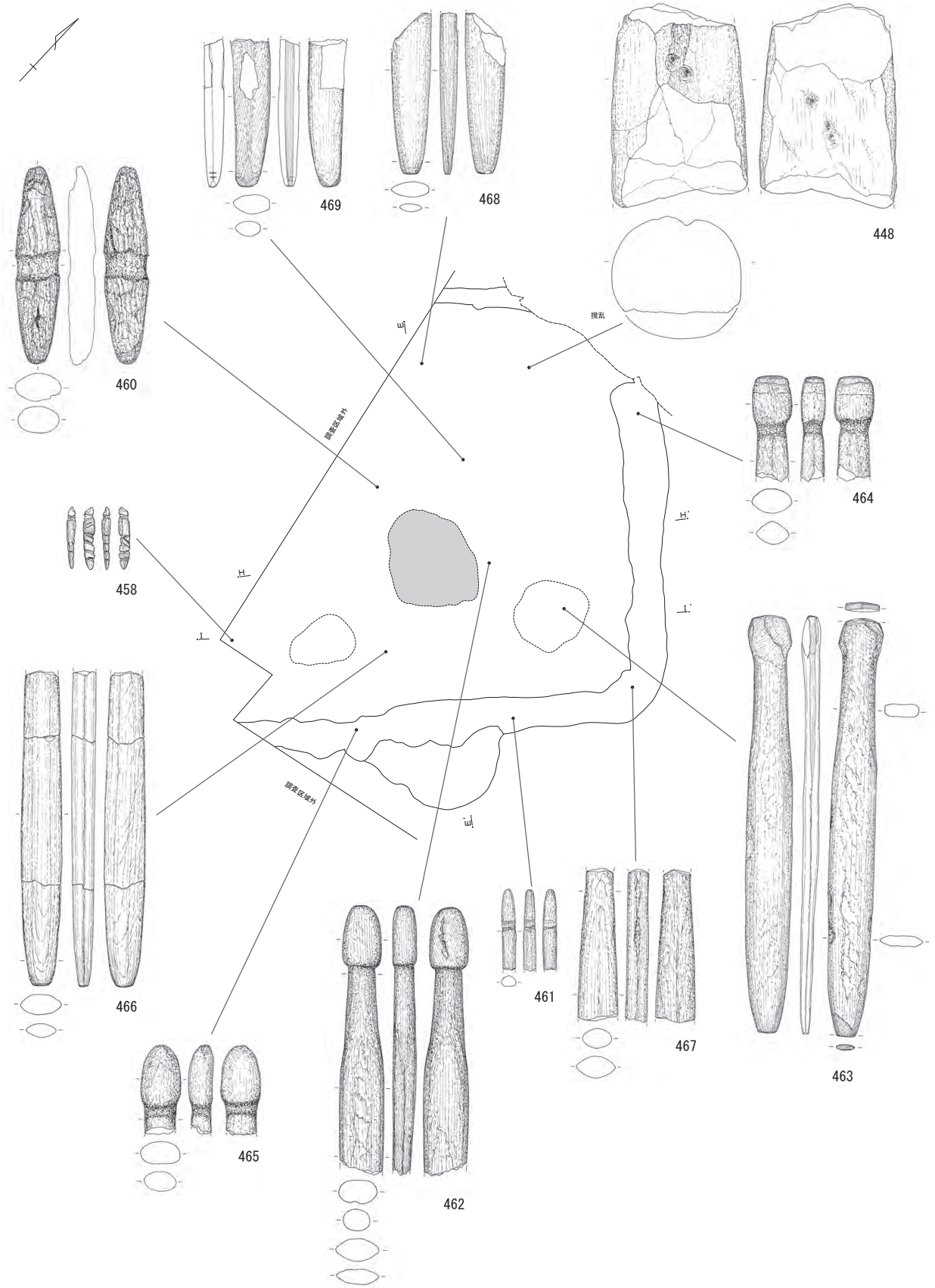


第20図 晩期無文土器分布図（2）

Ⅲ 発見された遺構と遺物

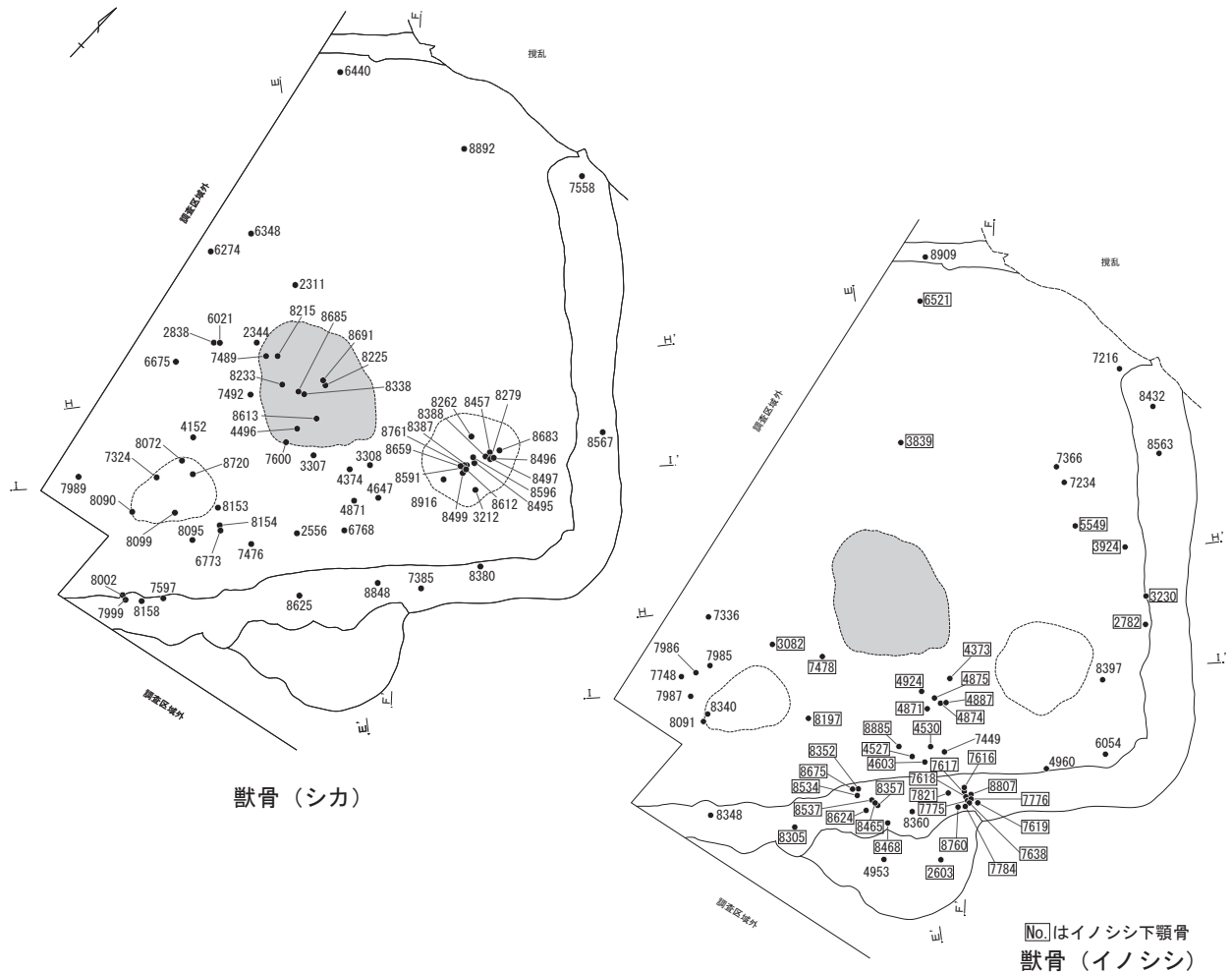


第21図 耳飾分布図



第22図 石棒・石剣分布図

III 発見された遺構と遺物



第23図 シカ・イノシシ骨分布図

を持ち、波頂部下に3本沈線を垂下する。75・76は同一個体である。口縁部の内湾が強い波状口縁深鉢で、口縁部無文帯の上下区画帯に刻みを施し、口縁部を良く研磨する。77・78は鉢形土器で、77は口縁部に円孔を起点とした磨消弧線文を施文し、円孔下の胴部に細沈線の綾繰区切文を垂下する。地文に縄文は見られない。78は口縁部の平行沈線間に、付加条縄文を充填施文する。80・81は胴部破片で曲線的な磨消縄文のモチーフを持つ。80は胴部区画沈線に沿って刺突文を、地文に単節RLを施す。82は無文の口縁部が内湾気味に開く深鉢で、胴部に斜行条線を施文する。内面の屈曲部に平行沈線を施文する。84は口縁部に2本の押圧太隆帯を廻らす紐線文系の土器で、胴部に平行沈線のコンパス文を垂下する。85は口唇部外端に隆帯を添付して肥厚させ、押圧状の刻みを施す。胴部は矢羽状の沈線文を施文する。80・81は3類、

82は4類の可能性もある。

79・86～90・145は4類の曾谷・高井東式である。79は浅鉢で、内湾する口縁部に2段押引状の押圧を施した山形突起を持つ。86・88は大波状口縁深鉢で、86は円柱状の把手を持ち、88は内湾する口縁部を波状隆帯で区画する。87は短く内折する無文の口縁部が開く深鉢で、肩部に押し潰したボタン状の貼付文を持つ。89は口縁部の貼付隆帯に押圧状の刻みを施し、胴部に細かな斜行条線を施文する。90は口唇部に刻みを施す隆帯を巡らす平口縁深鉢で、口縁から垂下した隆帯で口縁部文様帯を縦位区画する。145はやや内折する口縁部に縦位の貼付文を施す無文の深鉢である。

後期後葉の第Ⅱ群土器

93は第Ⅱ群2類安行2式の注口土器である。口縁部に短い鰭状把手が付き、その下部に横刻縦瘤を配する。肥厚する口縁部と胴部には、単節R

L 縄文を施文する。

91・92 は 3 類の異系統土器で、沈線間に刻みを入れる刻文帯で区画する新地式系土器である。

晩期前葉の第Ⅲ群深鉢形土器

94 は第Ⅲ群 1 類の大波状口縁深鉢で、波頂部に環状で身厚の鰭状把手が付き、把手の外側から内面にかけて 3 本沈線を施文する。以下に縦位の 2 本沈線を施す縦瘤を配置する。晩期初頭の所産と思われる。

第 24 図 1～3、第 29 図 95～113 は第Ⅲ群 2 類の安行 3 b 式土器である。1・95～100 は大波状口縁深鉢である。1 は 5 単位の波状口縁で、尖頭状頂部に隆帯を鉢巻きし、下部に押引状の押圧を施す縦長の貼付文を施す。口縁部文様帯は、口縁部を無文とし、胴部区画線付近の波底部にある貼付文まで波頂部から垂れ下がる弧状の帯縄文で三角形の区画を施すが、胴部区画線には接していない。その三角区画内の波頂部下には横長の磨消楕円文を配し、縦刻横瘤へと垂れ下がる帯縄文の下側沈線は、貼付文脇で逆巻きの左右に跳ね上がる渦巻文となっている。胴部は幅広の帯縄文で区画し、以下整形痕を残す無文となる。口縁部の波底部には、B 突起状の貼付文が付く。縄文は単節 R L である。推定口径 34.2 cm、現存高 22.5 cm を測り、現存率は約 40% である。99、100 は 1 と同一個体である。

95 は緩い波状を呈し、刻みのある短い鰭状突起が付き、押圧を施す 2 段の舌状瘤を配する。口縁部は瘤脇から垂れ下がる 2 本沈線で三角形区画を構成するものと思われ、胴部を沈線で区画する。垂れ下がる上側の沈線は口縁部区画を兼ねており、細かな L R 縄文を施す。本来 2 本沈線間が帯縄文となるはずであるが、地文と充填縄文部分との関係が曖昧になっている。96・97 は同一個体で、波頂部下の 2 段舌状瘤には平行沈線状の 2 本沈線を施文する。口縁部を弧状沈線で区画し、L R 縄文を施文する。98 は尖頭状の波頂部に鉢巻き状に隆帯を貼付し、中央の窪む円形貼付文を施文する。円形貼付文から 2 本沈線が垂れ下がり、上側沈線が口縁部区画、下側沈線が帯縄文区画となり三角形区画を構成するものと思われる。不明瞭で

はあるが区画内に沈線が垂下し、三角形を 2 分する可能性があり、姥山Ⅱ式の影響を受けている可能性がある。区画内には付加条縄文であろうか、細かな線状の無節縄文が観察される。

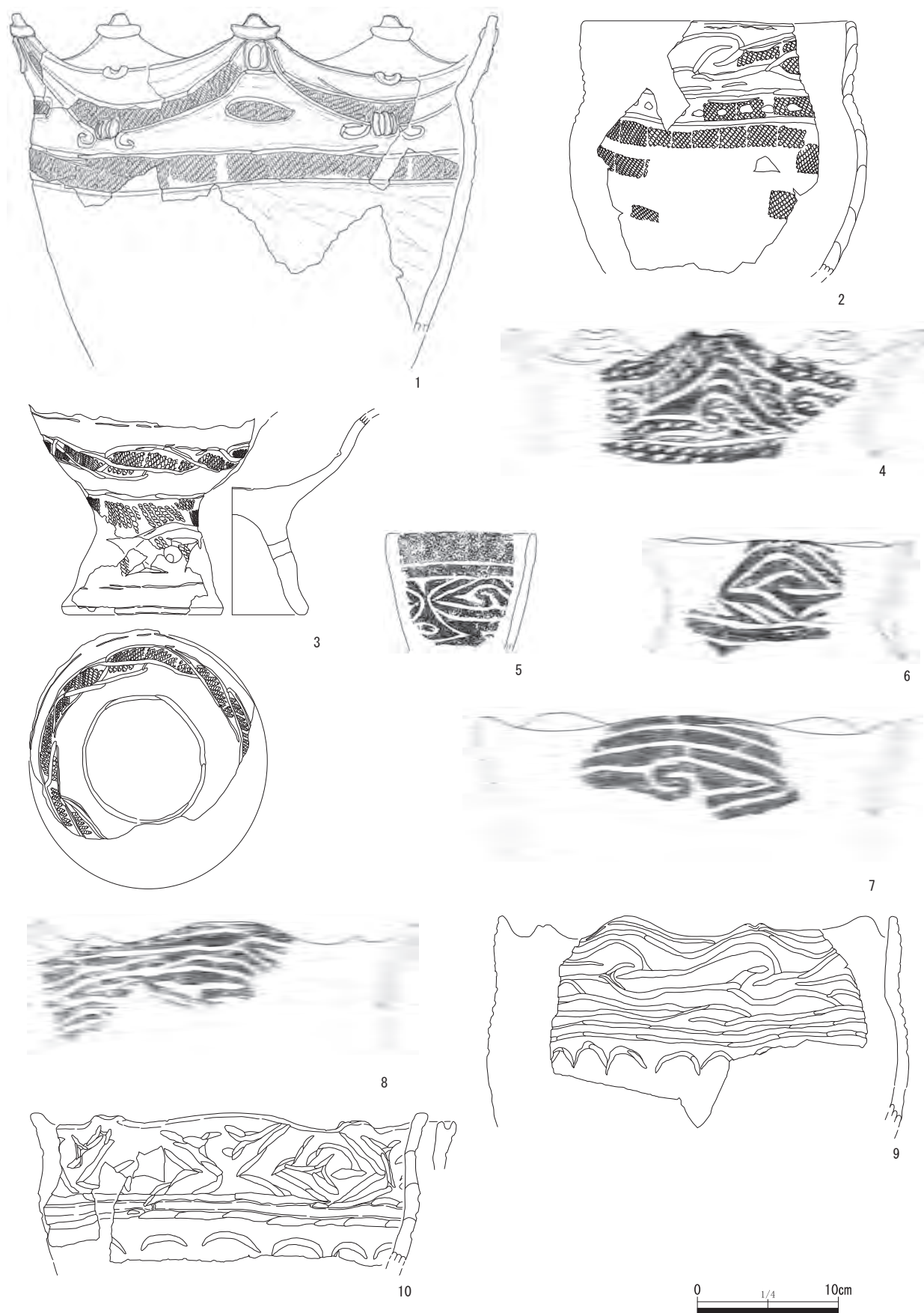
2・101・102 は平口縁深鉢である。2 は胴部で括れ、内湾気味の口縁部が立ち上がり、下半部が膨れる器形の平口縁深鉢で、刺突文を伴う帯縄文で胴部を区画し、上半部に L R 縄文を充填する帯状入組文を施文する。胴部はまばらに L R 縄文を施文する。推定口径 18 cm、現存高 17.9 cm を図る。101 は口縁部の縦刻横瘤を起点に弧状沈線を連結させて口縁部を区画し、横瘤下に菱形状の区画を構成するように弧線文を重ねているようである。口縁部区画のみ単節 L R 縄文を施文する。102 は単節 L R 縄文を施文する帯状文で弧線を描くように施文し、三角形もしくは菱形状の区画を構成するものと思われる。

103～105・107・108 は胴部破片である。103 は胴部が直線的な深鉢で、中央の窪む円形貼付文を基点に無文帯で三角形区画等を構成するようである。縄文は単節 L R である。104・105 は頸部の括れが強く、胴部の張る器形か、壺形土器の可能性もある。104 は中央の窪む円形貼付文を基点として平行沈線で三角形区画等を構成するようであり、文様帯内に縄文施文はない。平行沈線による胴部区画と胴部に縄文を施文するが、区画内には単節縄文 L R、胴部には撚り戻し状の無節 L 縄文を施文する。105 は頸部を沈線で区画し、胴部に三叉状文と渦巻文で構成される帯状入組文を施文する。縄文は単節 L R である。

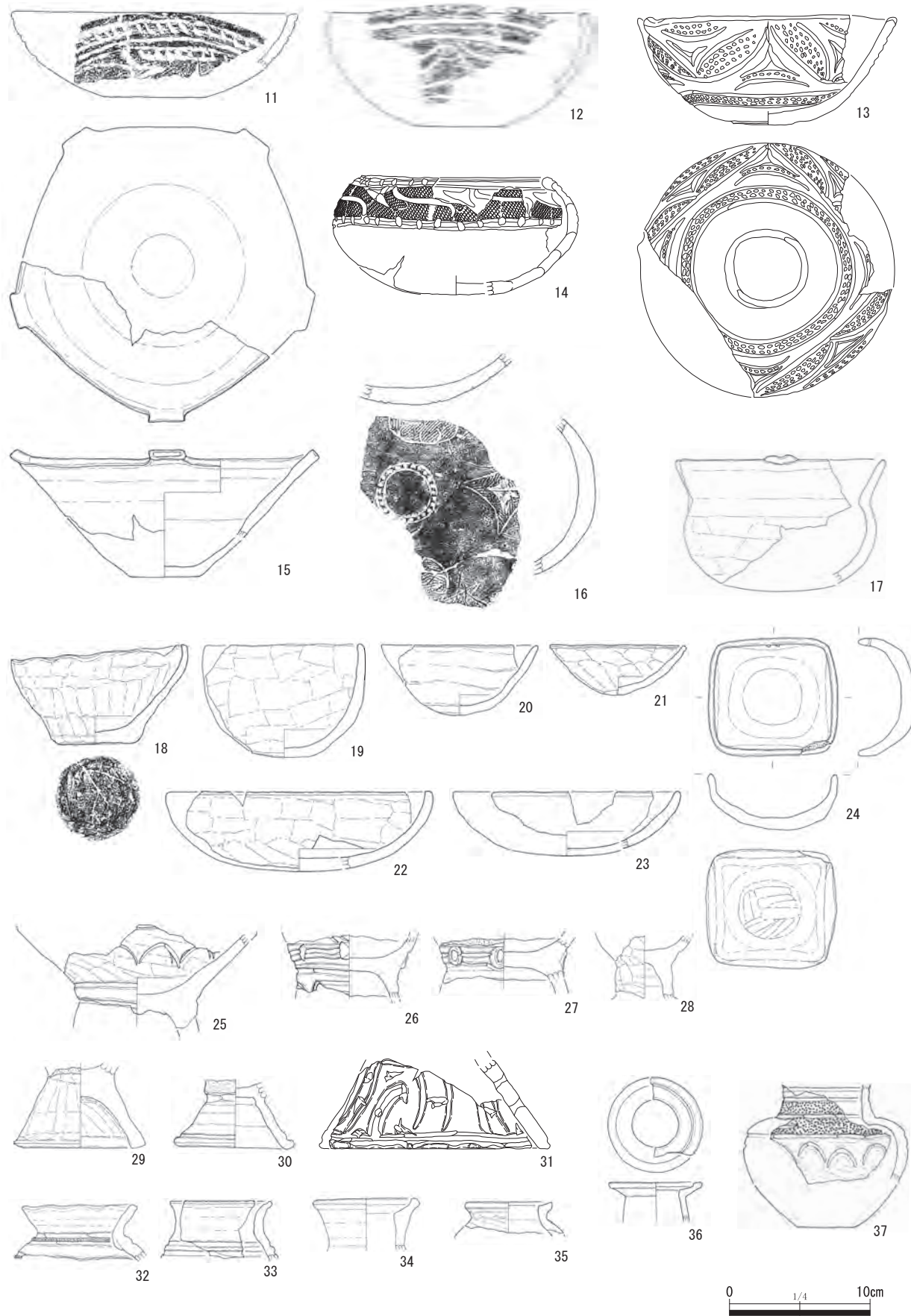
晩期中葉の第Ⅳ群深鉢形土器

4・119～127 は沈線施文や、沈線区画内に列点文を施文する第 1 類の安行 3 c 式土器である。4 は 5 単位の波状口縁を呈するものと思われ、波頂部から垂下し、波底部に入組部を持つ帯状列点入組文で三角形区画を構成し、三角形区画内にも帯状列点入組文を施文する。口縁部と胴部も帯状列点文帯で区画し、波頂部下の三角形区画内には弧線文を施す。列点文は入組部では単列、区画線部では複列に施文されている。波頂部の裏面には、山形に沿って幅広の凹線状の窪みが存在する。推

Ⅲ 発見された遺構と遺物

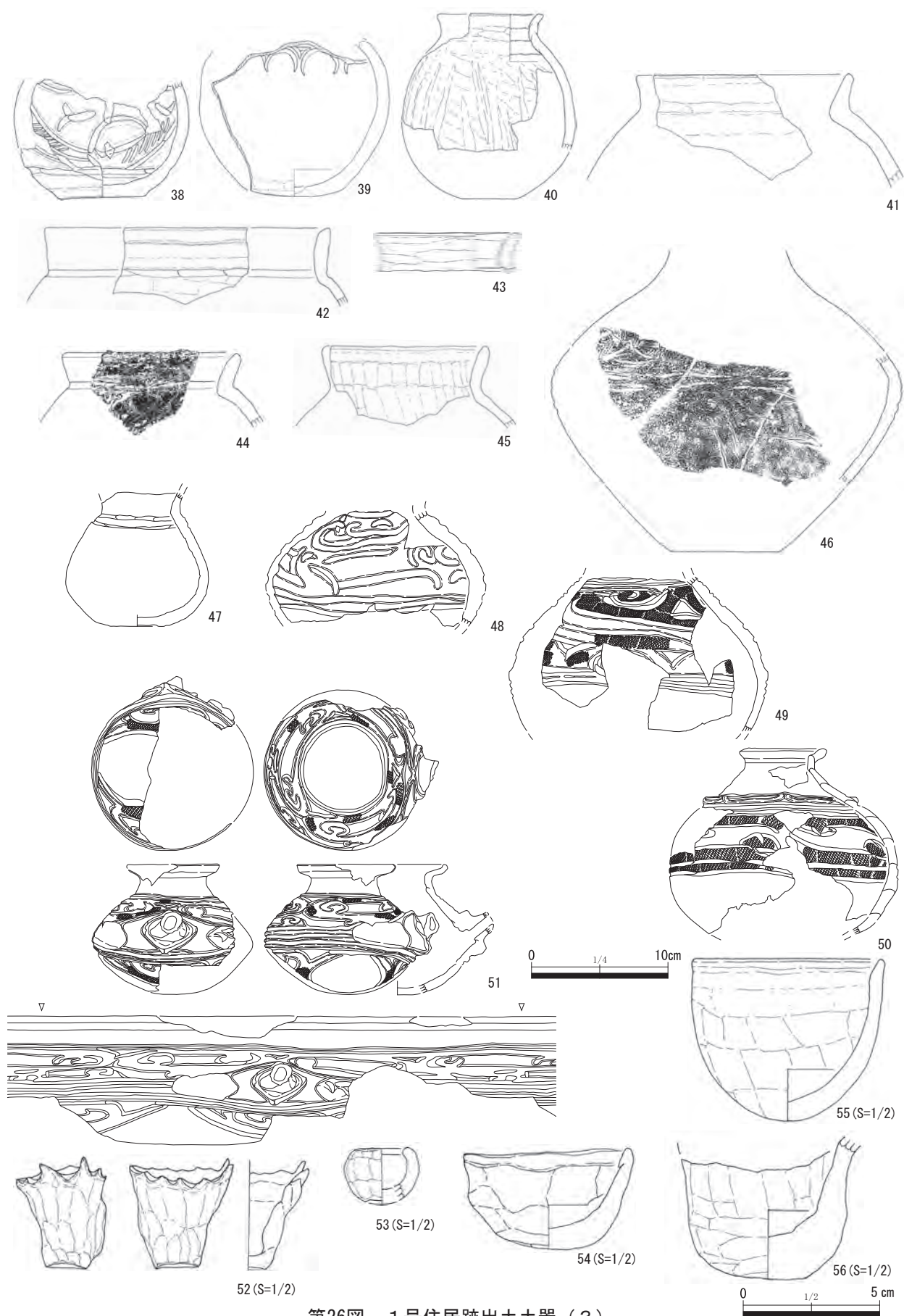


第24図 1号住居跡出土土器（1）

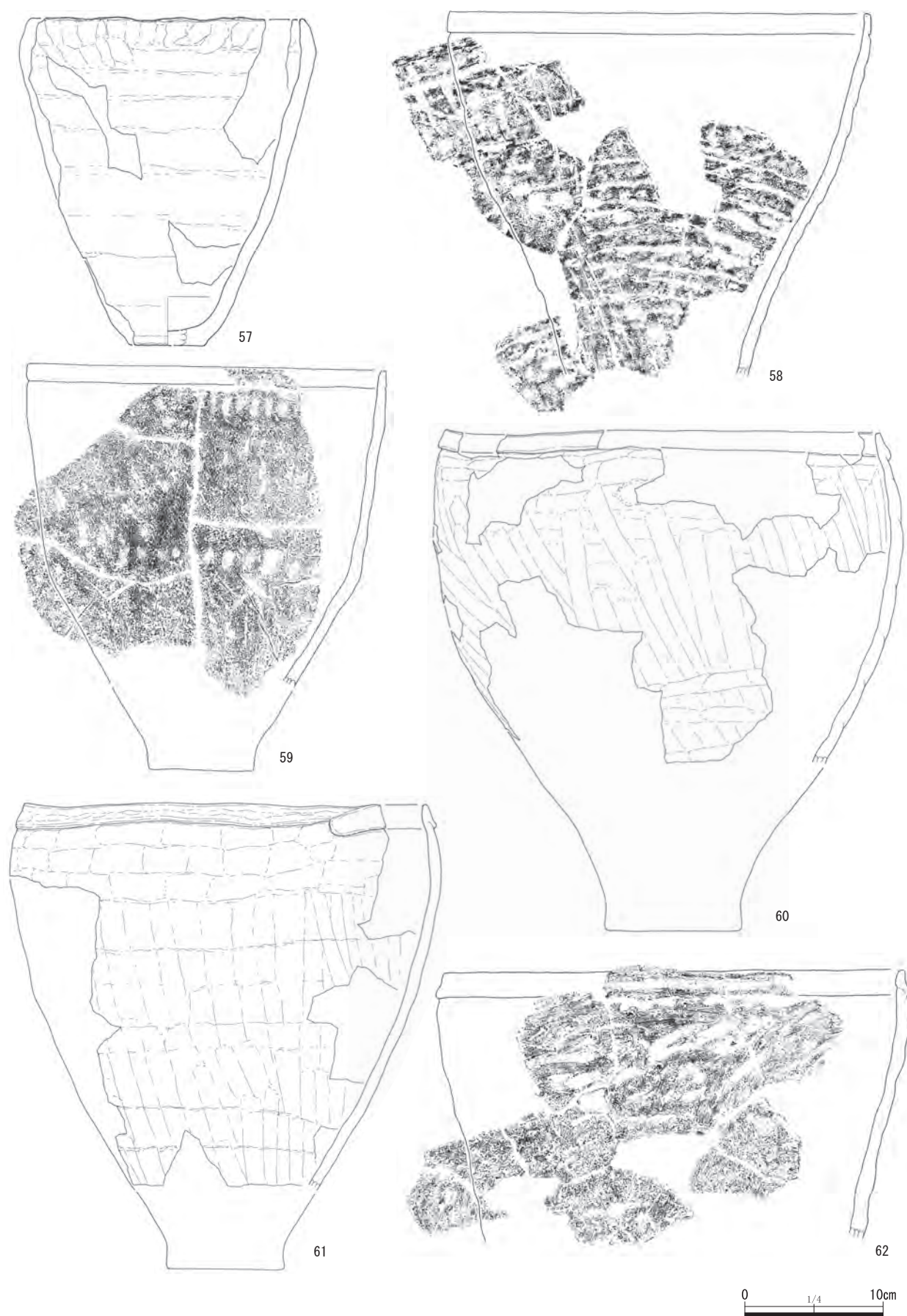


第25図 1号住居跡出土土器（2）

Ⅲ 発見された遺構と遺物

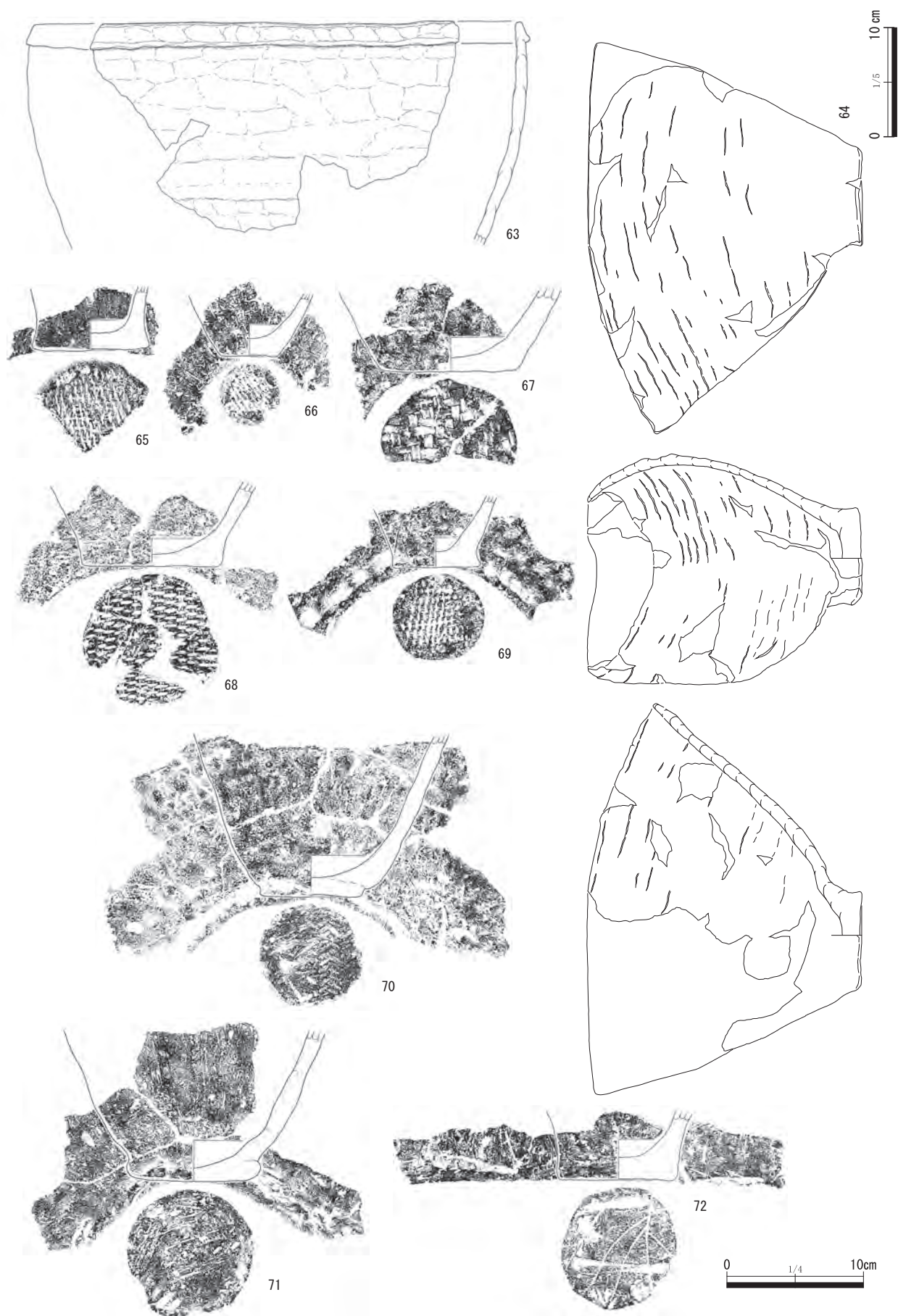


第26図 1号住居跡出土土器(3)



第27図 1号住居跡出土土器（4）

III 発見された遺構と遺物



第28図 1号住居跡出土土器（5）

定口径 28.3 cm、現存高 9.5 cmを測る。

119 は口縁部が立ち気味に外反し、胴部の張る平口縁深鉢形土器で、胴部を平行沈線で区画して口縁部に弧状沈線を連ねている。120 は口縁部が内湾気味に立つ平口縁の深鉢か鉢で、口縁部を横位沈線で区画し、胴部に沈線による渦巻状の曲線文を施文する。

121・123 は外反する口縁部を文様帯とし、口縁部を沈線の三日月状区画文で大きく三角形状に区画し、三日月文内に押引状の列点文を施文する。121・123 とも胴部区画に接して三角形区画の底辺部に弧状の区画文を施す。124 は平行沈線間の単列押引列点文であるが、123 は 2 列の押引列点文を充填施文する。不明瞭であるが、121 の胴部区画線内には 2 列の押引列点文が施文されている。

122 は口縁部が内湾する器形で、丸頭状の口唇部に横位の押引状刻みを単位文的に施文し、やや括れる頸部を平行沈線で区画して、縦長の押引状列点文を充填する。

124 は外反する口縁部を平行沈線で区画し、沈線間に単列の刺突文列を施文する。口唇部には口縁に平行する押引状の刻みを施す。125 は口縁部が外反する平口縁深鉢で、口縁部に弧状区画と三角形区画になるとと思われる帯状列点文区画が施されており、2 列の押引列状文を施文する。126 は外反する口縁部を平行沈線で区画し、2 列の列点文列を施文するもので、胴部に刺突文を伴わない沈線の曲線文を施文する。127 は胴部破片で、胴部を 2 列の刺突文列を挟む平行沈線で区画し、下部に上向き弧線文を連続させる。

6～10・151～178 は太く削り込むような沈線が入組状三叉文や弧線文を施文する、安行 3 c 式から安行 3 d 式への移行期の土器群及び安行 3 d 式を中心とする第 2 類土器である。6～10 は胴部が括れ、口縁部が外反する緩い波状口縁の深鉢である。6 は波頂下の菱形状区画内に、上下に入組んで菱形状となる三叉文を施文する。推定口径 17.5 cm、現存高 8.2 cmを測る。7 は波頂下の横長の菱形区画内に、剣先状に入組む菱形状の三叉文を施文する。推定口径 29.5 cm、現存高 7.2 cmを測る。8 は山形と小突起の把手が交互に配され

る波状口縁を呈し、胴部の菱形状となる区画内に入組文を施文するものと思われるが、区画や三叉文が崩れており全体の構成が不明瞭である。推定口径 26.2 cm、現存高 6.2 cmを測る。9 は多単位の波状を呈するものと思われ、口縁の波状に沿った沈線で口縁部を区画し、波頂下に入組部が来るように横位連結する入組状三叉文を施文する。横位連結する入組状三叉文の下部は、2 本沈線の胴部区画文との間に細長い入組状三叉文を施文するが、構成が崩れている。胴部には上向弧線文を連続施文する。推定口径 27 cm、現存高 14.9 cmを測る。10 は緩い波状と双頭突起が交互に配される波状口縁を呈し、胴部を 2 本の太い継ぎ足し状沈線で区画する。上半部は口縁の波状とは相関しない菱形状区画を施し、入組状三叉文を施文するが、雑で構成の乱れたモチーフとなっている。下半部には直線状となる上向弧線文を連続施文する。推定口径 26.4 cm、現存高 10.8 cmを測る。

151～163 も緩い波状口縁を呈し、三叉状入組文を基本とするモチーフを施文するものである。151 は波頂部下に菱形状区画を構成する沈線の端部が連続して入組状三叉文を構成する。胴部には上向弧線文を施文する。152 は口唇部に小突起を持ち、角頭状の口唇部上に沈線を廻らしている。153 は波頂部から垂下する沈線と一体となって、帯状入組文が構成される。154 は口縁の波状に合わせて、沈線モチーフが施文される。155～157 は刺股状入組三叉文を、158～160 は菱形区画内に菱形状入組三叉文を構成する。161 は沈線が多条化しており、162 は複雑なモチーフ構成となっている。163 は口縁部が折り返し状を呈し、沈線区画された胴部に波状沈線を施文する。

164～173 平口縁深鉢である。平口縁土器は概して文様帯幅が狭い傾向にあり、164 は三角形区画内に三叉文 2 個を合わせた円形状のモチーフを構成する。165 は三角形区画内に入組状三叉文を、166 は横長の入組状三叉文を、167 は横長楕円状の渦巻状の構成となる三叉文を施文する。168～173 は褶曲的な波状沈線で三角形の区画を構成するものと思われるが、部分的に三叉文等を施文する。174～178 は胴部破片で、いずれも胴部を

Ⅲ 発見された遺構と遺物

2本沈線で区画し、下半部には上向弧線文を施文する。174・175は横長に入組む三叉文を、176は三角形状を構成する三叉文を施文する。179・180は角頭状の口唇部が開く深鉢もしくは鉢と思われる、180の口唇部には小突起が付く。両者とも口縁部にI字文状のモチーフを施文する。179は脚部の可能性もある。

106・114～118は粗製系土器である。106は肥厚する口唇部端と頸部に押引の三角形状の刻列を施す。後期末葉であろうか。114～118は肥厚する口唇部もしくは口縁部下に連続の刺突文列を施して区画するものである。114は幅広の爪形文状の押引文で口縁部を区画し、115～117は沈線で口縁部を区画し、口唇部に押引刺突文列を1条施文する。118は口縁部の区画が無く、口唇部に刺突文列を施文する。114は列点文を挟む縦位の平行沈線で胴部を縦位区画し、115・116は太沈線でモチーフを描き、117は平行斜沈線を施文する。118も斜行沈線を施文する。いずれも晩期前葉から中葉を中心とする粗製系の土器であろう。

Ⅲ・Ⅳ群の深鉢以外の土器群

台付鉢類

3は口縁部を欠損する台付鉢である。脚部に円孔と三角形透かしを持ち、胴部に帯状入組文を施文し、LR縄文を充填施文する。底径11.4cm、脚部高9cm、鉢部最大径16.8cmを測る。安行3b式である。25～31は台付鉢の脚部である。25は鉢部の胴に上向弧線文が見られ、26・27は接合部に隆帯が巡り、隆帯上に26は刻み、27は円形貼付文を施文する。26の脚部には透かしが見られる。28は脚部が短く、筒状を呈する。29～31は脚部が開く器形で、31は2本対沈線の縦位モチーフに、円孔や三角形の細かな透かしが施される。推定底径は、29が9.3cm、30が8.4cm、31が16cmを測る。いずれも晩期中葉の安行3c式を中心とした時期と推定される。

鉢・浅鉢類

12・13・15～24・111・113・128～132・181～183は鉢・浅鉢類である。15は四角形状の箱状突起が5単位に付く浅鉢で、晩期前葉から中葉にかけてのものと思われる。推定口径22cm、現

存高6.2cmを測る。

12は内湾する口縁が開く浅鉢で、口縁部と胴部を平行沈線で区画し、胴部に2本沈線の弧状区画文を施す。胴部の弧状区画文以外の部分に刺突文列を施文する安行3c式である。推定口径18cm、現存高5.9cmを測る。13は安行3c式の浅鉢で、沈線の円形区画で底部を作出している。胴部下端を平行沈線で区画し、体部を弧線で大きく4単位に区画して、胴部区画線との間に三角形状の区画を4単位で構成する。体部を弧状に区画する弧線に半弧状の沈線を付加して双葉状の区画文とし、内部に三角形状の区画を構成する。都合上下に区画された8箇所の三角区画内には、それぞれ底辺部分に弧線を伴う三叉文が配されている。上側の三叉文の底辺部弧線と口縁部の間には刺突文が施されるが、下側の三叉文では底辺部弧線文と三叉文の間に刺突文が施されている。器面全体が4単位分割で、8単位の三角区画で構成されており、沈線区画内にやや大きな刺突文が多数施文されている。複列の刺突文は天神原式との折衷であろうか。口径17.4cm、器高7.8cmを測る。16はやや細長いラグビーボール状の鉢と思われる、刺突を挟む円形の平行沈線で底部を区画する。胴部には磨消縄文で楕円形や星形状の単位文を施文している。単位文が大洞C1式に類似することから、安行3c式となろうか。

111は低い山形把手を持つ浅鉢で、把手中央部に円孔を穿ち、裏面に盲穴をつなぐ弧状隆帯を沿わせている。把手頂部は連続したB突起を3個連ねて小波状を呈し、表面には入組文であろうか縄文施文の沈線曲線文を描く。113は橋状把手の付く鉢形土器の胴部と思われるが、時期不詳である。181～183は内湾気味の口縁部が開く鉢で、口唇部が角頭状を呈し、181・182は口縁部に平行沈線、183は3本の平行沈線を施文する。晩期中葉であろう。

17～24は無文の鉢及び浅鉢である。17は口縁部が外折し、丸い体部へと移行する鉢で、口唇部にB突起が付く。推定口径14.8cm、現存高8.8cmを測る。18は内湾する口縁部が開く鉢で、口縁部が小波状を呈する。口径12.4cm、底径5.3cm、器高7.0cmを測る。19は口縁部が内湾気味に立

つ壙形土器で、推定口径 11 cm、器高 8 cmを測る。20・21 は口縁が開く浅鉢で、20 は推定口径 11 cm、現存高 5 cm、21 は推定口径 9.6 cm、現存高 3.5 cmを測る。22・23 は口縁が内湾して開く浅鉢で、22 は推定口径 18.8 cm、現存高 5.4 cm、23 は推定口径 16 cm、現存高 4 cmを測る。24 は正形状の小鉢で、一辺 8.5 cm、器高 3.9 cmを測る。

壺類

32 ～ 36・38 ～ 45 は各種の壺類である。32 ～ 37 は頸部で括れ、口縁部が外反する小型の壺類である。32 は口縁部が細かく波打ち、縄文を挟む平行沈線で頸部を区画し、膨らむ胴部へと移行するものであろう。推定口径 8.1 cm、現存高 3.6 cmを測る。安行 3 b 式であろう。33 は頸部を平行沈線で区画するもので、推定口径 7.2 cm、現存高 4 cmを測る。34 は口縁部内面に陵を持ち、推定口径 7.6 cm、現存高 3.6 cmを測る。35 は頸部が短く、球形の胴部へと移行し、推定口径 6.1 cm、現存高 2.1 cmを測る。36 は受け口状口縁で筒状の頸部を呈し、推定口径 6.4 cm、現存高 2.9 cmを測る。

38 ～ 45 はやや大型の壺で、38・39 は有文の壺である。38 の全体構成は不明であるが、弧線の組み合わせと三叉文の充填文等を施文する壺で、沈線間に刺突文ではなく短沈線を施文する。最大径 12.5 cm、底径 6.2 cm、現存高 8.7 cmを測る。安行 3 c 式であろう。39 は壺形土器の胴部を縦に分割して、横型の鉢として利用しているものである。土器の割れ口は小波状口縁状に磨かれている。破片の端部に上向弧線文が施文されている。推定最大径 13.6 cm、現存高 11.4 cmを測る。安行 3 c 式から 3 d 式であろう。

109・110 は外折の強い口縁部で、109 は口唇部に B 突起の一部が残り、口縁部に単節 R L 縄文を施文する。110 は口縁部が先細り状に短く外反し、口唇部に B 突起を持つ。口縁部を沈線で区画し、区画線に接して胴部に沈線の渦巻状入組文を施文しており、L R 縄文の帯縄文で胴部を区画する。胴部区画沈線も渦巻文の構成要素の可能性がある。107 は頸部と胴部を帯縄文で区画し、胴部に太沈線の波状文を施文する。108 は不明瞭であるが、帯状の細長い三叉文でモチーフを構成し、擦

糸文 R を羽状構成になるように充填施文する。112 は注口土器か壺の胴部破片で、印刻状の三叉文と帯状入組文を施文し、L R 縄文を充填施文する。

晩期の第 V 群異系統土器群

天神原式系土器群

5・37・133 ～ 150 は第 V 群 1 類とした天神原式系土器群である。文様区画内に細かな刺突文を多量に施文することや、中央部が窪む円形貼付文を施文することを特徴とする土器群である。文様構成は安行 3 c 式・3 d 式に共通するものが多いものの、器面の整形は 3 c 式・3 d 式に比べやや荒い感じを受ける。

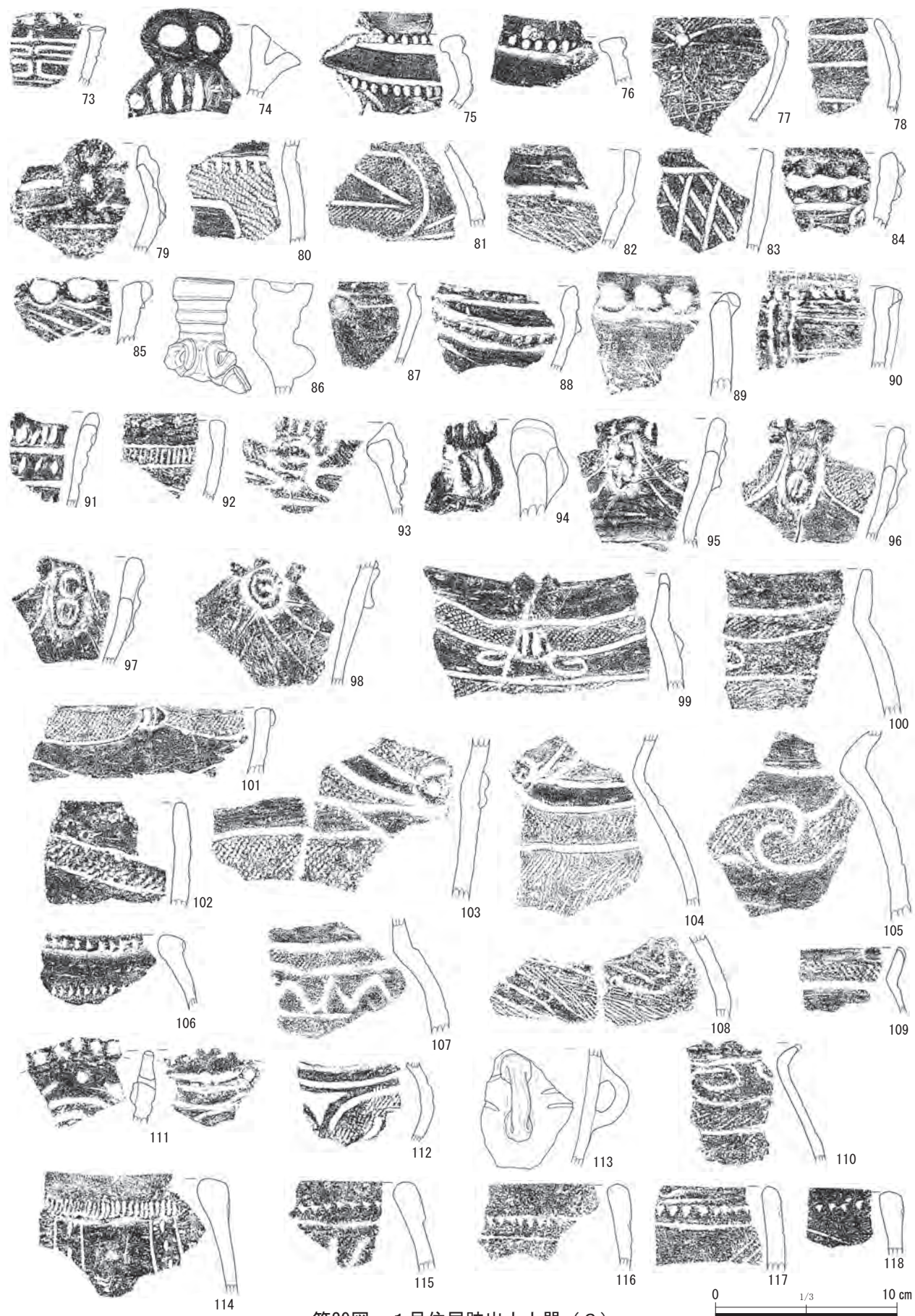
133・134・147 は波状口縁深鉢である。133 は縦位区画を持たないものの、波頂部下を中心として沈線の渦巻状入組文を左右対称の位置に配置し、モチーフ以外の地の部分に細かな刺突文を充填施文する。134 は波頂部から平行沈線が垂下して縦位分割し、左右の三角形区画内に三叉文を施文する構成になるものと思われる。縦位区画と口縁部の弧状区画内に細かな刺突文を充填する。

147 は波状口縁の波頂部の左右に貼付文を、波頂部下に中央の窪む円形貼付文を施し、この円形貼付文を基準として胴部に浅い不鮮明な沈線で三角形区画を施し、その中に崩れた入組状三叉文を施文する。三角区画を構成する沈線区画内に、細かな刺突文を充填施文する。

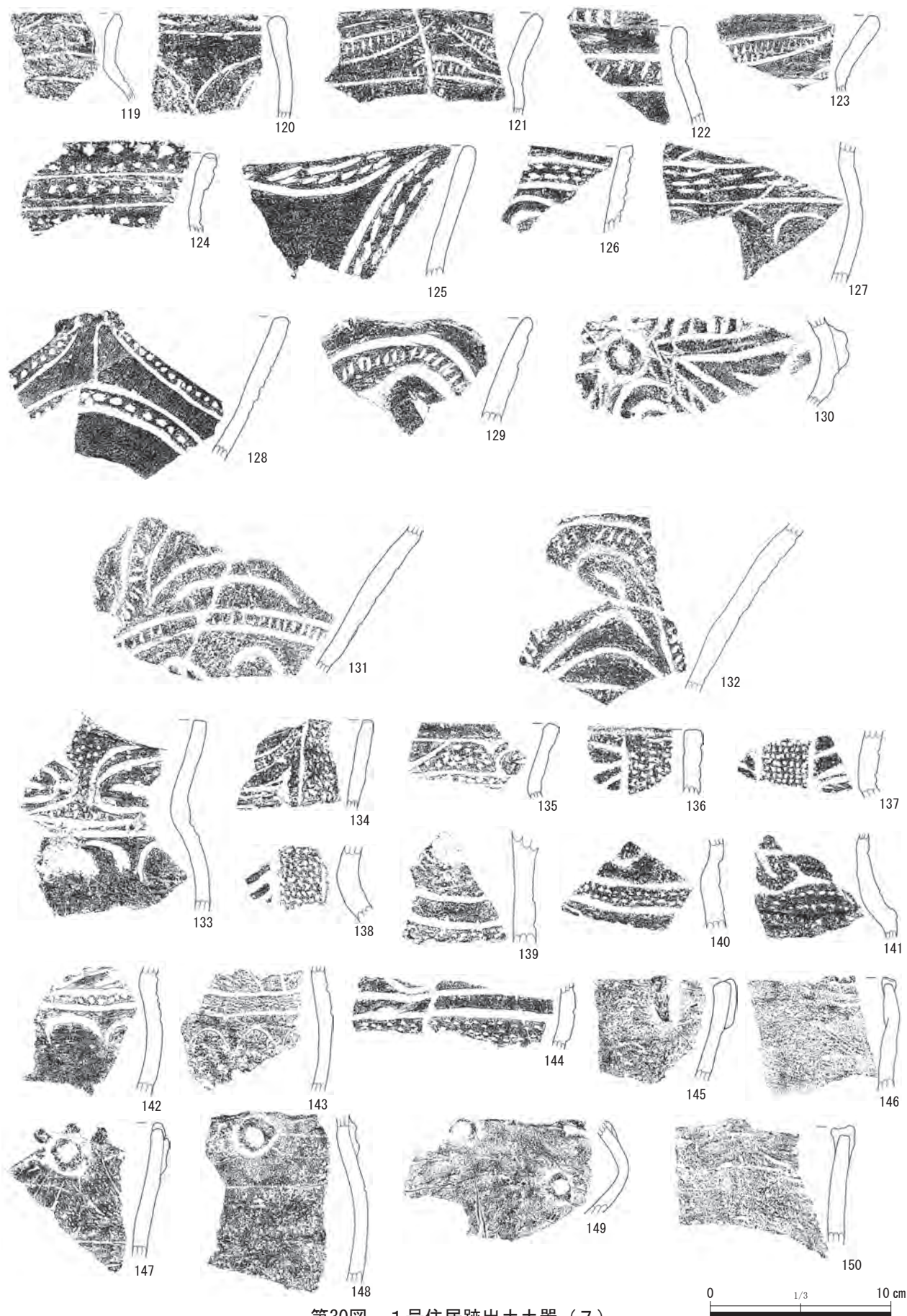
5・135・136 は平口縁深鉢で、136 ～ 138 は同一個体である。5 はコップ形状の小型の深鉢で、口縁部を横位沈線で幅広に区画し、非常に細かな刺突文を口縁部の区画内のみに全面施文する。胴部は 2 本沈線で区画し、楕円区画文化した区画内に菱形状を構成する入組状三叉文を施文する。この楕円状区画文は上下向かい合わせの三角形区画文で仕切られており、上側の三角形区画内には刺し切り状の三叉文、下側の三角形区画内には楕円文が施文されている。推定口径 10 cm、現存高 8.3 cmを測る。135 は口縁部の幅狭区画内に三角形区画や沈線の渦巻状入組文を施文する。136 は 2 本沈線の縦位区画と左右の区画文から構成されるが、縦位区画文内にのみ細かな刺突文を施文する。

139 ～ 144 は胴部破片で、区画の 2 本沈線間に

III 発見された遺構と遺物

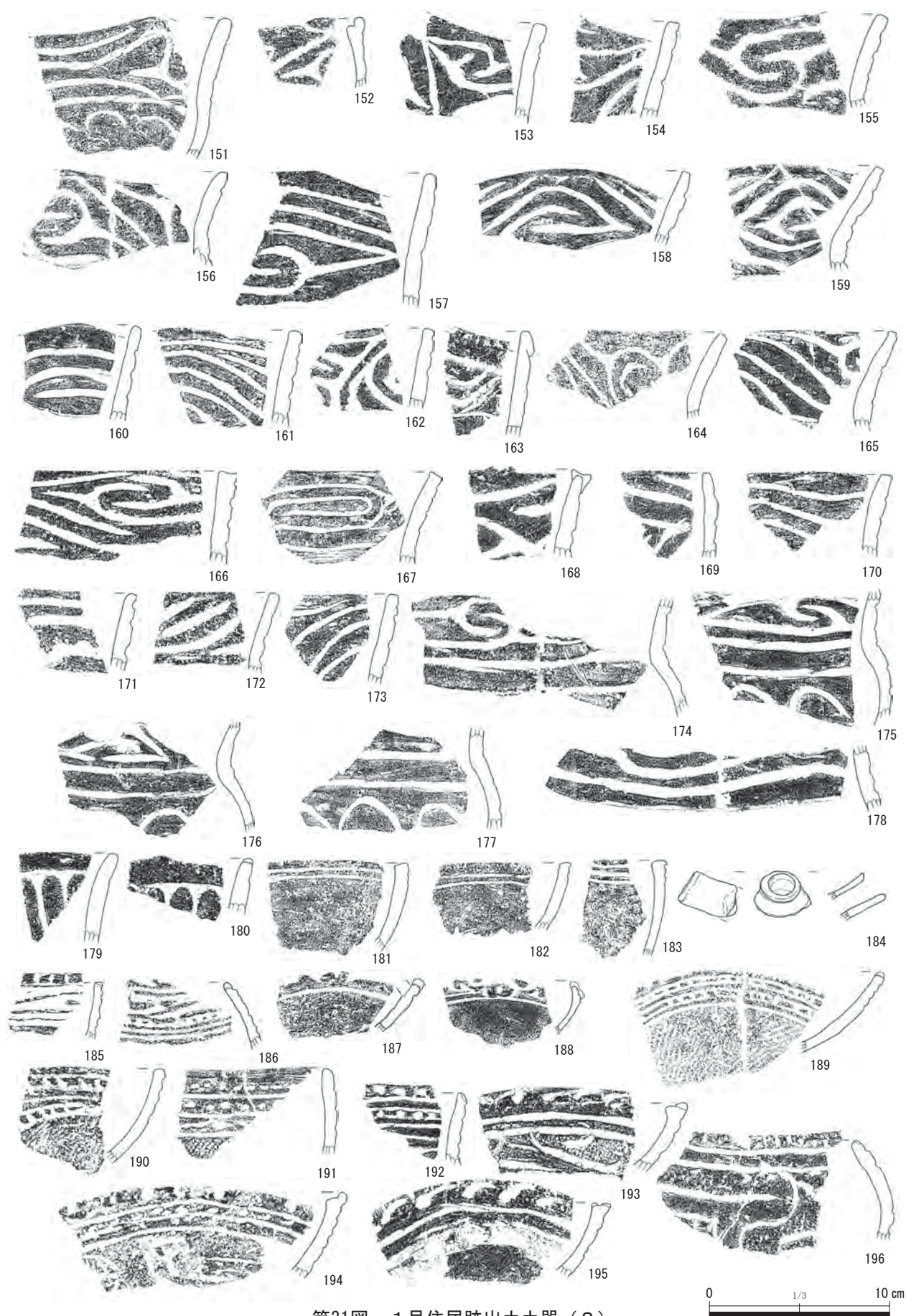


第29図 1号住居跡出土土器（6）

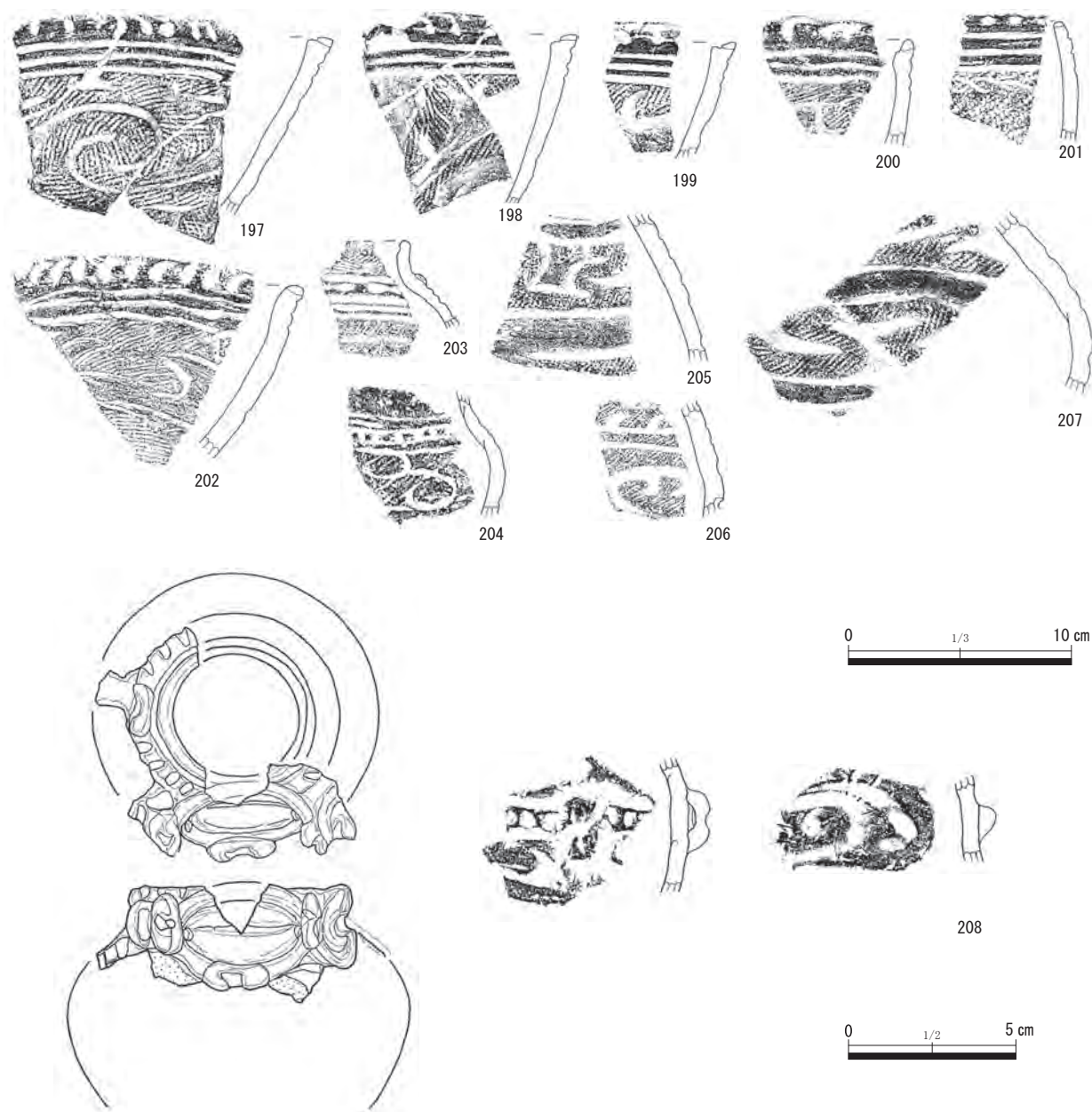


第30図 1号住居跡出土土器（7）

III 発見された遺構と遺物



第31図 1号住居跡出土土器(8)



第32図 1号住居跡出土土器(9)

刺突文を施すものが大半であるが、141は文様帯全面に刺突を施している。142・143は胴部の区画下に上向弧線文を連ねている。

146・148～150は中央の窪む円形貼付文を持つものである。148は深鉢の胴部に、149は屈曲する胴部にそれぞれ円形貼付文を施文する。148は不鮮明ではあるが胴部を平行沈線で区画し、胴部の円形貼付文を弧状沈線区画で横位連結する構成を取り、安行3b式から系譜する古手のモチーフ構成であろうか。区画内の磨消縄文部分が、細かな刺突文に置換されて、変化している様である。

146・150は平口縁の無文土器であるが、口唇部上に中央が窪む貼付文を施文し、突起状を呈する。

37は口縁部を欠損する壺形土器で、頸部から胴部を沈線で水平分割し、胴部に上向き弧線文を連ねる。胴部の区画内には沈線の文様が一部見られるが、構成は不明である。頸部と胴部の区画内に細かく密な刺突文を充填している。胴部最大径11.6 cm、現存高6.9 cmを測る。

大洞式系土器群

11・14・46～51・184～208は晩期前葉から中葉にかけての東北地方の大洞式系土器群である。

III 発見された遺構と遺物

185 は口縁部に彫りの深い沈線による羊歯状文を施文する鉢で、口唇端部から上端にかけて刻みを施す。186・187 は接合しないが、同一個体と思われる注口土器の上半と下半部の破片である。上半部に羊歯状文を施文し、下半部を沈線で区画して、口唇部と胴部にB突起を施文する。細砂粒を多く含む、白色系の胎土である。

188 は内湾する口縁が開く小鉢で、口縁部にB突起3個を組み合わせた左右対称形の入組状モチーフを施文し、口縁部を平行沈線で区画する。胎土は精選された肌理細かな白色粘土で、整形も丁寧に施されている。以上は、第V群2類大洞BC式に比定されよう。

189 は口縁が内湾気味に開く皿状の浅鉢で、口縁端部に小さなB突起を持つ。口縁部に平行沈線で区画した幅狭の羊歯状文2段を施文し、胴部にはLR縄文を施文する。羊歯状文は一見すると間隔を空けた刺突文のように見えるほど、その形態を残す程度に形骸化し崩れている。

14 は口縁部が大きく内湾する鉢で、平行沈線間に刺突文を施す刻文帯で口縁部と胴部を区画し、地文LR縄文上に沈線書きの上をナゾリ返した幅広の沈線で、クランク状文と三叉文を交互に施文する。器面調整はあまり丁寧ではない。佐野式の系譜下にあるモチーフの可能性が高いと思われる、およそ安行3b式～3c式、大洞BC式からC1式にかけての時期に比定されよう。

11 は口縁部を「二溝間の截痕」で区画し、胴部に間延びした雲形状の沈線区画を施し、口縁部と同様の刻みを施している。胴部にはLR縄文を施文する。推定口径20cm、現存高3.9cmを測る。190 は11と同一個体の可能性があり、口縁部の区画以下に施文される右上がりになる区画文は、11のそれと類似する。このモチーフは、羊歯状文の変形に系譜が辿れる可能性がある。

191・192 は口縁部に刺突文を挟む平行沈線を巡らすもので、191 は胴部にLR縄文を施文する鉢、192 は口縁部がやや外反する深鉢と思われる。192 は口唇部の刻みや、円形状の刺突文を施文する点で、大洞BC式となる可能性もある。以上はおおよそ第V群3類の大洞C1式でも古段階に位置

付けられよう。

193～195 は内湾気味の口縁部が開く浅鉢である。194 は口縁部を「二溝間の截痕」状の刺突文を挟む3本の並行沈線で区画し、器面の荒れで不鮮明であるが胴部に渦巻文状の雲形文を施して、LR縄文を施文する。口唇部は三叉文状の刻みが突起裏に回り込み、2単位でB突起状を呈する。193 は平行沈線で口縁部を区画し、口唇部に片流れの三叉文状の刻みを施す。胴部には区画文の一端が渦を巻く雲形状文を施し、区画内にLR縄文を施文する。195 は荒い平行沈線で口縁部を区画し、口唇部に大きな刻みを施す。胴部のモチーフは、器面の剥落により不鮮明である。

196 は口縁部が大きく内湾する浅鉢で、平行沈線で口縁部を区画し、口唇端部に刺突状の刻みを施す。胴部は間隔の空く沈線で、LR縄文を充填する変形工字文風のモチーフを施文する。

197～200・202 は内湾気味の口縁部が外傾して立つ鉢、201 はやや内湾気味の口縁部が立つ鉢である。いずれも口縁部を3本沈線で区画し、197 は磨消部の少ない渦巻状の雲形文を施文する。口唇部には片流れの刻みを施す。198・199 は同一個体で、200 とともに崩れた雲形文を施す。201 は胴部にLR縄文を施文し、口縁部区画線下で横位の綾線縄文を施文する。以上の浅鉢・鉢類は第V群3類の大洞C1式の後半から末にかけての新しい段階に位置付けられよう。

また、浅鉢でも202 は口縁部区画の3本沈線が継ぎ足し状施文となり、雲形文も単位文化しているようである。口唇部の刻みも大振りとなることから、第V群4類の大洞C2式の可能性が高い。

46～51・203～207 は大洞式系の注口土器・壺形土器類である。51 は注口部が残る注口土器で、壺形土器を少し扁平にしたような器形を呈する。頸部は短く、口縁部は平坦な受け口状となり、口唇部が立つ。頸部を2本沈線で、胴部を4本沈線で区画し、上半部に楕円区画状化した雲形文を3単位に構成し、楕円区画の両端に逆方向に開放する「の」字状の弧線文を配する。下半部は大きな「X」状の雲形文を中心としたモチーフが描かれているようである。縄文は施文されない。口径6.8

cm、最大径 11.5 cm、器高 9.3 cm を測る。第 V 群 3 類の大洞 C 1 式の終末に位置付けられよう。

47 は頸部で括れ、胴部が下膨状の無文壺で、頸部を 2 本沈線で区画する。底部は削り出し状の小さな丸底である。強く被熱されており、器面が爛れている。最大径 10.2 cm、現存高 9.8 cm、底径 5.8 cm を測る。48 は胴部が 5 割ほど現存する壺形土器である。2 本沈線で胴部を区画し、凹線状の太い沈線で崩れた雲形文や、先端が渦を巻く弧線文を重ねて施文する部分がある。推定最大径 20 cm、現存高 8.7 cm を測る。

49 は頸部と胴部を 3 本沈線で区画し、胴部に渦巻文や三叉文を取り込む足の長い雲形文を構成するようである。文様帯の中でも上部は単節 L R、下部は無節 L の 2 種類の縄文を施文する。推定最大径 19 cm、現存高 11.4 cm を測る。48・49 は類似した文要構成であり、モチーフの崩れなどから第 V 群 3 類大洞 C 1 式終末から 4 類大洞 C 2 式への移行期の土器群と思われる。

50 は 51 の注口土器の器形を少し間延びさせたような器形を呈し、受け口状を呈する口縁部も 51 より弛緩している。頸部を眼鏡状突帯と 3 本沈線で区画し、胴部を 2 本沈線で区画する。胴部は横長の上下に入り組む崩れた雲形文を構成し、付加文の一部が鈎状の単位文化や、双葉状区画文化しており、単節 L R 縄文を施文する。口径 5.6 cm、最大径 16.8 cm、現存高 13.7 cm を測る。203 は頸部を眼鏡状突帯と 3 本沈線で区画し、頸部にも L R 縄文を施文する。

204 は刺突文を挟む平行沈線で頸部を区画し、上下に連なる渦巻文を施文する。地文に L R 縄文を施文する。205～207 は壺肩部の破片で、彫りの深い縄文施文部でモチーフを描いており、207 は工字文風のモチーフを構成する。205・206 は大洞 C 1 式新段階、204 は頸部の区画線が二溝間の截痕であるとすれば、大洞 C 1 式段階となろうか。

50・203 は頸部の眼鏡状突帯と 3 本沈線による頸部区画が類似しており、大洞 C 1 式終末から大洞 C 2 式の初頭段階に位置付けられようか。特に 207 はモチーフや施文手法が前浦式に類似するものであり、大洞 C 2 式における前浦式との関係性

を考慮すると大洞 C 2 式まで下る可能性がある。

46 は壺の胴部破片と思われ、不鮮明であるが浅い沈線で崩れた雲形文を構成しているようである。モチーフの描出手法は衰退し、メリハリを欠いた施文となっている。推定最大径 25 cm、現存高 9.7 cm を測る。モチーフの崩れや施文手法の退化・衰退から、202 と同様に大洞 C 2 式の初頭段階と判断される。

これら第 V 群の大洞式系土器群は、第 IV 群の安行 3 c 式から 3 d 式への移行期の土器群が多いことと呼応するかのように、大洞 C 1 式から C 2 式への移行期の土器群が主体となっている。

208 は小型の壺形土器か、異形台付土器の可能性はある。口縁部は径 3.6 cm ほどの円形で、刻みを施す隆帯で縁取られている。口唇部上には浅い凹線状の沈線が巡る。口縁の隆帯上にかかるように上下対の弧状隆帯が施され、楕円形状の区画文を構成する。この横長区画文の両端には B 突起の変形した縦長突起が付き、貼付部分に紐通し状の横位の円孔が施される。この円孔を繋ぐように楕円区画内に横位沈線を施文している。楕円区画文の下側の隆帯上には横位の B 突起を施文する。上側部分は欠損していて不明であるが、この楕円区画文は遮光器土偶の目のような装飾に見える。胴部には、全体構成は不明であるが三日月状の透かしが施されている。胴部も口縁部と同様に、刻みを施した隆帯で区画されているようである。内面は接合痕や指頭整形痕が残り、平滑に整形されていない。砂粒等を含まない肌理細かな胎土であり、焼成良好で、白色かかった黄褐色を呈する。他に、同一個体の破片が 2 個ある。器種等不明な部分が多いが、遮光器様の装飾を持つことから、晩期の中葉期に位置付けられるものと推定される。

第 VI 群の無文土器群

晩期の文様の施文されない無文土器群を中心とするが、後期の無文土器および、有文土器の無文部も含まれていよう。口縁部を折り返さない素口縁状の無文土器を 1 類、折返状口縁の無文土器を 2 類、口唇部に刻みを施す無文土器を 3 類に分類した。

209～229 は 1 類とした口縁部を折り返さない素口縁系の無文土器である。209～214・222 は若干内

III 発見された遺構と遺物

湾する口縁部がやや開く器形の深鉢で、丁寧なナデ整形を施す。210・213・214・222 は口縁部に輪積痕がわずかに残るが、ナデ整形を施す。212 は口縁部に横位の強いナデ整形痕が残る。222 は口縁部が短く内折する器形で、ナデ整形を施す。

215 ～ 221 は口縁部が内湾する器形で、口唇部は概ね丸頭状を呈する。216・217 は口縁下部の輪積部分でわずかに窪む器形で、輪積痕をナデ消している。220・221 は口縁部に輪積痕が残る。

223 ～ 227・229 は頸部が括れて胴部が張る甕形もしくは広口壺形の深鉢である。223・224 は口縁部の外反が大きく、口縁部に輪積痕を残す。225 ～ 227・229 は外反が緩く、肩の張る器形を呈する。

57・228・230・231 は内湾する口縁部に指頭押圧の整形痕がみられる。57 は口縁が指頭整形により小波状を呈し、胴部に輪積痕を残しつつ、軽いナデ整形を施す。230・231 は口縁部外面に斜位の指頭整形痕を残し、口唇部が先細り状を呈する。

折返状口縁の2類土器では、口縁部内面側に折り返すものと、外面側に折り返すものがあり、大半が1段である。

232 ～ 234 は内面側に折り返すもので、いずれも先細り状の口縁部を折り返しによって肥厚させている。232・233 は口縁部に斜位から従位の指頭整形痕を残し、234 外面に2本の輪積痕を残す。

58 ～ 63・235 ～ 273 は外面側に1段折り返すものである。58・59・62 は口縁部が開く器形を呈し、58 は胴部に輪積痕を、59 は口縁部と胴部の屈曲部に指頭整形痕を、62 は指頭状の粗い整形を施す。

60・61・63 は口縁部が内湾して開く器形で、いずれも頸部に横位のケズリ状整形、胴部に縦位のケズリ状整形を施し、62・63 は折返状口縁部に横位の指頭状の押圧を、61 は折返状口縁部の一部が頸部へと垂れ下がる。

235 ～ 238 は頸部から胴部にかけて数段の斜位の指頭整形痕を残している。また、239・242・247・250・251・262・270 は折返状口縁部に押圧状の指頭整形痕を強く残している。246・249・254・256・259・265・267・271 ～ 273 は頸部に輪積痕を残しており、273 のみ2段の折返状口縁を呈する。237 は上段の折返状口縁の下部と2段目の間に横位の指頭

状ナデ整形を施している。

折返状口縁3類は口縁部に刻みを施すもので、素口縁と折返状口縁の両者がある。

247 は口縁部が内湾する深鉢で、口縁部が幅広い折り返しによると思われる肥厚を呈し、やや先細りの丸頭状を呈する口唇部に平行する押し引き状の押圧刻みを施す。

275・276 は折返状口縁に刻みを施すものである。275 は口縁部が内湾する2類の折返状口縁土器と同様な器形を呈し、刻みを施すことかから口唇部が丸頭状を呈する。刻みは口縁部と平行する押し引き状の刻みである。276 は折返状口縁部が外反する器形で、刻みにより口唇部が丸頭状を呈する。277 は口縁部が内湾気味に開く鉢で、胴上半部が肥厚し内削状の口唇部が開く器形を呈する。278・279 は直行状口縁が開く器形を呈し、口唇部に押圧状の大振りの刻みを施す。280 ～ 285 は頸部で括れ、胴部が張る器形を呈する深鉢かあるいは広口壺で、口縁部に刻みを施すものである。

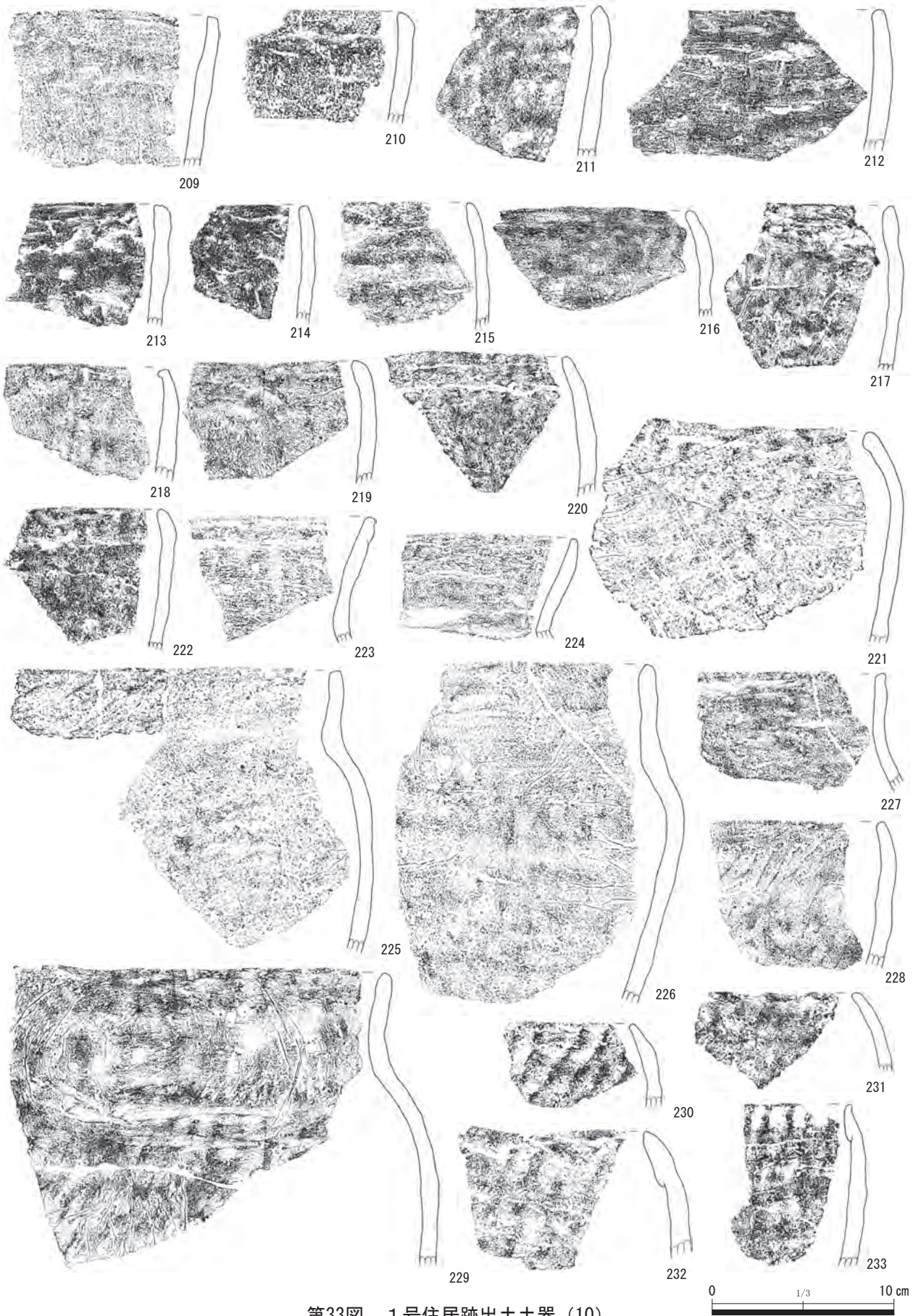
281 ～ 283・285 は外反する口縁部の中央部が肥厚し、緩く外反する器形を呈する。口唇部上の刻みは比較的小さく、口縁部と平行する押圧押し引き状の刻みを施している。284 は口縁部の外反が緩く、胴部の張が弱い器形を呈する。

64 は無文土器1類ではあるが、被熱により器形が変形しており、通常の間縁部が内湾する深鉢であるのか、口縁部の平面形が扁平となる水差し形の器形であるかの判断が難しい土器である。熱変形していない胴部から口縁部にかけては扁平な器形が想定されるが、片口状の口縁部が製作時からの形状であるのか、熱変形でひしゃげて突出した形状になったものかは判断しかねる。

65 ～ 72 は底部破片で、65 ～ 70 は網代痕が付き、71 は削り出しの底部、72 は木葉痕が付いている。65 ～ 68 は後期、69 ～ 72 は晩期深鉢の底部と想定される。

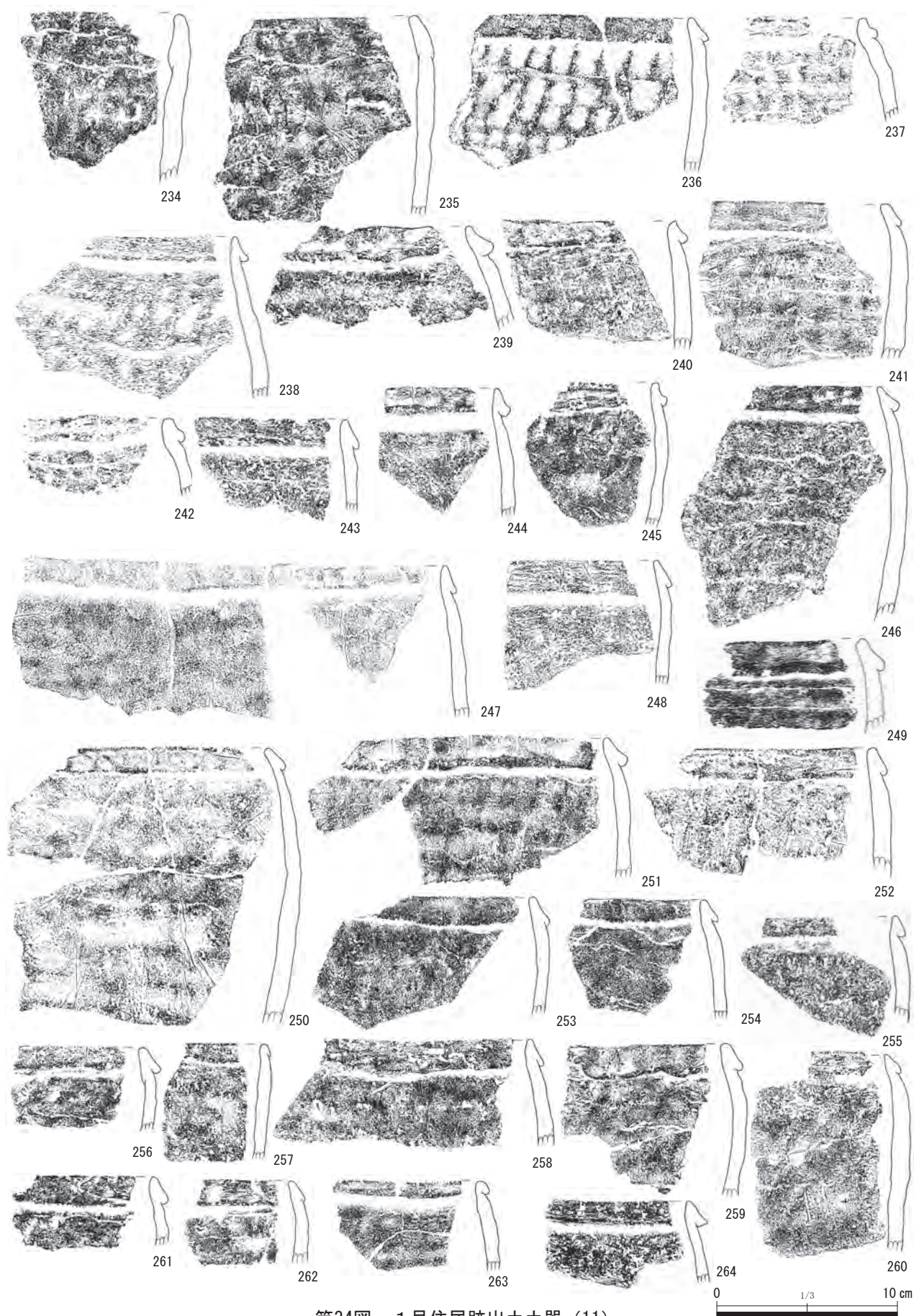
また、286・287 は無文の壺形土器で、口唇部に刻みは見られない。286 は口縁部に強い横ナデの整形を施す。288 は無文の浅鉢で、口縁部に刻みは見られない。289 は胴部破片である。

他に、赤褐色に被熱した製塩土器と思われる胴部

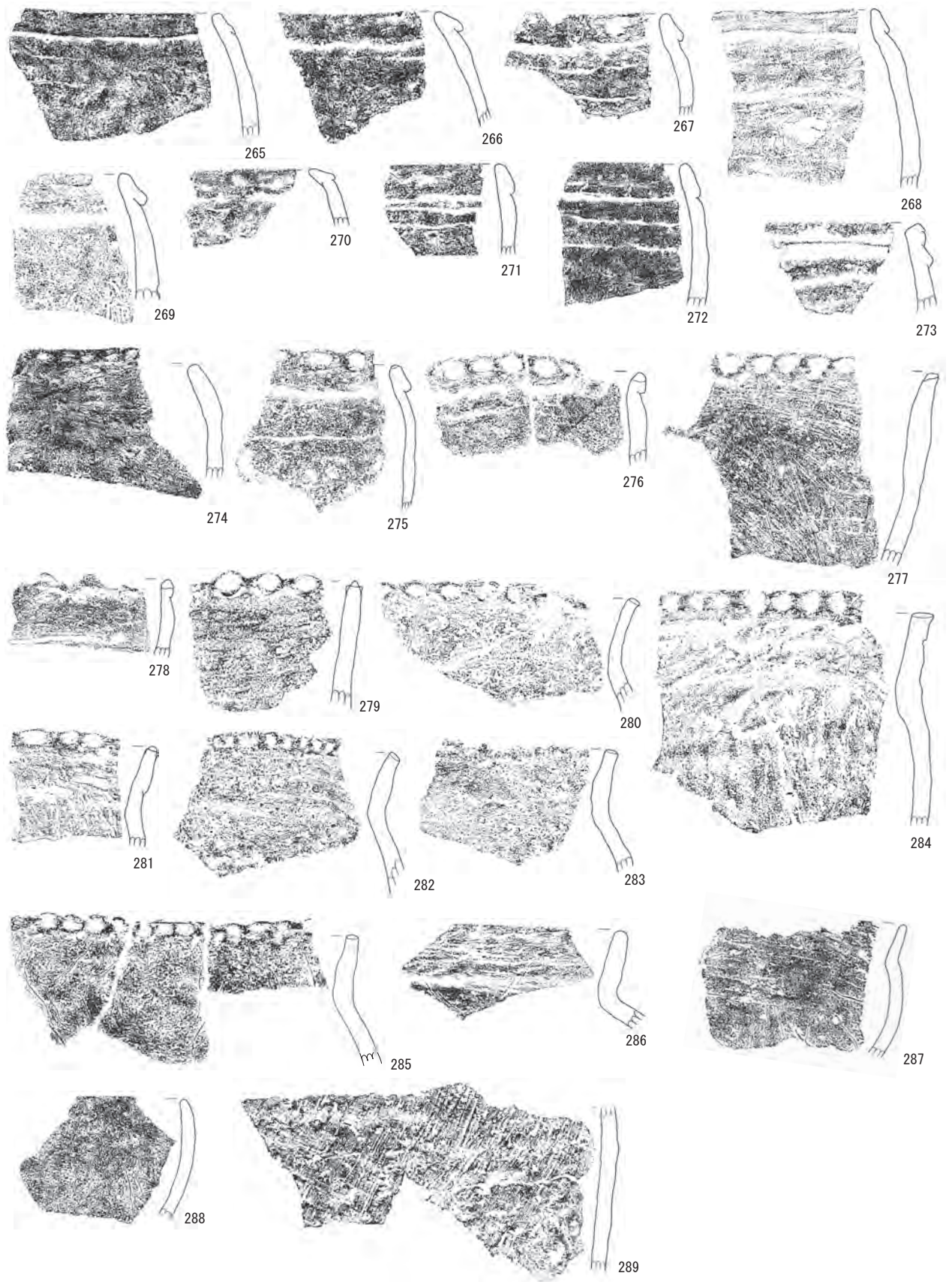


第33図 1号住居跡出土土器 (10)

III 発見された遺構と遺物



第34図 1号住居跡出土土器 (11)



第35図 1号住居跡出土土器 (12)

0 1/3 10 cm

III 発見された遺構と遺物

破片が若干出土しているが、図示しうる口縁部破片はなかった。

土製品

ミニチュア土器

52～56は手捏のミニチュア土器である。52は口縁部が刻みで小波状を呈する深鉢のミニチュアで、角状に突出した双頭の突起を持つ。胴部に縦位のケズリ整形を施し、胴部の一部が突出する。完形品で、口径3.4cm、底径1.8cm、器高4cmを測る。53は球形状の壺のミニチュアで、推定口径1.8cm、最大胴径3.7cm、現存高2cmを測る。54・55は丸底状の鉢形土器のミニチュアである。54はほぼ完形で口縁部に1帯の輪積痕がみられる。口径6.2cm、器高3.6cmを測る。55は完形で、口縁部が内削状を呈し、胴部に縦位から斜位のケズリ状整形を施す。口径7cm、器高5.9cmを測る。56は底部が丸平状を呈し、口縁部が外反する器形と推定され、底径5cm、現存高4.9cmを測る。

耳飾

1号住居跡からは、有文12点、無文18点の合計30点の耳飾が出土した。形態は上面径より下面径が小さく、断面形が「く」字状及び外反する臼形、環状形のものを主体とする。

290～293は上面が緩く窪み、下面が皿状に窪む臼形で、いずれも上面径が大きく、着装部の側面が窪みながら外反する。290～292は無文で、291は上面にケズリ状の整形痕を残す。293は上面に細かな刺突文を全面に施し、中央部に未貫通の小孔を穿っている。290・291は上面径が7cm強の大型である。

294～306は環状の無文の耳飾である。294～297は臼形に類似する器形であるが、上面が皿状に強く窪み、中央に小孔を穿つ。臼形と環状との中間的な様相を持つ。294は筒形に近く、断面が厚い。上面と下面が逆の可能性もある。298～304は中央穴の径が大きなもので、上面径が大きく、着装部が大きく窪むものが多い。304は上面径が8cmを超える大型品である。305は断面が「く」字状、306は三角形状を呈する環状の耳飾である。

307は指輪状の環状を呈し、着装部の側面に2条の沈線が巡る。完形である。

308～312・314・315は有文の環状耳飾である。309は断面が外反する器形で、上面外端部と内面の屈曲部を沈線で区画し、口縁端部には刻みを、内面屈曲部には刻状の短沈線を施文する。

308・314・315は上面が幅広の平坦面を呈し、沈線や刺突文の文様を施文するものである。308は3本の円形沈線で上面を区画し、外周の沈線で端部の円形文を連結しているようである。この円形モチーフは地文に刺突文が見えることから、貼付文が剥落したものである。沈線区画内には293と類似するゴマ粒状の刺突文を充填施文する。314は上面に2本沈線で弧線文を5単位に施文し、穴の周りを単沈線で区画する。315は幅広の沈線で対向する三角形文と「ハ」状モチーフを施文する。中央穴の周囲は単沈線で区画し、刺突状の刻みを施す。

310は断面が鈎状を呈し、上面に円形の貼付文を挟んだ玉抱三叉文が印刻されている。貼付文には、中央部とそれを取り囲んで7個の小さな円形刺突文を施している。

311～313は径の小さい環状で、上面径が大きく外反し、311は内面に文様を、312はケズリなどによる立体的な文様を施文する、晩期前葉から中葉の耳飾である。312は上面に巻き上がる隆帯と、上面外端部に刻みを施す。313は上面部に、変形工字文風の交互に入組む浮彫文を施文する。

316～319は上面部が大きく迫り出し、中央にブリッジを持ち、透かし彫り状の装飾を施すいわゆる千網型の耳飾である。316は対向する花卉状と渦巻状のモチーフと、その間に三叉文状のモチーフを挟み、内側に花卉状の浮彫を4単位に配し、中央にブリッジを設けて入組三叉文の陽刻を施している。胎土にやや細砂粒を含むが、丁寧な整形が施されている。全面に朱塗りが行われ、全体的に被熱されて、一部器壁が発泡している。上面径7.8cmの大型で、4分の1程が欠損する。317は四角い箱状とクランク状の隆帯モチーフを施文し、318は316に類似するモチーフを施文する。319は中央のブリッジにあたる部分で、310と同様な円形貼付文を施している。

土製円盤

320 は正円形の中央部が膨らむ円盤で、細沈線による渦巻文を施文する。渦巻文は継ぎ足し状沈線の施文で、部分的に途切れている。

322・323 は土器片を利用した土製円盤で、322 は L R 縄文を施す胴部破片、323 は無文の胴部破片を使用する。

321 は基石状の土製円盤である。時期は不詳である。

石器および石製品

石鏃

A 類…着装部が平坦な、平基鏃を一括する。

324～326 は平基鏃である。324 は a) 正三角形、325 は b) 二等辺三角形、326 は先端が欠損するが c) 五角形状を呈する。周囲の調整加工は、通常の調整剥離である。

B 類…着装部が湾入する、凹基鏃を一括する。

327～347 は凹基鏃で、327～331 は挟りの浅い凹基鏃である。

330 は a) 正三角形、327～329・331～340 は b) 二等辺三角形形状を呈し、331 は未成品、332 は脚部を欠損する。333 は両側縁の張る器形で、時期の異なる可能性もある。332・334～338 は挟りの深い整然とした二等辺三角形形状を呈し、339・340 は先端が欠損するが二等辺三角形形状を呈するものと思われる。

341・342 は側縁の一边が変形する f) 不正形状のものである。343～347 は c) 五角形状を呈するもので、長身のものが多く、両側の脚部が跳ね上がるカリマタ状を呈する。346 は中央深くまで入る平行の押圧剥離を施し、347 は両側縁中央部に鋭い鋸歯状の調整剥離を行っている。

C 類…着装部に突出する中子を持つ凸基鏃を一括する。348～385 は凸基鏃である。凸基鏃は基本的には五角形に近い形状を呈するものが多く、明確な分類が難しいが、中子の形状と合わせて、整然とした五角形状で中央部側縁が羽根を広げた飛行機状の形態のものを d) 飛行機鏃とした。

348～357 は飛行機鏃である。中でも 348～352 は典型例で、先端部から両肩にかけて開き、側縁が羽根状を呈するものである。353～357 は肩の開きが少ない飛行機鏃である。348・350・

353 は側縁に鋭い鋸歯状調整剥離を施している。

358～377・379 は細身の b) 二等辺三角形形状を呈するもので、欠損品や未成品も含まれる。359・366・367 は肩の張りも認められ飛行機状に近いが、長身の形状となっている。363～367 は両側縁に鋸歯状調整剥離を施している。368～370 は有舌尖頭器状の石鏃で、脚部が跳ね上がる B 類 c) のカリマタ鏃に、中子を付けた形状に類似する。

378・380 は左右の形状が不均整な f) 不正形であるが、中子は意識的に作出されている。

382・383 は脚部を持たない槍先状を呈する e) 棒状の石鏃である。370・371・384・385 は大型の石鏃の未成品であると思われるが、成品として機能した可能性もある。386～395 は製作工程各段階の未成品である。386・387 のように製品一歩手前のものから、394・395 のような粗割のものまで存在する。

搔・削器

396 は横型石匙状の搔器で、397 は剥片の側縁に調整を施した搔器、398 が縦長剥片の中央部に挟り調整を施したノジドスクレイパー、399 は円形剥片に調整剥離を施したエンドスクレイパーと思われる。

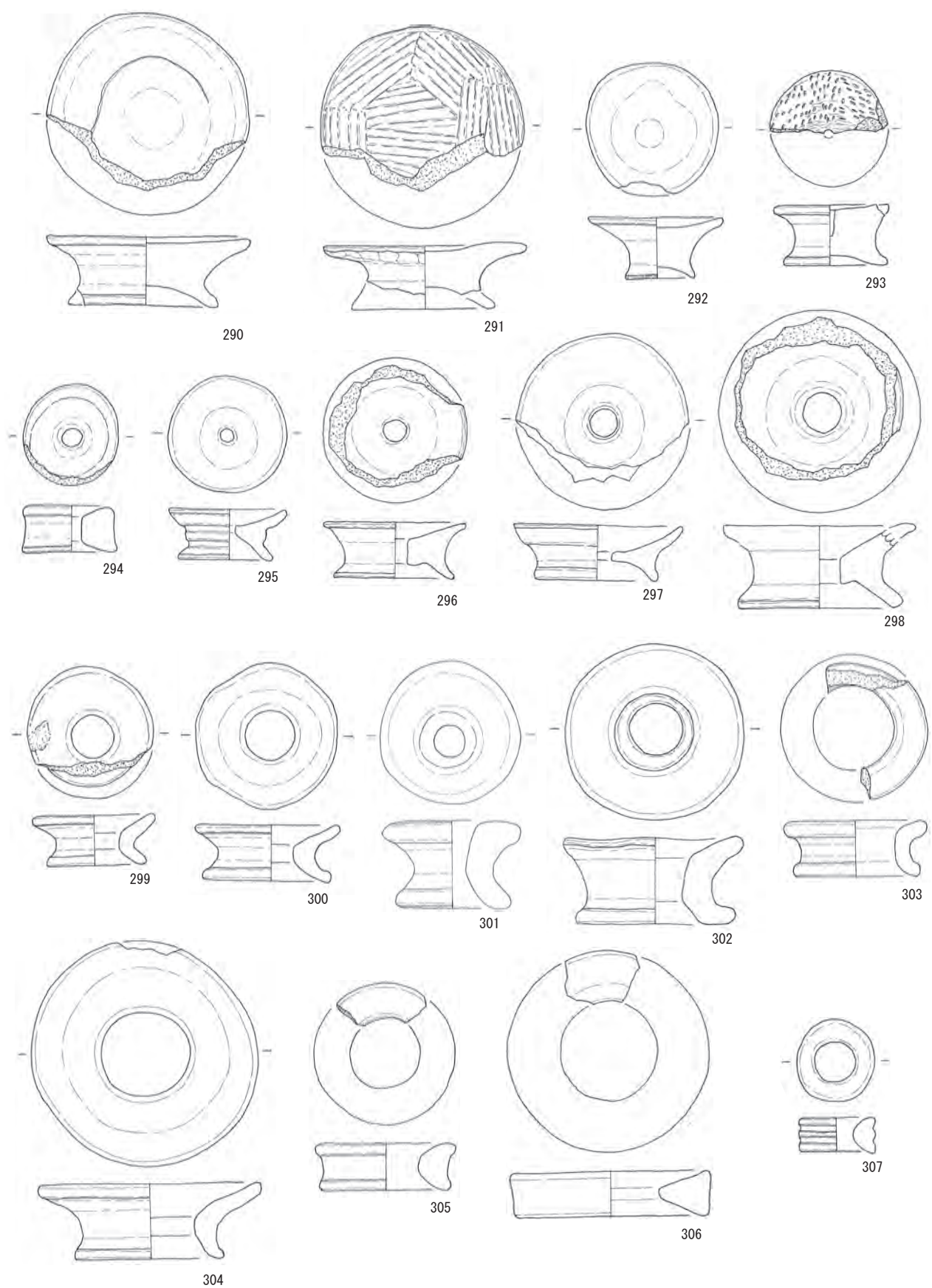
石錐

400～402 は回転するドリル、403 は突き錐のオウルである。400 は装着の中子を持つ長身のドリルで、チャート製である。中子の端部を若干欠損するがほぼ完形品で、石鏃の可能性があるものの、先端部が摩耗していることから石錐と判断した。401・402 は e) 棒状石鏃との区別が難しいが、身厚の成形から石錐とした。

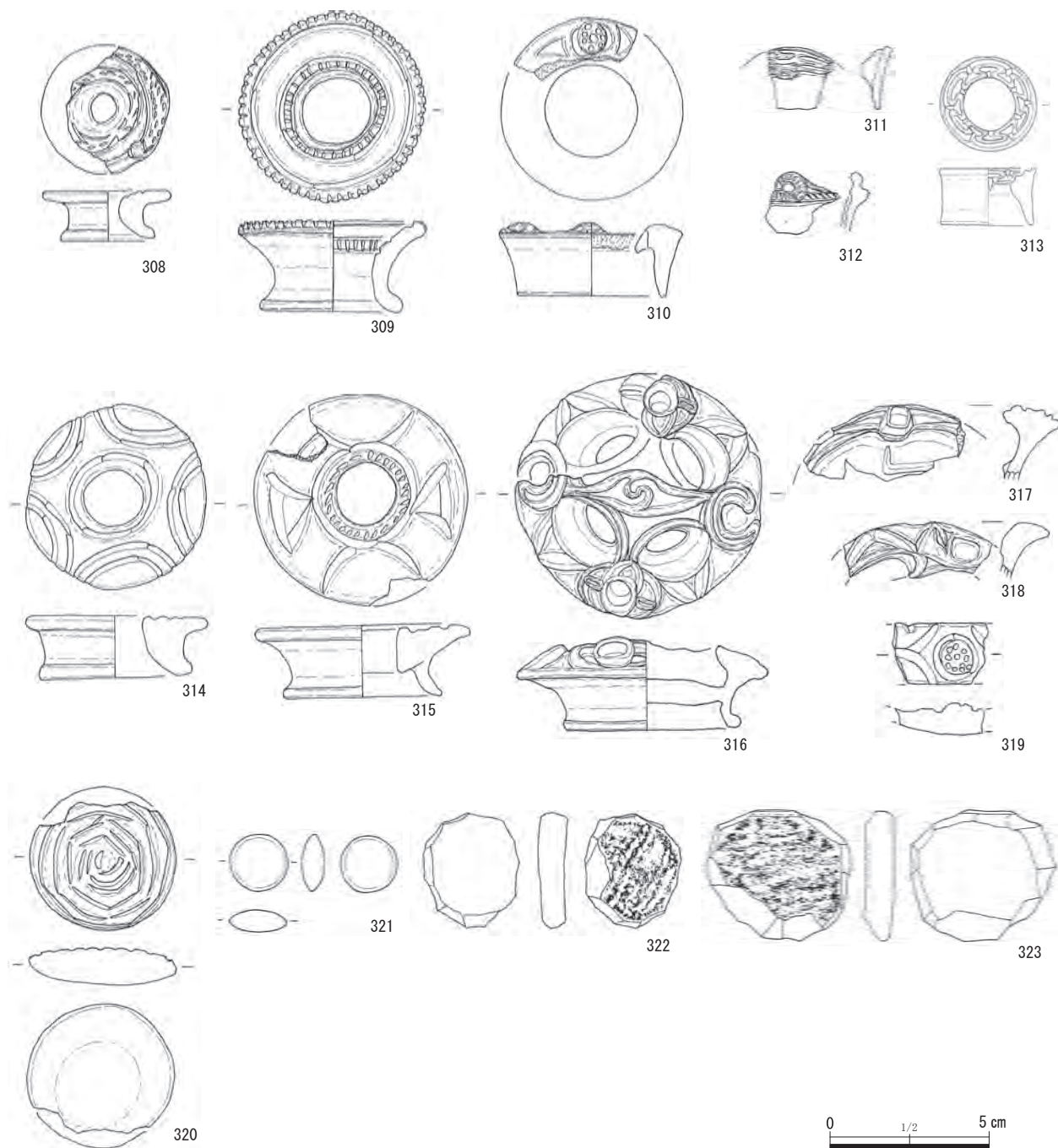
礫器

礫斧もしくは石核などとされる、大型の剥離痕を残す石器である。いくつかの形状があるが 404・406 は全面に剥離痕が認められる石核状のものである。404 は隅丸の方形状を呈し、表裏面および周囲からの剥離痕が認められ、石核というよりも敲打具としての機能が推定される。407 は長側辺側に調整剥離が行われた横型の礫器と想定したが、短側側を上下とした可能性もある。

405・406 は礫表を残す縦型の礫器である。石



第36図 1号住居跡出土耳飾（1）



第37図 1号住居跡出土耳飾（2）

斧とするには身厚であるが、406 は装着も可能であり、石斧としての機能も想定可能である。408 は礫表を残し、長側縁に細かな剥離を施した搔器状の礫器である。これらの加工が施された石器を礫器として一括した。

磨製石斧

大型2点、小型2点、の合計4点を図化した。407 は定角式に近い形状で、表裏両側面に磨きを施している。刃部は再生が行われ、敲打調整の後

に軽い磨きを施している。体部にも敲打整形の痕跡が残る。

410 は刃部に強めの磨きを施しており、体部両側面には軽い磨きを施す。411、412 は鑿状の打製石斧で、411 は頭部と刃部に磨きを施し、412 は剥離整形後全面に磨きを施し、刃部を片刃状に仕上げている。

打製石斧

413・414 は分銅形打製石斧である。両者とも

Ⅲ 発見された遺構と遺物

刃部を再生した可能性がある。415 は短冊形石斧と見たが、横型搔器もしくは礫器の可能性もある。416 は丸棒状の礫の両端を切断した形状で、石斧であるかは判断が難しい。

417 は片側の縁に抉りの入る扁平礫を使用した縦長の石斧であり、抉り部に調整剥離を施し着装の紐かけ部としている。この着装部には紐ずれとみられ擦痕がみられ、刃部には使用による磨滅痕がみられる。418 は小判形の縦長薄型剥片を使用しており、片側縁と刃部に大きな調整剥離を施して整形し、裏面に礫表を残す。刃部には使用による磨滅がみられる。

敲石

438 は細長い棒状礫を使用した敲石で、438 は両先端部に敲打痕が残る。他に、磨石類にも敲石としての機能を有するものがあると思われる。

窪石・磨石

419 ～ 441 は磨石類である。手中に収まる磨石には、窪石もしくは敲石としての機能を有するものがあり、形状も平面形が隅丸長方形や小判型の定型的なものから、円礫を中心とするものなど各種がある。419 ～ 421 のように大きな窪みを持つものは磨石との兼用というよりも、磨石機能終了後に敲石として機能していたものと想定される。広い意味では再利用となろうか。また、422・423 のように窪み穴の浅いものは磨石と敲石との機能が兼用されていた可能性が考えられる。また、436・437・439 ～ 441 のように大型の小判形の磨石では深い窪み穴を持つものは無く、磨り面主体の敲石兼用といった機能が考えられる。

一方、424 ～ 435 のような窪み穴のないもの、もしくは若干の敲き痕を持つ磨石は球形状に近いものが多く、形状による制約か選択差なのかは不明であるが、磨石主体の機能が推定される。

また、447 は片岩製の打製石斧に窪み穴を持つもので、448 は大型石棒の破片に窪み穴を持つものである。前者は窪石の機能終了後、石斧に再利用されたもので、後者は石棒の機能終了後に再利用されたものと推測される。特に、石棒が粉碎された後に窪石として再利用される例は、石棒としての主機能が意識されていたかどうか不明であるが、

単なる石器素材と化していたことも想定される。

石皿

442 ～ 446 は石皿である。石皿には縁を持つ安山岩系のものと、閃緑岩系の円形扁平礫を基調とするものがある。安山岩系の石皿は大半が細かく割れており、裏面等に窪み穴を持つものが多い。442・443 は裏面に窪み穴を持っているが、石皿と窪石の機能を共有していたかは判断が難しい。

一方、閃緑岩系の扁平な石皿は固い石質の関係か、深い窪み穴を持つものはない。また、扁平面に強い研磨痕は観察されず、擦痕程度の磨り機能を持っていたものと推察され、磨る対象物が異なっていたことが想定される。446 は片岩製の石皿で、裏面に窪み穴をもつが、石質による違いと判断される。

砥石

449 ～ 455 は砥石である。いずれも扁平な礫を素材とし、線状の擦痕ではなく、幅広の浅い筋状の擦痕が観察される。幅広い磨り面のため、磨製石斧などの研磨としての機能が推測される。

石錘

456 は長方形礫の長軸上に、表裏面ともに磨り切りの線刻を施している。457 は扁平楕円礫の長軸上端部に、敲打による刻みを施している。

独鈷石

460 は緑泥石片岩製の独鈷石で、1 点出土した。全体を敲打で整形し、さらに胴中央部を敲打で浅い溝状に窪ませている。完成品と思われるが、研磨による仕上げは施されていない。

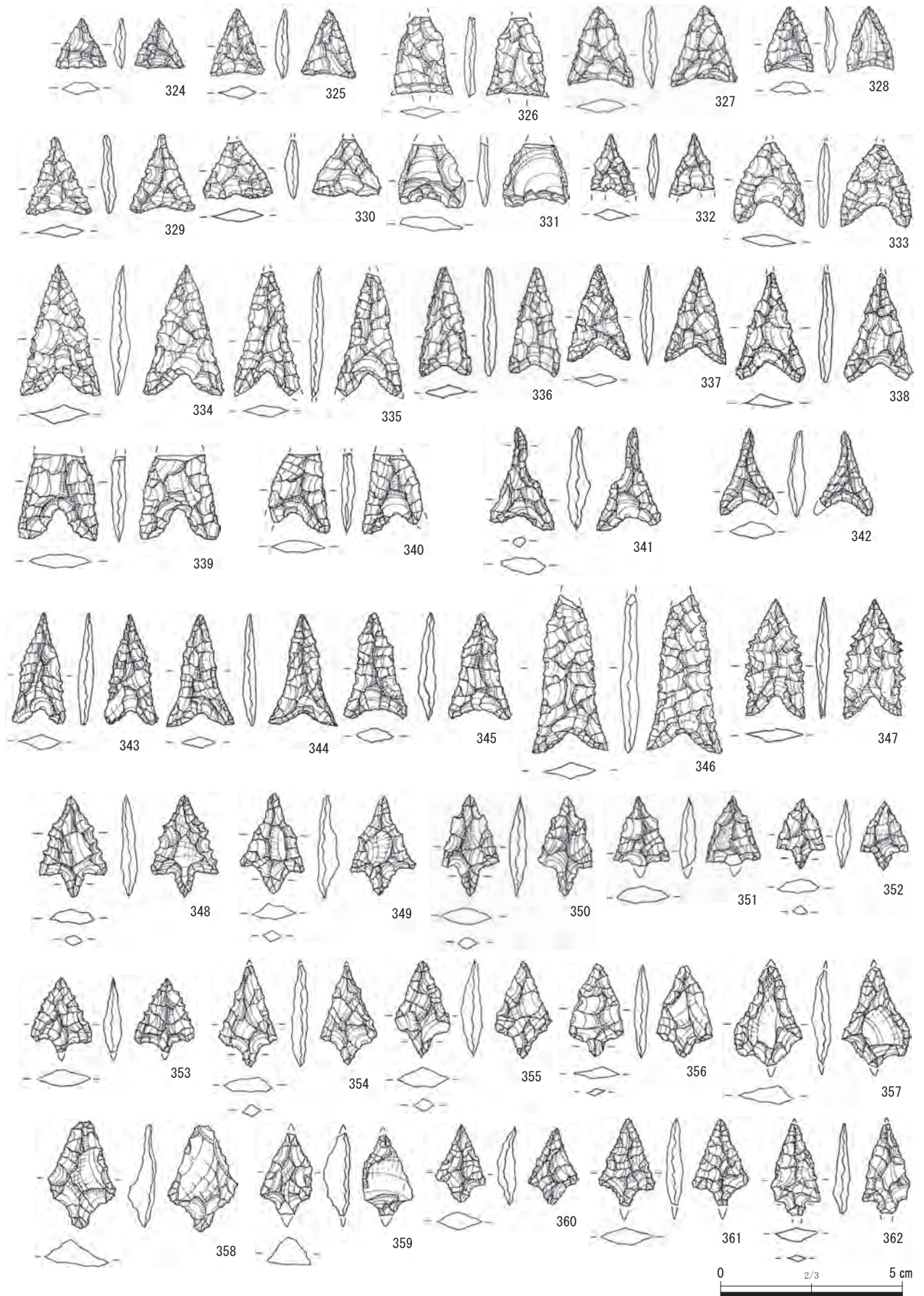
石棒

461 は小型の石棒で、1 点のみ出土した。細長い円柱状の原石を利用し、頭部をやや長く残し、頭部を区画する 2 条横位の不明瞭な敲打痕を残す。全体に軽く磨きが掛けられ、横断面がやや丸みを帯びたカマボコ状を呈する。

他に、窪石で説明した 448 は大型石棒の破片の再利用であり、石棒自体は後期のものと推定される。

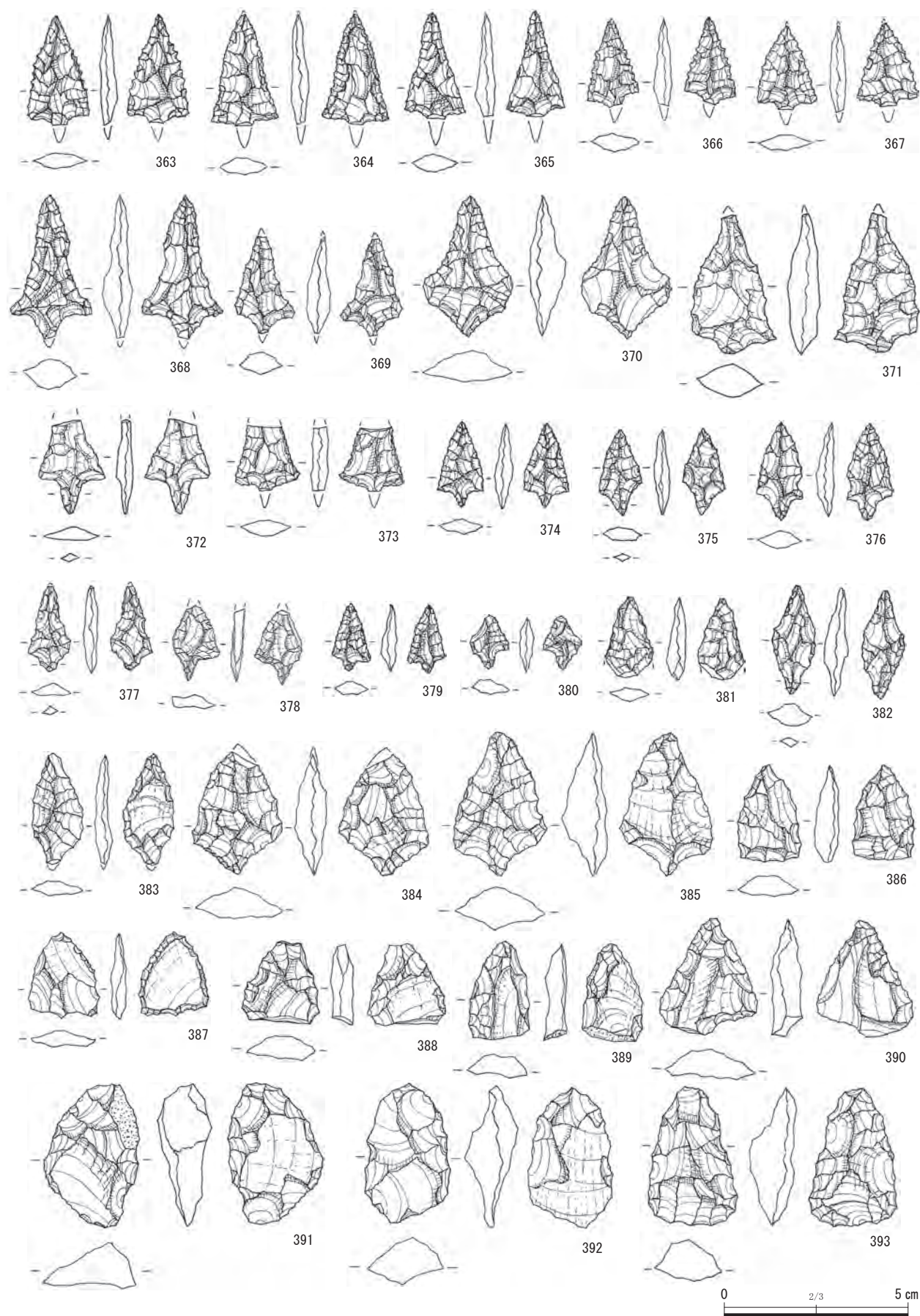
石剣

第 1 号住居跡の覆土中から合計 7 点の石剣が出土した。頭部（柄頭）を有するものは 462 ～ 465 の 4 点、柄の部分は 467 で 1 点、鋒（切先）まで存在するものは 466・468 の 2 点である。

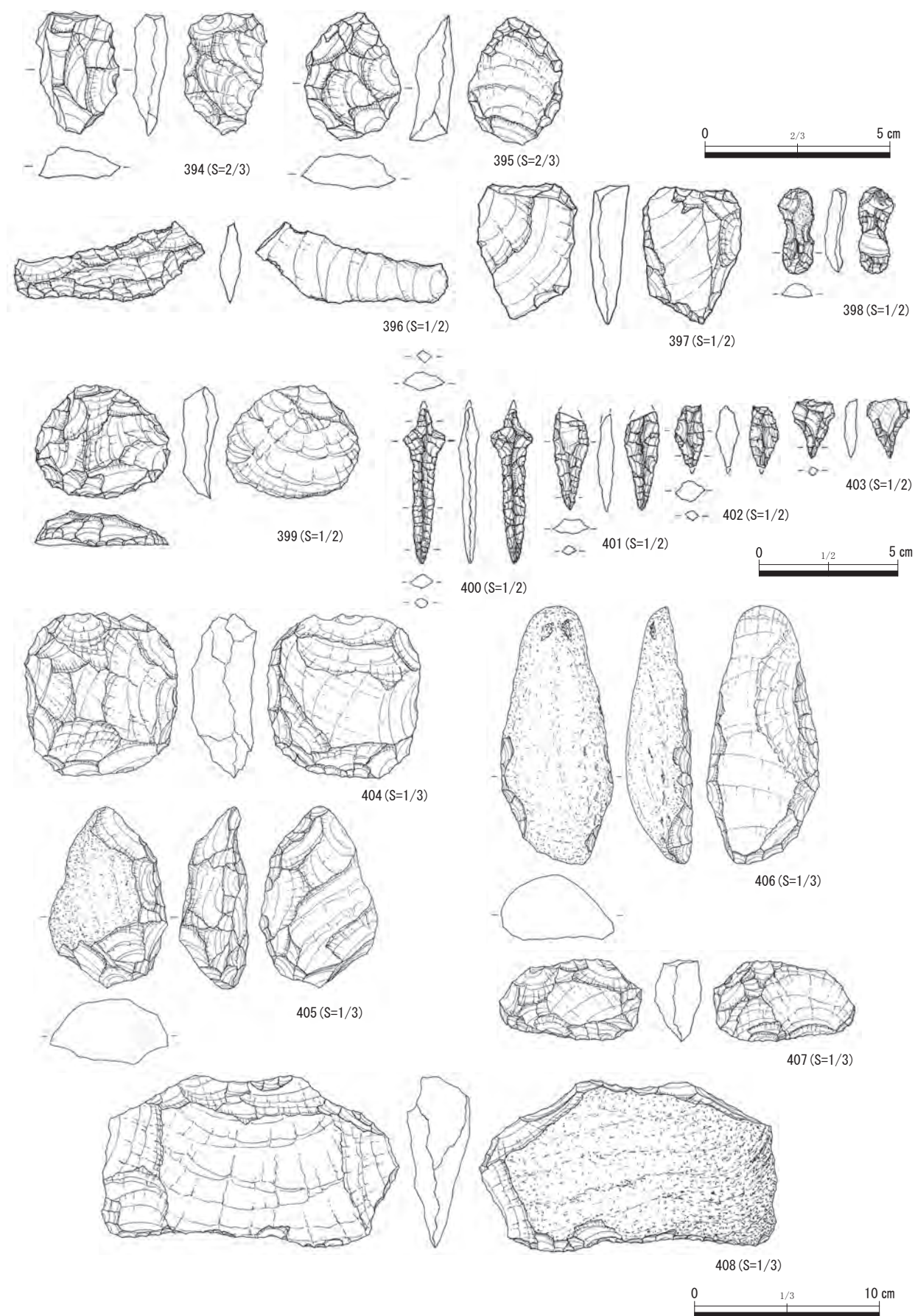


第38図 1号住居跡出土石器（1）

III 発見された遺構と遺物

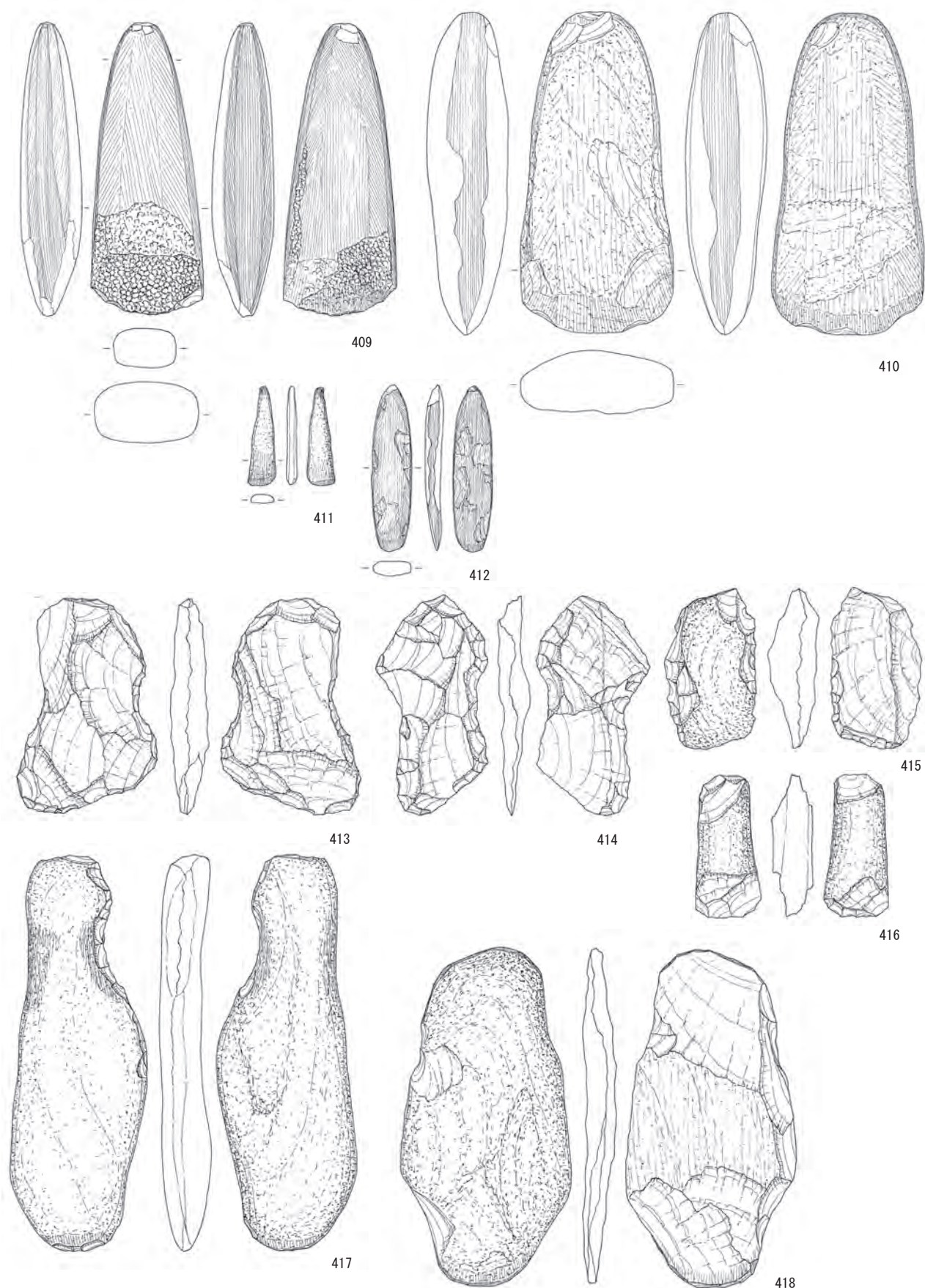


第39図 1号住居跡出土石器(2)

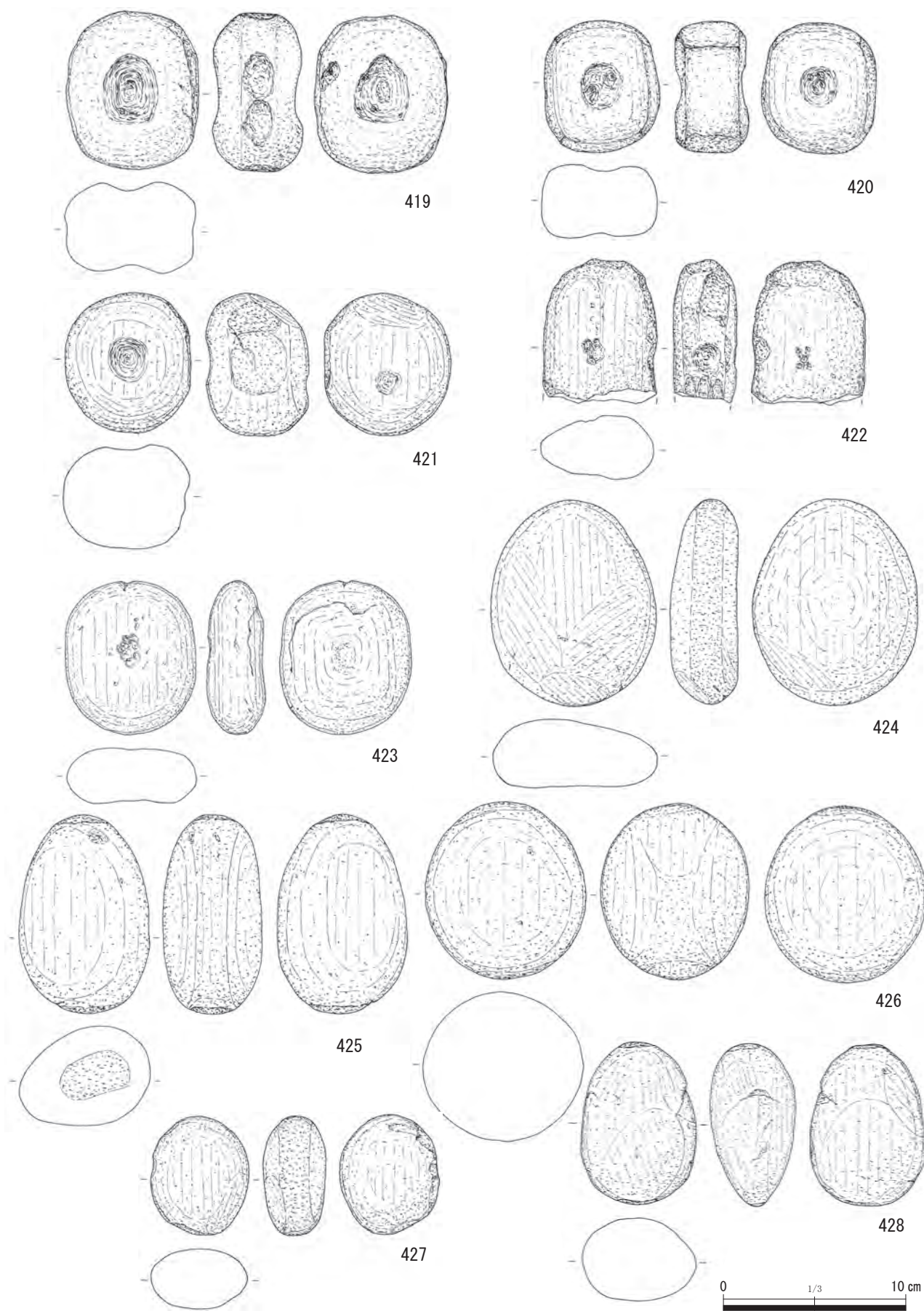


第40図 1号住居跡出土石器(3)

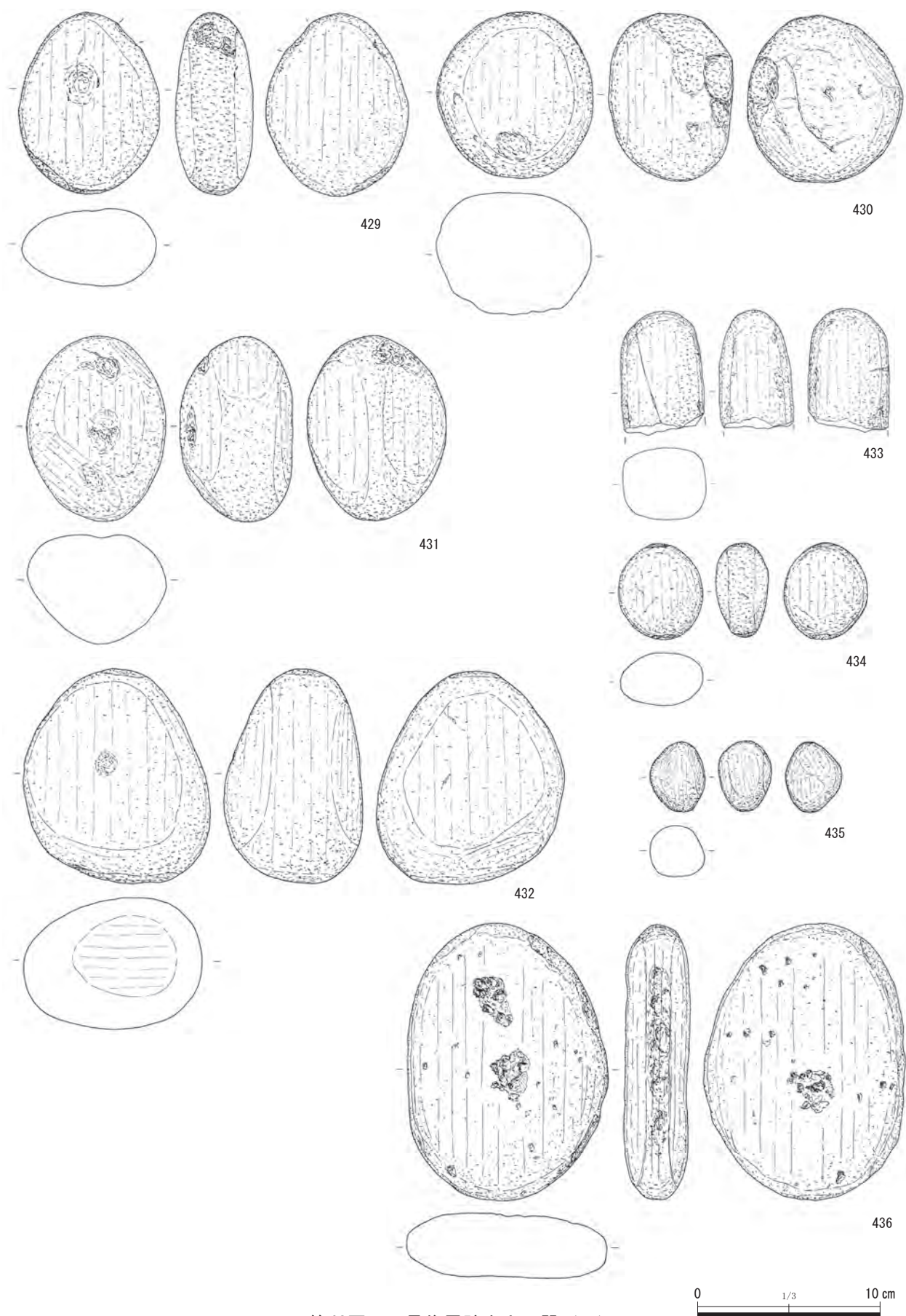
Ⅲ 発見された遺構と遺物



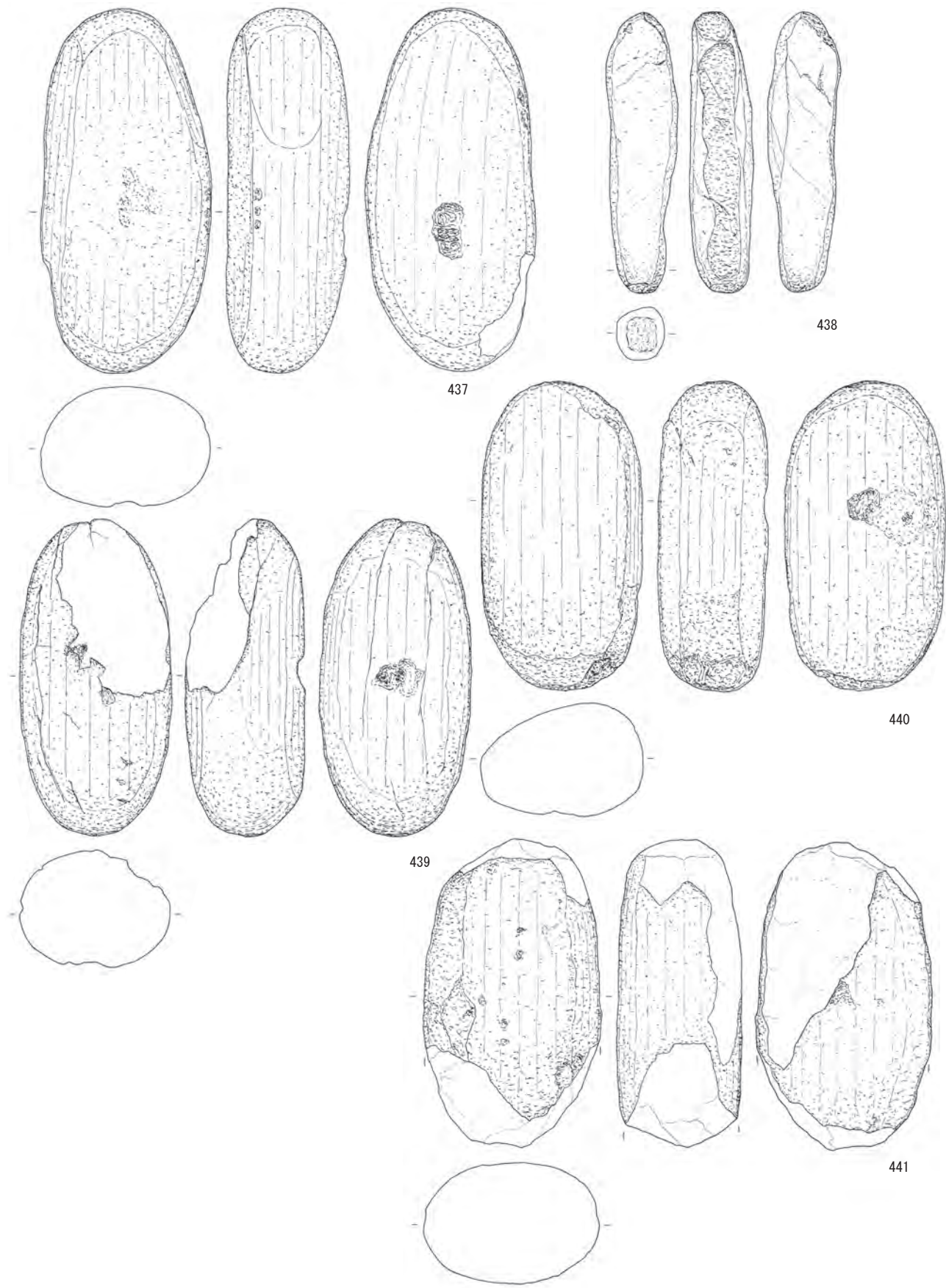
第41図 1号住居跡出土石器（4）



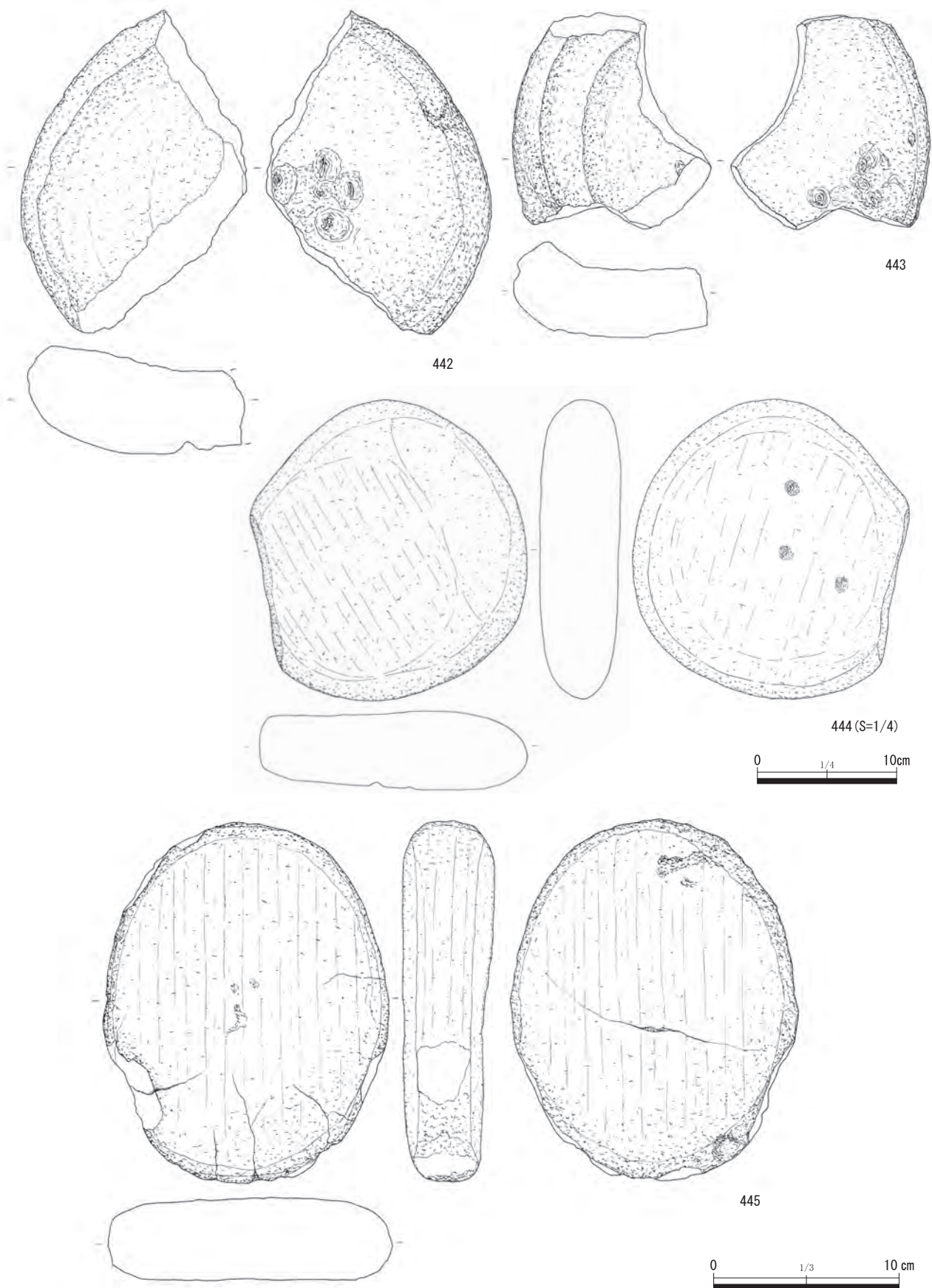
第42図 1号住居跡出土石器(5)



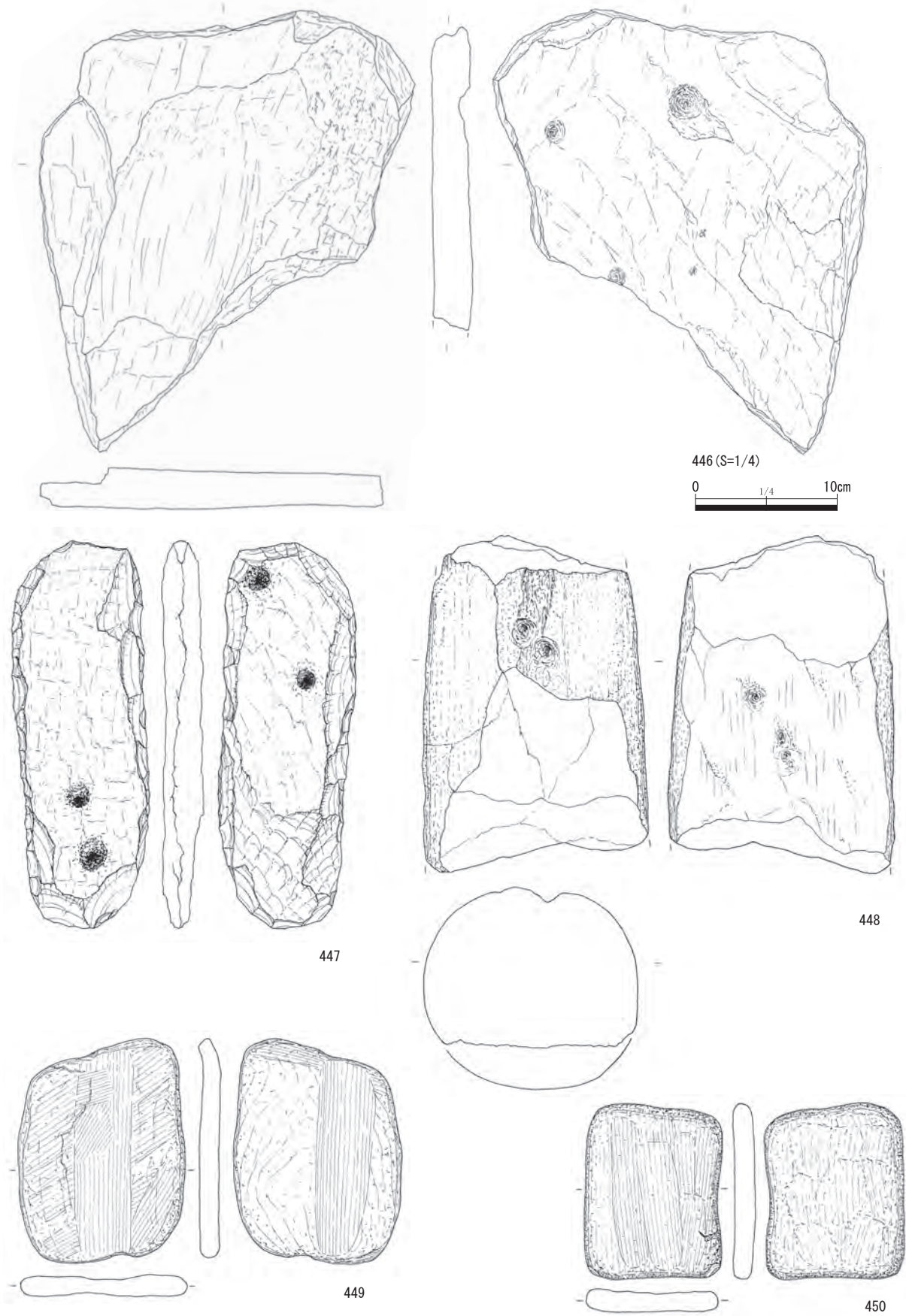
第43図 1号住居跡出土石器（6）



第44図 1号住居跡出土石器（7）

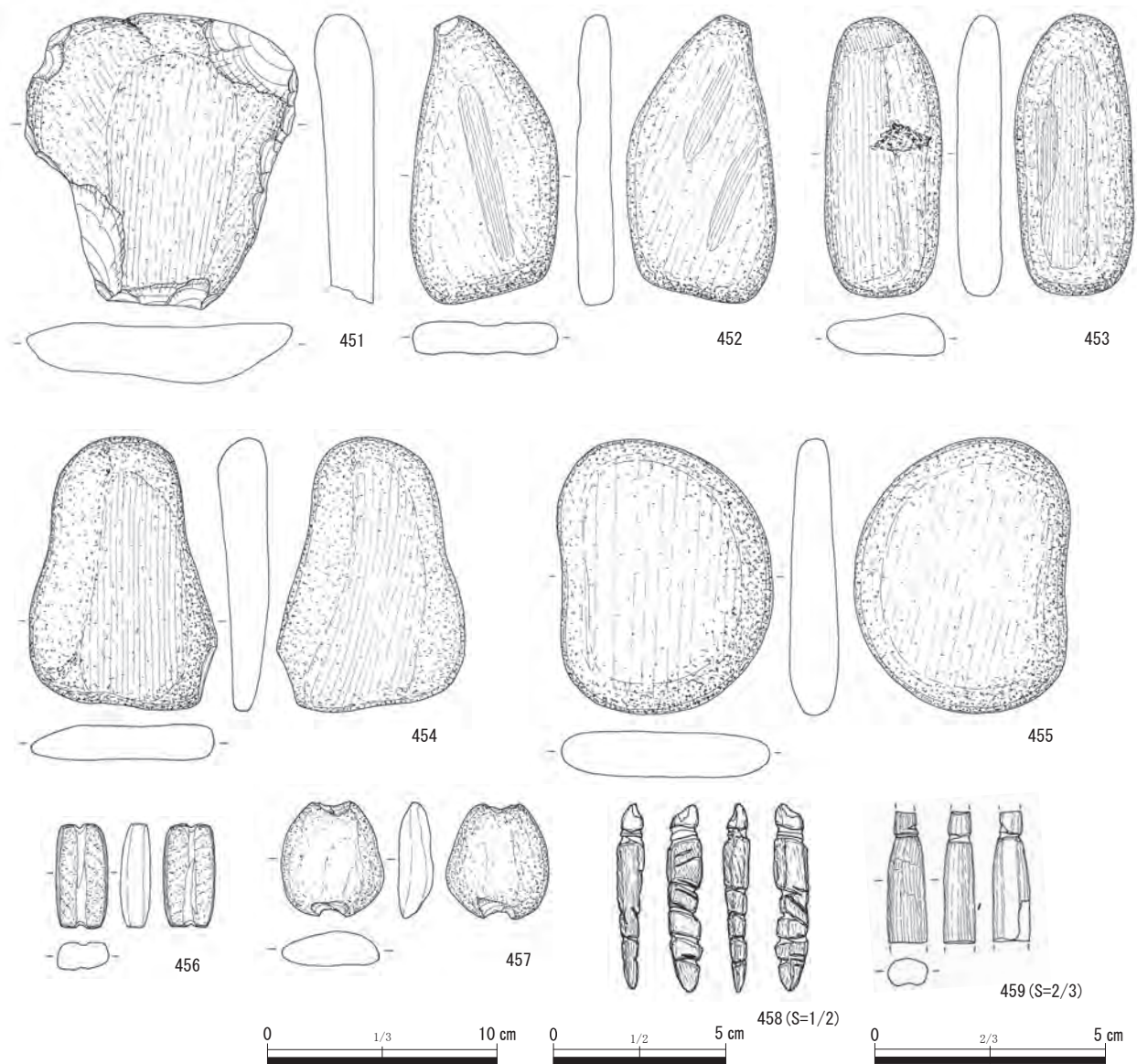


第45図 1号住居跡出土石器（8）



第46図 1号住居跡出土石器(9)

0 1/3 10 cm



第47図 1号住居跡出土石器(10)・石製品・骨角器

464 は台形状頭部の先端部に明瞭な沈線 1 条と、不明瞭な沈線 1 条の合計 2 条の沈線を刻み込んでいる。462 と 465 は頭部の先端部がやや尖る扁平な形状で、462 は柄から身への移行部が表現され、刃関を表現しているものと推定される。463 は柄頭から切先までが現存する完形品である。長さ 34.1 cm の優品で、柄頭は扁平な台形状に成形される。柄から身への移行部が丁寧に表現されている。

石刀

469 は若干内反する刃部を持つ石刀である。先端部のみ現存するが、背の部分は幅広く平坦に研磨が施されている。切先付近の刃部には、直交する 2 本の浅い刻みが施されている。468 も測縁の

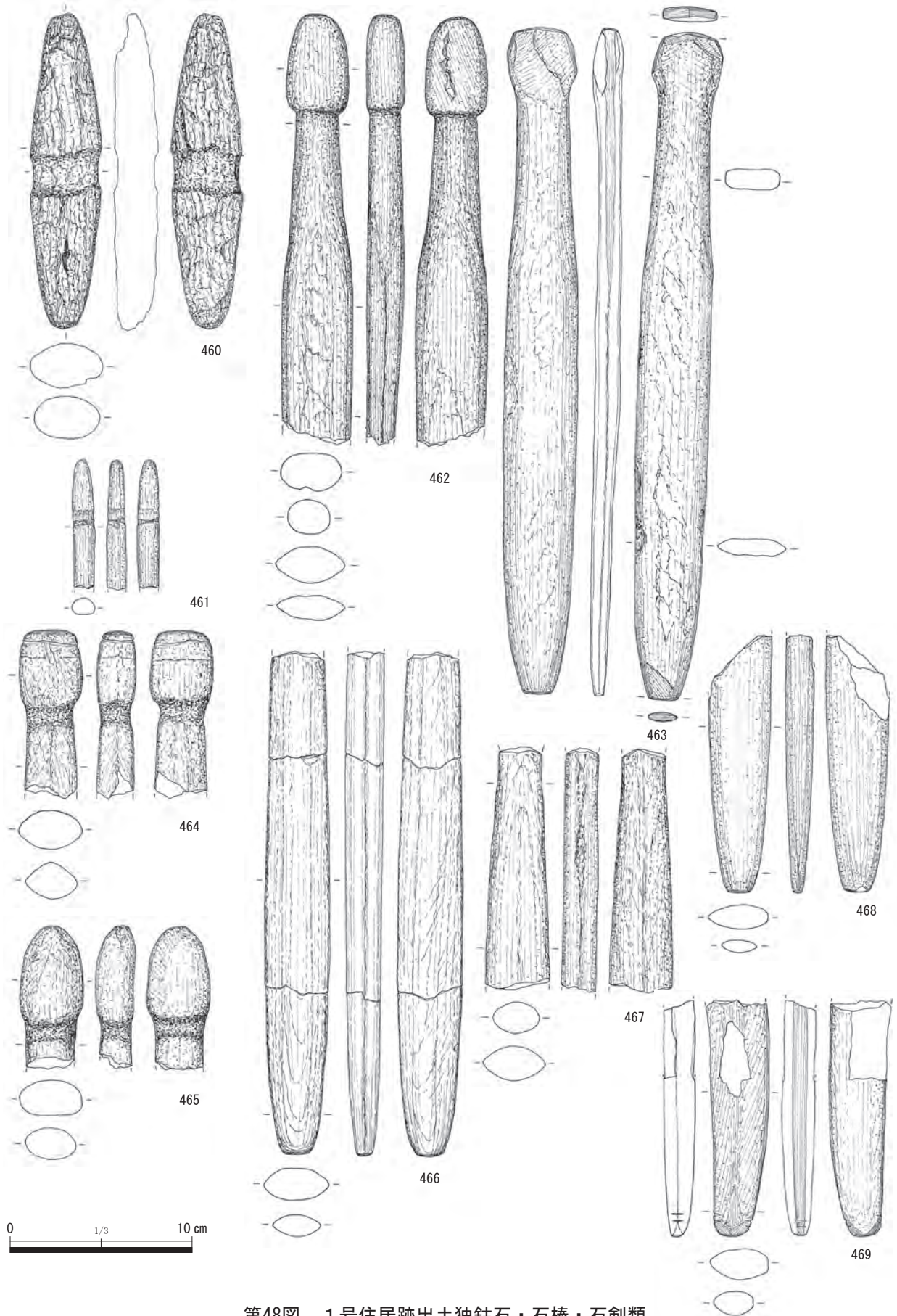
一方の背となる部分に 469 と同様な磨きが施されている。両側縁が平行しているため石剣と捉えたが、石刀になる可能性がある。

石製装飾品

458 は三角柱状の素材で、1 辺を背とし、腹部となる 2 辺に装飾となる刻みを施している。頭部は一部欠損するが、何条かの沈線で区画されており、垂飾になるものと推測される。

骨角器

459 は、欠損するが鹿角製のヘアーピンと思われる。片面に鹿角内面の湾曲部が残っている。頸部を磨り切りの沈線で区画し、全面に研磨を施している。



第48図 1号住居跡出土独鈷石・石棒・石剣類

3 堅穴状遺構と出土遺物

1号堅穴状遺構（第49・50図）

本遺構は、遺構確認に伴い南北にやや細長い長方形の調査区から北東方向へと拡張した調査区内に位置する。当初土坑として調査を開始したが、遺構の南西コーナーが拡張調査区内で検出され、遺物が調査区内に広がることから堅穴状遺構として調査を行った。調査区の拡張部分全体に遺物の分布がみられ、出土状況等も1号住居跡と類似していたが、最終的に炉や壁柱穴等の住居跡付属施設が未検出であったため、堅穴状遺構と認識した。遺構の形状や遺物の出土状況等から、住居跡であった可能性は高い。

残存する堅穴状遺構の南西コーナーからでは、遺構の規模、形状等は不明であるが、隣接する1号住居跡とは主軸方向が異なるものと想定される。堅穴の深さは約0.4m前後で、床面は凹凸を呈し、壁の立ち上がりは緩い。覆土は大きくは1・3層の黒褐色土2層で構成される。遺物は1・3層から安行3b式期を主体とした土器石器類が出土しており、この堅穴状遺構もその時期の所産と推定される。

1号堅穴状遺構出土遺物（第51・52図）

縄文土器

4は口縁が内湾し、底部が張り出す加曽利B1式の小型の鉢で、口縁部の平行沈線間に左下がり連続する区切り文を施し、1段目と3段目の平行沈線間に細かな斜位の刻みを施文する。胴部下端は刻みを施す平行沈線で区画し、胴部文様帯内には三角形の逆「の」字文を施文する。推定口径10.5cm、現存高6.4cmを測る。5は口唇部より少し下がった部分に押圧を施した隆帯を巡らす紐線文系土器で、口縁部裏に細沈線が巡る。6は口縁部から沈線の斜格子目文が施文される。以上、加曽利B1式である。

7・8は口縁部に押圧を施す隆帯を巡らす紐線文系土器で、胴部に7は斜行沈線、8は横位の条線状の整形痕を残す。9は口縁部が内折する深鉢形土器で、口縁部に3本の平行沈線を施文する。10は口縁部が内屈する大波状口縁深鉢で、口縁に沿って隆帯を巡らす。以上、曾谷・高井東式で

あろう。11は釣り手土器の釣り手部で、地文LR縄文上に深い角状沈線を施文している。加曽利B式か曾谷式かの判断は難しい。

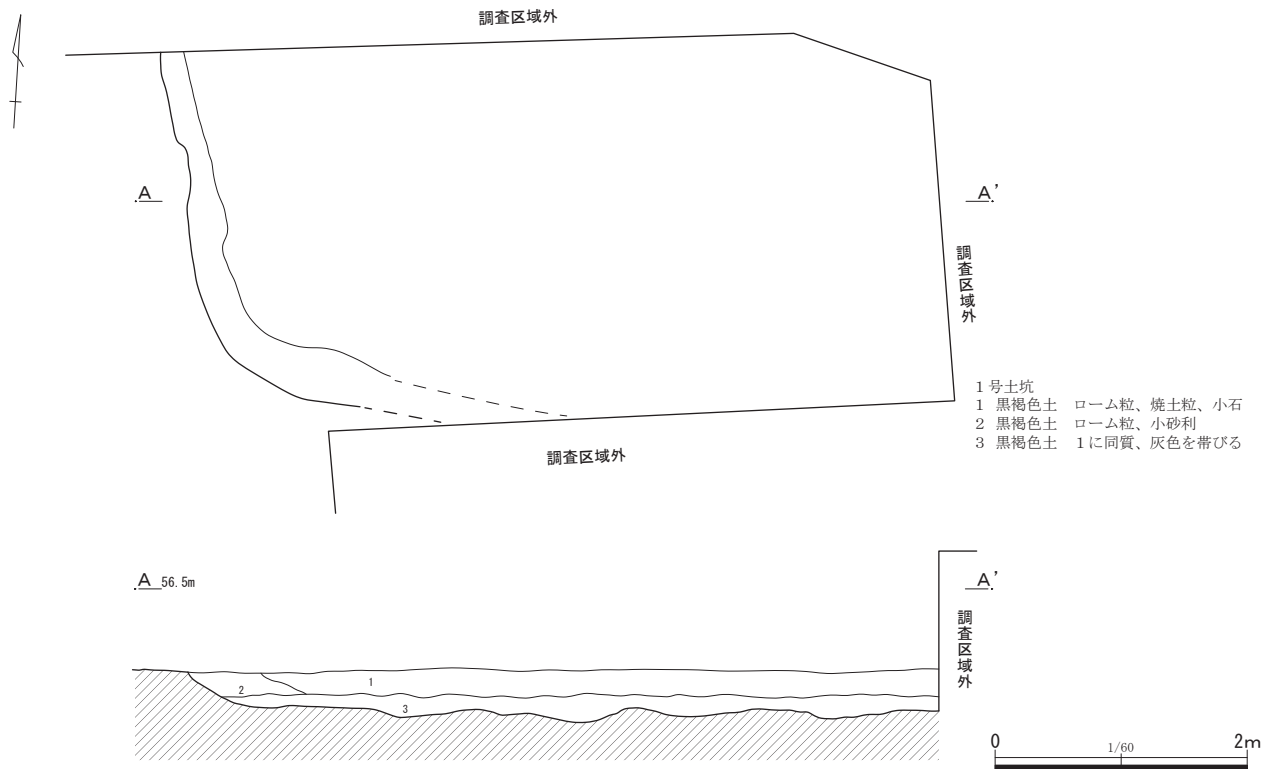
13・14は後期安行式の条線文土器で、いずれも口縁部を沈線で区画し胴部に斜行条線を施文する。安行1式であろう。

15は刻みのある山形突起を持つ平口縁深鉢形土器で、縦位鋸歯状の磨消縄文のモチーフを施文し、RL縄文を施文する。16は大波状口縁深鉢で、口縁部区画の帯縄文の分岐部に豚鼻状の縦位刻横瘤の貼付文を施文し、RL縄文を施文する。以上、安行2式であろう。

17は緩い波状口縁の筒形の深鉢と思われ、平行沈線間に細かなLR縄文を施文する。18は口縁が内湾する鉢形土器と思われ、口縁部と胴部に豚鼻状の縦位刻横瘤を施文する。縄文はLR縄文である。以上、晩期初頭の安行3a式であろう。19は口縁部に2段瘤を持つ注口土器で、瘤には浅い縦位刻みを施し、瘤下に小さな豚鼻状瘤を施文する。胴部の文様は細かな刻みを施した刻帯で網目状のモチーフを構成するものと思われる。縄文はRL縄文を施文する。安行2式から安行3a式にかけのものと思われる。

1・20～24・27・28は弧線文や入組状三叉文等を施文する晩期前葉の安行3b式土器である。

1は大波状口縁深鉢で、口縁部と底部を欠損する。口縁部は、波頂部から弧状に垂下する帯縄文で三角形区画が形成されるものと思われる。胴部には扁平な縦位刻みを施す円形瘤で連結される沈線のレンズ状文を構成し、区画内にLR縄文を充填する。胴部は平行沈線で区画し、LR縄文を充填施文する。20は頸部が括れ胴部が張る深鉢で、沈線の帯状入組文を構成するものと思われる。縄文はLR縄文である。21～24・27・28は台付鉢もしくは鉢である。21は胴部に带状入組文を施文する台付鉢と思われ、口縁部にB突起が付く。22は口縁部に弧線文を、胴部に入組状の弧線文を施文するものと思われ、LR縄文を施文する。24は口縁部を沈線で区画して、胴部に弧線区画文を施文し、それぞれにLR縄文を施文する。23は波状口縁を呈する浅鉢で、波頂部に双頭突起を



第49図 1号堅穴状遺構

持ち、口縁部を沈線で区画する。胴部にはL R縄文を浅く施文する。27・28は台付鉢の脚部で、27は入組状三叉文、28は対向三叉文状のモチーフを構成する。縄文はL R縄文である。

29・30は晩期中葉の安行3c式あるいは3d式土器である。29は口縁部が外反し、胴部の括れる小型の鉢で、対向する沈線のレンズ状文で三角形区画を施し、区画内に三叉文とその下部に上向き弧線文を施文する。第2図13の文様構成と同じ構成である。30は角頭状の口唇部が外傾して開く器形で、深い角状沈線でレンズ状文や波状文を施文する。安行3d式であろう。

2は無文土器で、肥厚する口唇部が内湾気味に立つ器形を呈する。晩期前葉の無文土器であろう。31は双頭の突起が付く鉢で、器面は荒れている。32は折返状口縁の深鉢で、口縁部と胴部に押圧状の指頭整形痕が残る。33・34も指頭整形痕を残す無文土器で、34は輪積痕を残す。以上は晩期前葉から中葉にかけての粗製無文土器である。

35は口縁部が大きく外反する広口壺の口縁部破片で、波状突起を起点に、裏面に突起を囲い込む弧状の隆帯を施文する。36は短い口縁部が外

反する広口壺である。以上は晩期前葉から中葉にかけての所産であろう。

3・12・25・26はいわゆる異系統土器である。12は口縁部付近の平行沈線間に縦位刻みを施し、中央部の窪む縦長の貼付文を施文する。異系統の文様構成で、新地式土器である。後期末葉に伴うものであろうか。

25・26は沈線区画内に細沈線を充填施文する東関東系の細密沈線文系土器である。安行3b式土器に伴うものである。

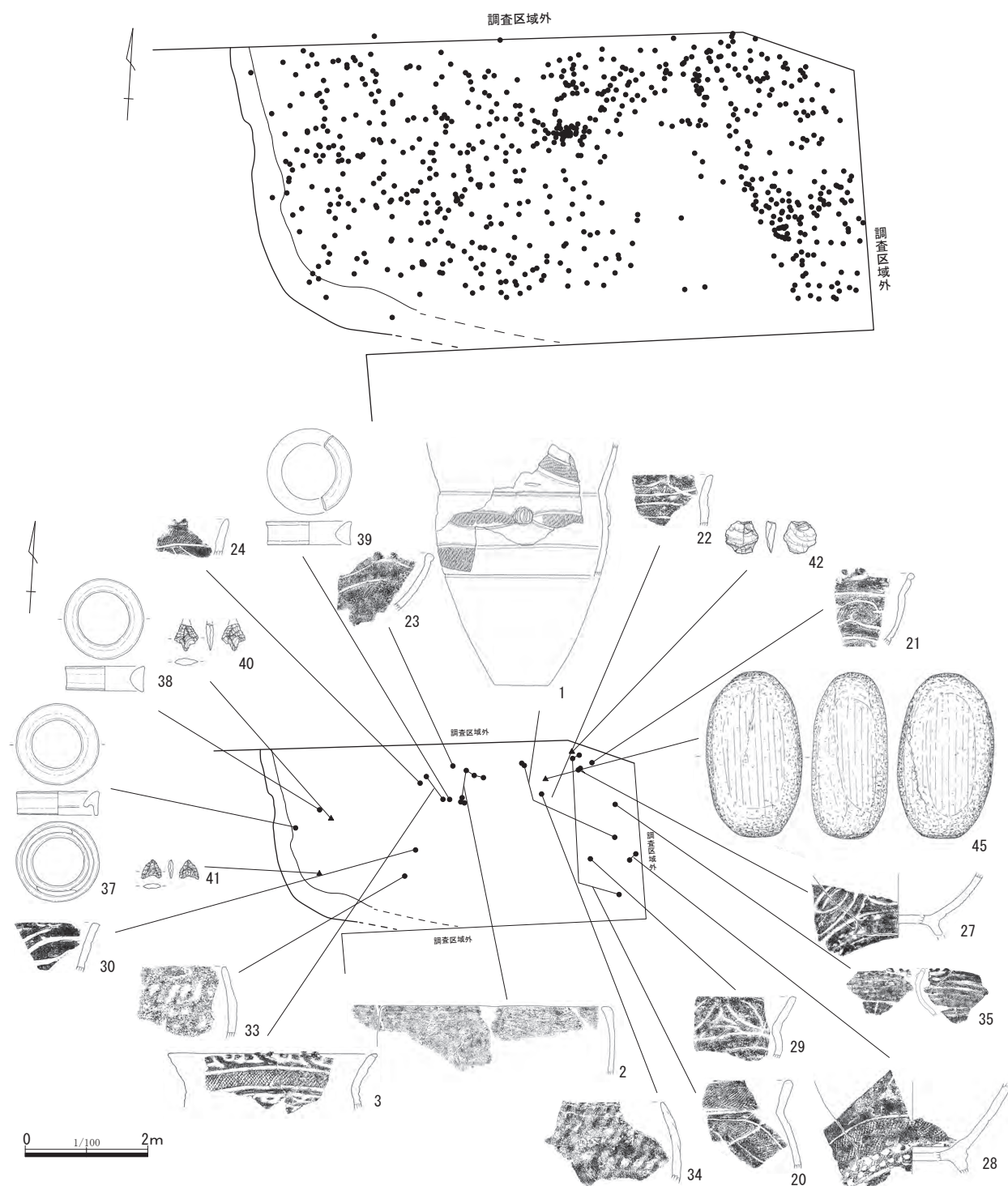
3は口縁部が外反して開き、頸部が括れる深鉢形土器で、口縁部と頸部に大柄の羊歯状文を施文する。沈線で区画される頸部にはL R縄文を施文する。大洞BC式土器で、安行3b式に伴うものである。

土製品

耳飾

環状の耳飾が3点出土した。ほぼ同径で、2点は完形品である。37は断面が鈎状で、鈎部分が円形の溝状に廻る。装着部分はわずかに窪む。38、39は断面が三角形を呈し、38は完形、39は約3分の1が現存する。

III 発見された遺構と遺物



第50図 1号竪穴状遺構遺物分布図

石製品

石鏃

2点出土した。40は黒曜石製の中子を持つ凸基鏃で、先端部を欠損する。41は黒曜石製の小型の凹基鏃である。完形品である。

搔器

42は円形状のチャートの剥片端部に調整剥離

を施す、エンドスクレイパーである。43は三角形剥片の一边中央部に、抉り状の調整剥離を施したチャート製のノッチドスクレイパーである。

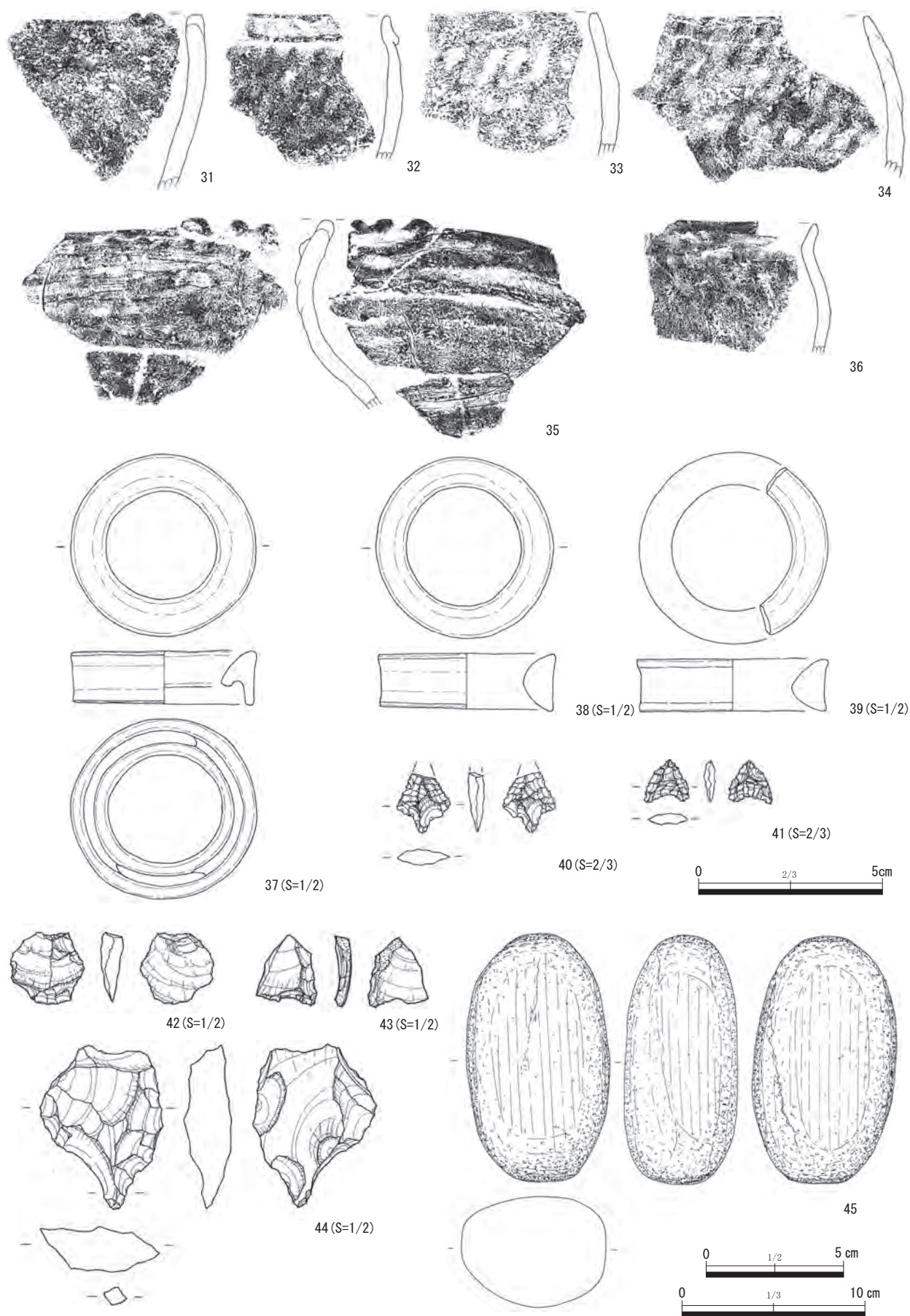
石錐

44は剥片の先端部に調整剥離を施した石錐である。剥片の周囲には、形を整える調整剥離を施している。

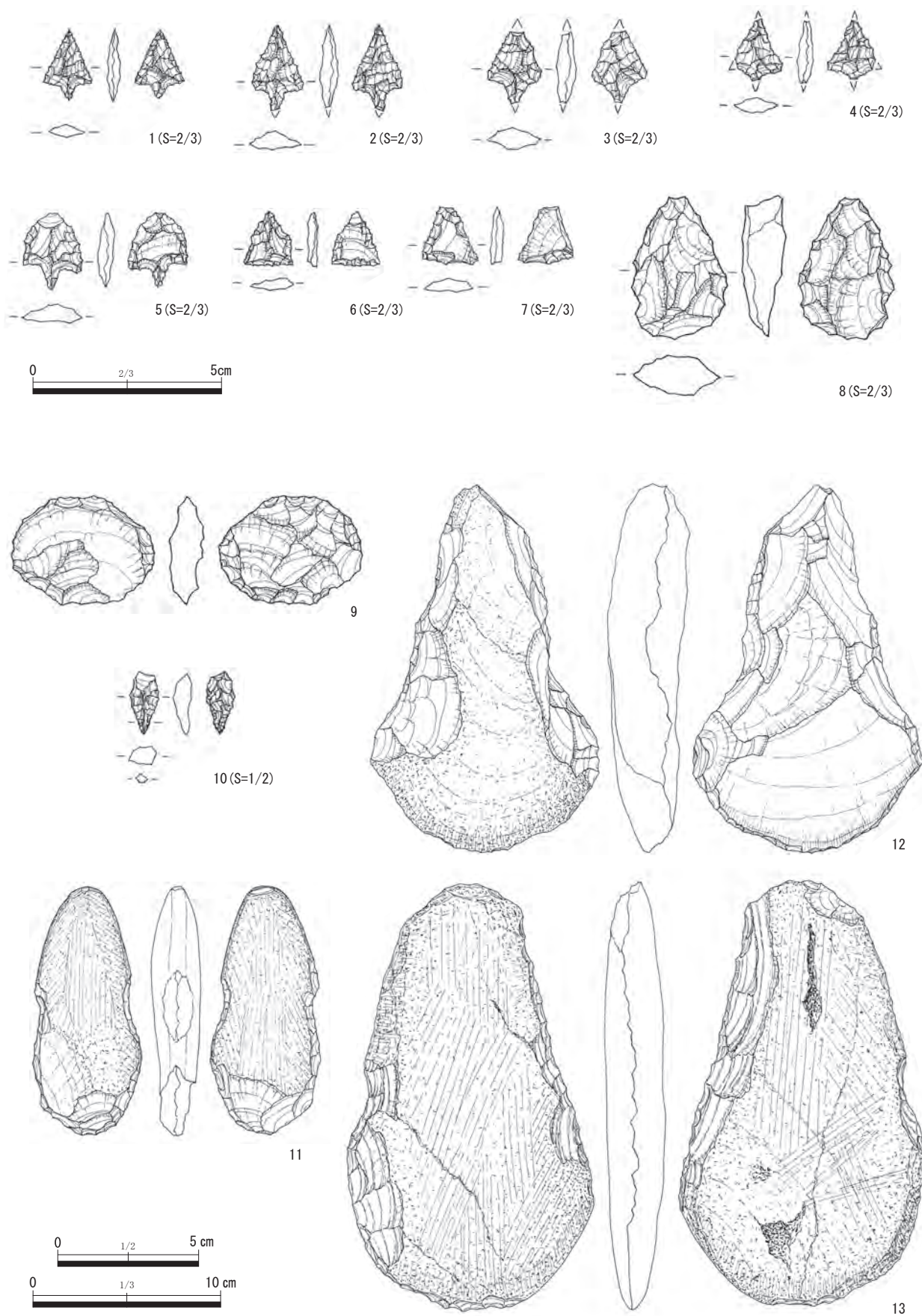


第51図 1号竪穴状遺構出土遺物(1)

III 発見された遺構と遺物

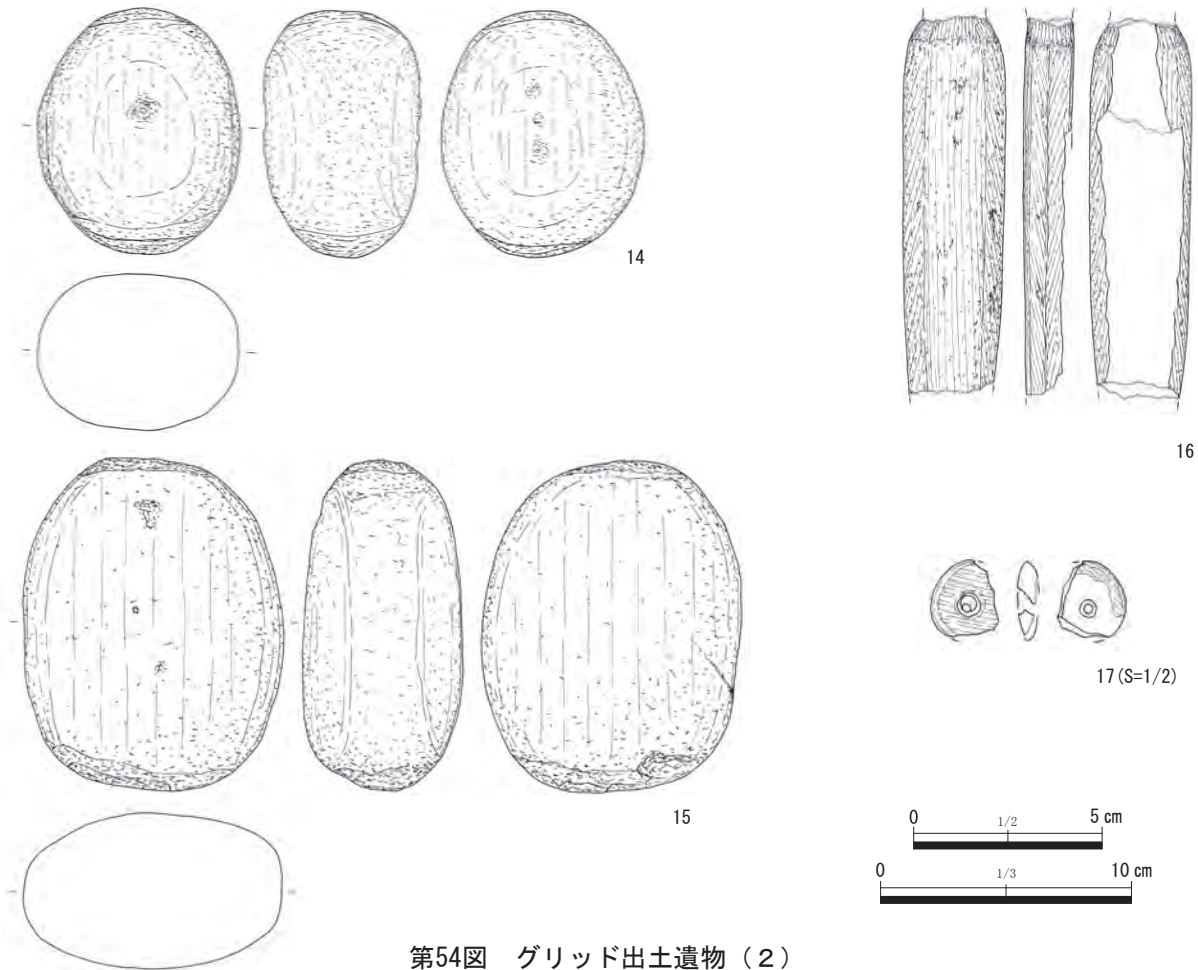


第52図 1号竖穴状遺構出土遺物(2)



第53図 グリッド出土遺物（1）

III 発見された遺構と遺物



第54図 グリッド出土遺物（2）

磨石

長楕円形の形状で、表裏面と側面に擦痕を有する磨石である。実測図表面中央部には、わずかな敲打の痕跡が認められる。閃緑岩製である。

4 グリッド出土遺物（第53・54図）

石器

石鏃

1～5は中子を持つ凸基鏃である。1～4は整然とした二等辺三角形を呈し、5は未成品なのか先端部が丸型を呈する。2は基部の一部、3・4は先端部と基部の一部を欠損する。6は平基鏃である。7・8は石鏃の未成品である。

搔器

9はチャート製の円形剥片の周囲に調整剥離を施した、エンドスクレイパーである。

石錐

10は石鏃の可能性もあるが、先端部を三角形に整形することから、石錐と判断した。

打製石斧

11～13は打製石斧で、11は中央側縁に小さな抉りを持つ分銅形石斧、12・13は刃部が開く楔形石斧である。11・13は表裏面に擦痕が認められ、磨製石斧の再生利用品である可能性もある。12・13は刃部に使用による摩耗が認められる。

磨石

14は円形の、15は長楕円形の磨石で、14は表裏面に円形の敲打痕を持つ。15は長軸上の両端部に敲打痕が認められ、敲石としての機能も有しているものと思われる。

石剣

16は有頭石剣の胴部破片で、上部に頭部との境の括れが認められる。身の両側縁に研磨によるしのぎを持つ。緑泥石片岩製である。

石製品

17は円形扁平の基石状の石製品で、中央部に円孔が穿たれる。時期等不詳は不明である。

第3表 復元土器観察表

欠損品は()つき、単位はcm、g、現存率は%

遺構	番号	器高	口径	底径	時期	備考	遺構	番号	器高	口径	底径	時期	備考
1住	1	22.5	(34.2)		Ⅲ-2	口縁部～胴部片	1住	38	8.7		6.2	Ⅳ-1	胴部～底部60
1住	2	17.9	(18.0)		Ⅲ-2	口縁部～胴部片	1住	39	11.4		(6.8)	Ⅳ	50
1住	3	15.1		(11.4)	Ⅲ-2	鉢部～台部60	1住	40	10.0	7.7		Ⅳ	50
1住	4	9.5	(28.3)		Ⅳ-1	口縁部	1住	41	7.5	15.8		Ⅳ	20
1住	5	8.3	(10.0)		V-1	口縁部	1住	42	5.5	(20.8)		Ⅳ	口縁部
1住	6	8.2	(17.5)		Ⅳ-2	口縁部	1住	43	2.7	10.4		Ⅳ	口縁部50
1住	7	7.2	(29.5)		Ⅳ-2	口縁部	1住	44	5.0	(13.0)		Ⅳ	口縁部
1住	8	6.2	(26.2)		Ⅳ-2	口縁部	1住	45	5.8	(11.8)		Ⅳ	口縁部50
1住	9	14.9	(27.0)		Ⅳ-2	口縁部片	1住	46	9.7			V-4	胴部片
1住	10	10.8	(26.4)		Ⅳ-2	口縁部～胴部片	1住	47	9.8	(5.5)	5.8	V-3	ほぼ完形
1住	11	3.9	(20.0)		V-3	口縁部	1住	48	8.7			V-3	胴部片
1住	12	5.9	(18.0)		Ⅳ-1	口縁部	1住	49	11.4			V-3	胴部片
1住	13	7.8	17.4	6.2	Ⅳ-1	口縁部～底部90	1住	50	13.7	(5.6)		V-3～4	口縁部～底部90
1住	14	8.4	(12.2)	(6.8)	V	口縁部～底部25	1住	51	9.3	(6.8), (7.2)		V-3	口縁部～底部90
1住	15	6.2	(22.0)		Ⅲ	35	1住	57	23.5	(19.8)	(5.4)	Ⅵ-1	60
1住	16				Ⅳ-1		1住	58	26.1	(30.5)		Ⅵ-2	口縁部～胴部片
1住	17	8.8	(14.8)		Ⅲ～Ⅳ	30	1住	59	22.9	(25.8)		Ⅵ-2	口縁部～胴部片
1住	18	7.0	12.4	5.3	Ⅲ～Ⅳ	70	1住	60	24.8	(31.2)		Ⅵ-2	口縁部60
1住	19	8.0	(11.0)		Ⅲ～Ⅳ	50	1住	61	27.8	(28.5)		Ⅵ-2	口縁部40
1住	20	5.0	(11.0)		Ⅲ～Ⅳ	40	1住	62	19.4	(32.8)		Ⅵ-2	口縁部～胴部片
1住	21	3.5	9.6		Ⅲ～Ⅳ	90	1住	63	16.4	(35.5)		Ⅵ-2	口縁部
1住	22	5.4	(18.8)		Ⅲ～Ⅳ	口縁25	1住	64	25.0	15.2, 36.0	9.0	Ⅵ-1	口縁～底部90
1住	23	4.0	(16.0)		Ⅲ～Ⅳ	25	1住	65	4.5		(8.6)	Ⅱ	底部40
1住	24	3.9	8.5, 9.2		Ⅲ～Ⅳ	完形	1住	66	4.6		4.0	Ⅱ	底部
1住	25	7.2			Ⅳ-1	台付鉢の脚台部	1住	67	5.9		(10.0)	Ⅱ	60
1住	26	4.4			Ⅳ-1	台付鉢の脚台部	1住	68	5.8		9.8	Ⅱ	底部
1住	27	3.2			Ⅳ-1	台付鉢の脚台部	1住	69	5.0		6.4	Ⅳ	底部
1住	28	4.4			Ⅳ-1	台付鉢の脚台部	1住	70	11.8		7.2	Ⅳ	底部
1住	29	6.0		9.3(台部)	Ⅳ-1	台付鉢の脚部	1住	71	10.9		9.6	Ⅳ	底部
1住	30	4.8		8.4(台部)	Ⅳ-1	60	1住	72	4.9		8.4	Ⅳ	底部
1住	31	6.4		(16.0)	Ⅳ-1	台部30	1住	208	3.2	3.6		V-3	口縁部
1住	32	3.6	8.1		Ⅲ-2	80	1堅	1	13.9			Ⅲ-2	胴部片
1住	33	4.0	(7.2)		Ⅳ	口縁部	1堅	2	9.6	(33.2)		Ⅵ-1	口縁部
1住	34	3.6	7.6		Ⅳ	口縁部	1堅	3	5.9	(21.6)		V-2	口縁部
1住	35	2.1	6.1		Ⅳ	口縁部	1堅	4	6.4	(10.5)		I-1	口縁部～胴部片
1住	36	2.9	6.4		Ⅳ	口縁部	1堅	27	6.7			Ⅲ-2	
1住	37	6.9			V-1	25	1堅	28	9.9			Ⅲ-2	

第4表 ミニチュア土器観察表

欠損品は()つき、単位はcm、g、現存率は%

遺構	番号	器高	口径	底径	時期	備考	遺構	番号	器高	口径	底径	時期	備考
1住	52	4.0	2.8, 3.4	1.4, 1.8	Ⅳ	完形	1住	55	5.9	7.0		Ⅳ	完形
1住	53	2.0	1.8		Ⅳ	完形	1住	56	4.9		5.0	Ⅳ	65
1住	54	3.6	6.2		Ⅳ	ほぼ完形							

第5表 土製品観察表

単位はcm、g

遺構	番号	種類	径	縦	横	厚さ	重さ	遺構	番号	種類	径	縦	横	厚さ	重さ
1住	320	円形土製品	4.6			1.1	19.0	1住	322	土製円盤		3.6	3.0	0.9	11.1
1住	321	円形土製品	1.8			0.7	1.8	1住	323	土製円盤		4.1	4.5	0.9	18.6

Ⅲ 発見された遺構と遺物

第6表 耳飾観察表

欠損品は () につき、単位はcm、g、現存率は%

遺構	番号	径・上	径・中	径・下	内径	高さ	重さ	現存率
1住	290	7.3	4.4	5.3	2.1	2.6	76.5	80
1住	291	7.3	4.0	5.1		2.2	44.9	60
1住	292	4.8	2.2	2.6	1.1	2.2	21.7	90
1住	293	4.1	2.9	3.8		2.2	15.7	50
1住	294	3.3	3.1	3.4	0.7	1.8	20.6	90
1住	295	4.2	2.6	3.4	0.5	1.8	18.6	完形
1住	296	(5.1)	(3.5)	(4.3)	0.8	2.0	26.5	85
1住	297	6.1	4.2	4.5	1.0	2.0	27.6	80
1住	298	(6.9)	(4.1)	(5.9)	1.3	2.9	63.6	70
1住	299	4.4	2.8	3.5	1.5	1.8	18.7	90
1住	300	5.2	3.5	4.6	1.8	2.0	23.5	完形
1住	301	4.9	2.8	4.1	1.1	3.2	57.3	完形
1住	302	6.4	4.4	5.7	1.9	3.1	66.9	完形
1住	303	(5.1)	(3.9)	(4.6)	2.9	2.0	11.6	45
1住	304	8.0	4.8	5.3	3.2	2.7	79.7	90
1住	305	(5.0)	(4.4)	(4.7)	(2.5)	1.6	7.2	25
1住	306	(7.2)	(7.1)	(7.0)	(3.5)	1.6	6.9	10

遺構	番号	径・上	径・中	径・下	内径	高さ	重さ	現存率
1住	307	2.7	2.8	2.7	1.9	1.2	6.8	完形
1住	308	(4.0)	(2.3)	(3.0)	0.8	1.7	12.6	60
1住	309	5.9	3.5	4.5	2.1	2.9	41.8	完形
1住	310	(5.6)	(5.0)	(4.7)	(2.9)	2.3	7.6	20
1住	311						2.8	
1住	312						1.4	
1住	313	3.0	2.8	2.9	1.6	1.8	9.2	完形
1住	314	5.6	4.3	4.7	1.8	2.1	37.8	完形
1住	315	6.9	4.5	5.2	1.8	2.2	49.7	90
1住	316	7.8	5.2	5.5		3.0	(43.1)	75
1住	317						7.5	
1住	318						4.0	
1住	319						4.9	
1堅	37	6.7	6.6	6.6	4.0	1.9	40.4	完形
1堅	38	6.4	6.2	6.3	4.2	2.1	42.6	完形
1堅	39	(7.0)	(6.7)	(6.9)	(4.4)	1.9	16.8	30

第7表 石器観察表

欠損品は () につき、単位はcm、g、現存率は%

遺構	番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ
1炉	8	石鏃C	チャート	(2.0)	1.3	0.5	0.8
1住	324	石鏃A	黒曜石	1.4	1.4	0.3	0.4
1住	325	石鏃A	チャート	1.8	1.5	0.4	0.7
1住	326	石鏃A	チャート	(2.1)	(1.7)	0.3	1.1
1住	327	石鏃B	チャート	2.2	1.8	0.4	1.2
1住	328	石鏃B	黒曜石	1.8	1.7	0.3	0.6
1住	329	石鏃B	チャート	2.2	1.8	0.4	0.9
1住	330	石鏃B	チャート	(1.5)	1.9	0.4	0.8
1住	331	石鏃B未	黒曜石	(1.7)	1.8	0.4	1.0
1住	332	石鏃B	チャート	(1.7)	1.2	0.3	0.4
1住	333	石鏃B	チャート	(2.3)	2.0	0.3	1.2
1住	334	石鏃B	チャート	3.5	2.3	0.5	2.6
1住	335	石鏃B	チャート	(3.4)	(1.8)	0.4	1.4
1住	336	石鏃B	チャート	3.0	1.4	0.4	1.1
1住	337	石鏃B	チャート	2.6	1.7	0.4	1.0
1住	338	石鏃B	チャート	(3.0)	1.9	0.4	1.3
1住	339	石鏃B	安山岩	(2.9)	2.2	0.4	1.7
1住	340	石鏃B	チャート	(2.2)	1.7	0.4	0.9
1住	341	石鏃B	チャート	2.8	1.8	0.4	1.5
1住	342	石鏃B	玉髄	2.3	1.5	0.5	0.8
1住	343	石鏃B	チャート	3.0	1.7	0.4	1.2
1住	344	石鏃B	チャート	3.0	1.8	0.4	1.1
1住	345	石鏃B	チャート	2.9	1.7	0.5	1.2
1住	346	石鏃B	チャート	(4.4)	2.1	0.5	3.1
1住	347	石鏃B	チャート	3.2	1.6	0.4	1.6
1住	348	石鏃C	チャート	2.8	1.9	0.5	1.3
1住	349	石鏃C	チャート	2.7	1.7	0.6	1.4
1住	350	石鏃C	黒曜石	2.7	1.7	0.5	1.0
1住	351	石鏃C	黒曜石	(1.9)	1.6	0.5	0.9
1住	352	石鏃C	黒曜石	1.9	1.3	0.4	0.4
1住	353	石鏃C	チャート	(2.0)	1.7	0.5	1.0

遺構	番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ
1住	354	石鏃C	チャート	(2.8)	1.6	0.4	1.0
1住	355	石鏃C	チャート	2.7	1.5	0.6	1.1
1住	356	石鏃C	チャート	2.5	1.5	0.3	1.0
1住	357	石鏃C	チャート	(2.7)	1.9	0.5	1.7
1住	358	石鏃C	チャート	2.9	1.9	0.7	2.1
1住	359	石鏃C	黒曜石	(2.2)	1.4	0.7	1.7
1住	360	石鏃C	チャート	2.1	1.4	0.5	0.8
1住	361	石鏃C	チャート	(2.4)	1.5	0.4	1.3
1住	362	石鏃C	チャート	(2.4)	1.3	0.5	1.0
1住	363	石鏃C	チャート	(2.9)	1.7	0.5	1.6
1住	364	石鏃C	チャート	(3.0)	1.8	0.5	1.8
1住	365	石鏃C	チャート	(2.8)	1.7	0.5	1.2
1住	366	石鏃C	頁岩	(2.3)	1.4	0.5	1.0
1住	367	石鏃C	チャート	(2.2)	1.6	0.4	1.2
1住	368	石鏃C	頁岩	(3.8)	2.2	0.8	2.9
1住	369	石鏃C	チャート	(2.6)	1.7	0.6	1.6
1住	370	石鏃C未	チャート	3.8	2.4	1.0	4.5
1住	371	石鏃C	チャート	(3.8)	2.3	0.9	5.7
1住	372	石鏃C	頁岩	(2.6)	1.8	0.4	1.3
1住	373	石鏃C	チャート	(1.7)	1.8	0.5	1.5
1住	374	石鏃C	チャート	2.2	1.2	0.5	0.8
1住	375	石鏃C	チャート	2.3	1.2	0.4	0.8
1住	376	石鏃C	チャート	2.7	1.3	0.5	1.0
1住	377	石鏃C	メノウ	2.3	1.2	0.4	0.7
1住	378	石鏃C	チャート	(2.0)	1.3	0.3	0.7
1住	379	石鏃C	黒曜石	1.8	1.1	0.4	0.4
1住	380	石鏃C未	チャート	1.4	1.1	0.4	0.4
1住	381	石鏃C	チャート	(2.2)	1.3	0.5	1.1
1住	382	石鏃C	チャート	2.9	1.2	0.6	1.4
1住	383	石鏃C	チャート	2.9	1.4	0.5	1.5
1住	384	石鏃C	チャート	3.3	2.4	0.9	4.1

4 グリッド出土遺物

遺構	番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺構	番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ
1住	385	石鏃C	チャート	3.8	2.5	1.2	6.8	1住	439	磨石	安山岩	17.2	8.1	6.4	1136.3
1住	386	石鏃未成品	チャート	2.6	1.7	0.7	2.6	1住	440	磨石	閃緑岩	16.8	8.7	6.1	1436.7
1住	387	石鏃未成品	チャート	2.2	1.9	0.4	1.5	1住	441	磨石	砂岩	(16.7)	9.6	6.7	1736.2
1住	388	石鏃未成品	チャート	2.2	2.1	0.6	3.4	1住	442	石皿	安山岩	(17.4)	(12.0)	5.6	1338.1
1住	389	石鏃未成品	チャート	2.7	1.6	0.6	2.9	1住	443	石皿	安山岩	(11.6)	(10.7)	4.9	614.1
1住	390	石鏃未成品	チャート	3.1	2.6	0.7	5.4	1住	444	石皿	閃緑岩	21.5	19.8	5.7	3950.0
1住	391	石鏃未成品	チャート	3.8	2.6	1.5	10.2	1住	445	石皿	砂岩	19.4	15.4	4.9	2035.5
1住	392	石鏃未成品	安山岩	3.8	2.3	1.4	7.3	1住	446	石皿	緑泥片岩	31.2	26.4	2.9	3057.7
1住	393	石鏃未成品	チャート	3.8	2.4	1.2	7.7	1住	447	打製石斧	緑泥片岩	20.5	7.2	2.2	514.2
1住	394	石鏃未成品	チャート	3.2	2.3	0.9	6.2	1住	448	石棒	緑泥片岩	(17.8)	11.9	(8.3)	2848.6
1住	395	石鏃未成品	チャート	3.4	2.5	1.0	8.9	1住	449	砥石	粘板岩	11.9	8.8	1.1	199.1
1住	396	横形石匙	チャート	2.9	6.8	0.7	9.4	1住	450	砥石	砂岩	9.3	7.3	1.2	111.4
1住	397	搔器	珪質頁岩	4.9	3.6	1.4	18.0	1住	451	砥石	緑色岩	12.8	11.7	2.5	566.4
1住	398	搔器	黒曜石	3.1	1.3	0.7	1.8	1住	452	砥石	砂岩	12.6	6.5	1.6	158.9
1住	399	搔器	チャート	4.0	4.9	1.2	23.3	1住	453	砥石	砂岩	12.2	5.1	1.9	191.4
1住	400	石錐	チャート	(5.5)	1.5	0.7	2.8	1住	454	砥石	砂岩	11.9	8.2	2.2	254.3
1住	401	石錐	メノウ	(3.5)	1.3	0.7	2.0	1住	455	砥石	安山岩	11.9	9.3	2.1	311.9
1住	402	石錐	チャート	(2.3)	1.1	0.8	1.2	1住	456	石錘	片岩	4.5	2.2	1.3	22.1
1住	403	石錐	チャート	2.1	1.5	0.5	0.8	1住	457	石錘	砂岩	5.0	4.5	1.5	46.5
1住	404	礫器	ホル	8.8	8.3	4.3	296.7	1住	458	垂飾	緑泥片岩	5.3	1.0	0.8	5.1
1住	405	礫器	ホル	9.8	6.4	3.7	237.2	1住	460	独鈷石	緑泥片岩	15.3	3.9	2.4	245.5
1住	406	礫器	砂岩	13.8	6.1	3.5	298.3	1住	461	石棒	緑泥片岩	(7.1)	1.2	1.1	16.6
1住	407	礫器	頁岩	7.7	4.4	2.6	74.3	1住	462	石剣	緑泥片岩	(23.6)	3.9	2.1	275.4
1住	408	礫器	ホル	9.3	15.9	3.4	499.3	1住	463	石剣	緑泥片岩	36.5	4.0	1.6	341.4
1住	409	磨製石斧	緑色岩	15.8	6.1	3.4	503.6	1住	464	石剣	緑泥片岩	(9.2)	3.4	2.2	102.1
1住	410	磨製石斧	砂岩	17.5	8.2	4.4	910.5	1住	465	石剣	緑泥片岩	(7.8)	3.5	2.1	88.9
1住	411	磨製石斧	砂岩	5.4	1.5	0.6	4.9	1住	466	石剣	緑泥片岩	(27.5)	3.5	1.9	290.2
1住	412	磨製石斧	流紋岩	9.0	2.2	0.9	32.5	1住	467	石剣	緑泥片岩	(13.3)	3.5	1.9	132.1
1住	413	打製石斧	緑泥片岩	11.7	7.6	2.1	217.9	1住	468	石剣	緑泥片岩	(14.0)	3.4	1.5	102.5
1住	414	打製石斧	ホル	11.9	6.1	1.7	97.0	1住	469	石刀	緑泥片岩	(12.8)	3.3	1.7	108.1
1住	415	打製石斧	頁岩	8.6	4.9	2.6	102.3	1竪	40	石鏃C	黒曜石	(1.6)	1.5	0.5	0.7
1住	416	打製石斧	緑泥片岩	7.7	3.4	2.2	73.1	1竪	41	石鏃B	黒曜石	1.1	1.2	0.3	0.3
1住	417	打製石斧	緑色岩	21.5	7.4	2.9	654.5	1竪	42	搔器	チャート	2.6	2.7	0.8	3.9
1住	418	打製石斧	ホル	18.3	9.1	2.0	341.5	1竪	43	搔器	チャート	2.5	2.2	0.6	2.8
1住	419	くぼみ石	安山岩	8.7	7.3	4.9	447.0	1竪	44	石錐	頁岩	5.9	4.5	1.7	36.9
1住	420	くぼみ石	安山岩	7.2	6.2	4.0	279.5	1竪	45	磨石	閃緑岩	13.6	7.8	6.2	987.0
1住	421	くぼみ石	砂岩	7.7	6.9	5.6	449.0	グ	1	石鏃C	黒曜石	1.8	1.3	0.4	0.4
1住	422	磨石	閃緑岩	(7.9)	6.3	3.5	276.0	グ	2	石鏃C	チャート	(2.2)	1.4	0.5	0.8
1住	423	磨石	安山岩	8.5	7.2	3.2	234.8	グ	3	石鏃C	チャート	(1.9)	1.5	0.5	1.0
1住	424	磨石	砂岩	11.3	9.1	3.8	591.8	グ	4	石鏃C	チャート	(1.6)	(1.3)	0.4	0.8
1住	425	磨石	砂岩	10.8	7.1	5.4	577.6	グ	5	石鏃C未	ホル	2.0	1.2	0.5	1.1
1住	426	磨石	砂岩	9.6	8.8	8.0	964.4	グ	6	石鏃A	チャート	1.4	1.2	0.3	0.5
1住	427	磨石	砂岩	6.5	5.4	3.4	165.8	グ	7	石鏃未成品	チャート	1.5	1.5	0.3	0.7
1住	428	磨石	砂岩	8.9	6.3	4.6	356.9	グ	8	石鏃未成品	チャート	3.8	2.5	1.2	9.0
1住	429	磨石	砂岩	10.0	7.8	4.3	443.7	グ	9	搔器	頁岩	3.8	5.0	1.2	24.5
1住	430	磨石	砂岩	9.0	8.5	6.7	731.0	グ	10	石錐	チャート	2.2	1.0	0.6	1.0
1住	431	磨石	閃緑岩	10.2	7.6	6.1	640.2	グ	11	打製石斧	緑色岩	13.2	5.8	2.6	282.2
1住	432	磨石	砂岩	11.7	10.2	7.5	1249.0	グ	12	打製石斧	ホル	19.6	12.3	4.3	818.9
1住	433	磨石	安山岩	(6.8)	4.6	4.1	193.8	グ	13	打製石斧	片岩	22.6	13.1	3.1	1370.0
1住	434	磨石	頁岩	5.3	4.6	2.9	99.8	グ	14	磨石	砂岩	9.7	8.1	6.2	713.7
1住	435	磨石	砂岩	3.9	3.0	2.7	49.1	グ	15	磨石	閃緑岩	13.2	10.3	6.4	1394.2
1住	436	磨石	安山岩	15.1	11.0	3.6	645.0	グ	16	石剣	緑泥片岩	(15.0)	4.0	(1.9)	207.0
1住	437	磨石	閃緑岩	19.8	9.2	6.5	1860.7	グ	17	垂飾	泥岩	(2.0)	(1.8)	(0.5)	1.8
1住	438	敲石	砂岩	15.3	3.9	3.4	322.3								

5 動物遺存体分析

山田 敏史（早稲田大学大学院）

I. 資料について

ここでは岩口遺跡4区1号住居および1号土坑（堅穴状遺構）から検出された動物遺存体の同定・記載、および若干の考察を述べる。

この動物遺存体資料が所属する時期は、共伴遺物から考えると、縄文時代晩期前葉から中葉の安行3a式から3d式期と推定される。遺物の回収方法は任意採集（手掘り）であり、サンプルの採取はなされていない。したがって、ここの同定・記載、および考察では、サンプルを水洗することによってでしか検出されないような微細な資料は除外することとする。

岩口遺跡4区1号住居および1号土坑（堅穴状遺構）から検出された動物遺存体の総破片数は、細かいものまで含めれば、1884点であった。また総質量にすると、1799.23gになった。これらの資料は、全部で548袋に収納され、ひとつひとつの袋の資料ごとに発掘調査段階で平面分布が記録されている。ところで、この岩口遺跡4区1号住居および1号土坑（堅穴状遺構）から検出された動物遺存体は、ほぼすべて火に焼かれた痕跡を持っていた。一般に、骨が火に焼かれると、遺跡に残存しやすい傾向があるようだが、同時に、細かい破片にもなりやすい。細かい破片になればなるほど、同定精度は低下する。今回、細かい破片も含めておよそ1900点の資料が検出されたとはいえ、種まで同定できた資料はそのなかの224点（821g）にすぎなかった。

II. 同定結果

岩口遺跡4区1号住居および1号土坑（堅穴状遺構）から検出された動物は、哺乳綱（哺乳類）3種である（表1）。魚類や鳥類などの他の動物は見つかっていない。これら哺乳類以外の動物は、もともとこの遺構中に廃棄された数が少なかったと考えられる。しかし、とくに魚類などは、遺存体の性格上、遺跡に残存しにくく、また微細な資料は発掘調査時に回収されにくい。これらはタフォミーを考えたうえで、慎重に議論されな

ればならないであろう。

以下、出土動物について記載をする。

ニホンザル

上腕骨が1（2）点検出された。火を受けて、白色に変色している。骨端が癒合しているのも、ある程度年齢を経ている個体を思われる。性別は不明。後述するイノシシとニホンジカ以外の動物では唯一の資料である。

ニホンジカ

破片数にすると144点（406.28g）検出されているが、これらはほとんどが角の破片である。鹿角以外でニホンジカの部位とわかったのは9点（99.39g）にすぎなかった。内訳は、頭蓋骨1点、上腕骨1点、大腿骨1点、中足骨1点、中手骨もしくは中足骨1点、距骨2点、踵骨1点である。椎骨や下顎骨が検出されていなくて、下顎骨が多量に検出されたイノシシとは対照的である。最小個体数は、左側距骨2点から2個体である。ほとんどの資料は火を受けていて、白色や灰色に変色していた。年齢構成は、出土量が少ないので詳細なことはわからないが、資料の大きさや四肢骨の骨端などから、ある程度年齢を経ている個体や若い個体も見つかっている。性の構成は、多量の角破片や角座骨などから雄が含まれていることは確実であるが、雌が含まれているかどうかはわからない。しかし、例えば房総半島の現生ニホンジカは、母子2頭で行動する場合が多く、特に当歳児の場合は母鹿が傍らにすることが多い。この岩口遺跡では若い個体が含まれていることから、このような母子2頭連れを捕獲対象にしたことも考えられる。

イノシシ

今回同定された資料のなかで主体を占める種である。同定された破片数は79点（411.63g）。同定された動物種のなかでは、鹿角の破片を考慮から外すと、実質、イノシシが最も多かったといえる。ニホンジカの鹿角資料を仮に除外して、同定資料数を求めると、イノシシ79（およそ400g）、ニホンジカ9（およそ100g）、ニホンザル1（およそ3g）というように、イノシシが同定資料数の89%を占める。

ニホンザルやニホンジカ同様に、ほぼすべての資料が火を受けていて、白色や灰色に変色している。変色ばかりか、形がゆがんでしまっている資料も多い。

出土部位は、下顎骨、軸椎（第2頸椎）、肩甲骨、橈骨、尺骨、腓骨、中手・中足骨、距骨、手根・足根骨など体の各部位が検出されているが、とくに下顎骨が多かった。下顎枝の破片、下顎関節突起、下顎連合部といった下顎骨の各部分が検出されている。下顎枝では歯槽部分が残っている資料も多く、歯槽に歯根の破片が残存している例も多い。しかし、歯自体が検出されるのは極めて稀で、わずかに破片が数点確認されたにすぎなかった。下顎骨や歯槽が残っているのに、歯が見つからないことの理由は、現時点ではあまりよくわからず、火を受けて歯が脆くなるとか、発掘調査時や整理作業時に回収されなかったことなどのほかに、廃棄する前に意図的に抜き取られた、もしくは破壊されたなど、当時の縄文人の行為を反映している可能性も否定できない。歯槽や下顎骨の大きさを見る限りでは、乳歯段階の資料も多く、年齢が若い個体もかなり含まれていたことが考えられる。四肢骨などの他の部位でも、ある程度の年齢を経ている個体もある一方で、若い年齢と思われる小さい資料も多く含まれている。さらに下顎骨の詳細をみると、関節突起が左右6点ずつ検出されている。また、下顎骨の連合部分が11点も検出されている。したがって、下顎連合部だけからみるとイノシシの最小個体数は11個体になる。この数字は、ひとつの住居跡という限定された出土範囲からみると著しく多い。橈骨などのほかの部位をみても、せいぜい1か2個体分しか検出されていないことを考えると、当時の縄文人が下顎骨を特に選んで1号住居に廃棄した可能性がある。下顎連合部から関節突起まで検出されていることから下顎骨がほとんどそのままの状態で焼かれ、あるいは破壊された後、廃棄されたと考えられる。イノシシの下顎連合部の出土地点をみると、数点の例外はあるが、ほとんどは南東部の柱穴（南壁中央部の入り口部付近の壁溝上）に集中する。とくにP 32の柱穴はほかの部位の骨な

ども集中していて、下顎骨だけではなく、ある程度まとまった量の骨が廃棄されたと考えられる。

以上のように、①イノシシの骨が、ひとつの遺構（住居址）のさらに特定の地点に集中し、②下顎骨以外の部位が少なく、特に頭蓋骨・上顎骨や歯の出土がほとんどないこと、また、③下顎骨が特に多いことから、下顎骨を選んで廃棄しているような様子がうかがえること、という出土状況は、関東地方や東北地方の縄文中・後期に多く見られる貝塚のような、食糧残滓をそのまま廃棄したような状態ではないと思われる。当時の縄文人の何か意図的な行為を反映しているといえる。

Ⅲ. まとめと考察

岩口遺跡4区1号住居および1号土坑から検出された動物遺存体の特徴をまとめると以下のようになる。

(1) ほぼすべての資料が被熱している。白色あるいは灰色に変色し、チョーク化や割れ・変形がみられる資料も多い。鹿角の海面質や四肢骨の緻密質の中まで被熱している。

(2) 確認された動物種は、ニホンザル、イノシシ、ニホンジカの哺乳類3種のみである。

(3) ニホンジカは角が多く、他の部位では四肢骨などがある。椎骨や下顎骨がみられないのが特徴的である。

(4) イノシシは同定された資料の主体を占める種である。同定資料数自体も多いが、下顎骨（下顎連合部）から最小個体数で11個体であることがわかった。

(5) イノシシの出土状況には以下の特徴がみられる。

①ひとつの遺構（住居址）のさらに特定の地点に集中する。このうえで最小個体数をみると著しく多い。

②下顎骨以外の部位が少なく、特に頭蓋骨・上顎骨や歯の出土がほとんどない。

③下顎骨が特に多いことから、下顎骨を選んで廃棄しているような様子がうかがえる。

(6) イノシシは比較的若い年齢の個体が多く含まれている。

Ⅲ 発見された遺構と遺物

謝辞

今回は岩口遺跡の動物遺存体資料を鑑定させていただいた。調査担当者の加藤恭朗氏、仲介していただいた日暮晃一氏、また現生標本をみせていただいた千葉県立中央博物館の落合啓二、小宮

孟、田邊由美子の各氏に謝意を表します。

なお、括弧部については整理作業の結果を踏まえ補筆した。

第8表 ニホンザル遺存体観察表

遺構	No.	部位	残存部分	左右	計測 (mm)	質量 (g)	備考
1 住	7626	上腕骨	遠位部	R		1. 24	
1 住	8827	上腕骨	近位部	R	Bp: 19. 4	3. 09	骨端: C 段階

第9表 ニホンジカ遺存体（角以外の部位）観察表

遺構	No.	部位	残存部分	左右	計測 (mm)	質量 (g)	備考
1 住	3212	中足骨	中間部 前面 fr	?		1. 22	
1 住	6348	距骨	完存	L	GLI: 38. 8 Bd: 23. 0	10. 91	チョーク化著しい
1 住	7999	大腿骨	遠位端（内側顆）のみ	R		5. 48	骨端: A 段階→若い個体
1 住	8002	上腕骨	遠位部（内側）fr	L	Bd: 計測不可	6. 21	骨端: B 段階。あまり焼けてない
1 住	8090	中手骨 or 中足骨	近位部～中間部後面	L	Bp: (16. 3)	10. 71	若い個体
1 住	8158	大腿骨	遠位部（外側顆）	R		4. 54	
1 住	8496	頭蓋骨	角座骨～角座～角 fr	L	角座骨残存長径: 28. 0 角座残存長径: 42. 2 同短径: 30. 0	50. 12	かなり大型
1 住	8892	踵骨	載距突起	R		2. 03	割れ口黒色に変色→灰色→白色
1 住	8916	距骨	下部一部欠損	L	GLI: 計測不可 Bd: 21. 3	8. 17	チョーク化著しい

第10表 イノシシ下顎骨（連合部）観察表

遺構	No.	部位	残存部分	左右	質量 (g)	備考
1 住	3082	下顎骨	連合部	－	4. 92	
1 住	3839	下顎骨	連合部	－	3. 63	
1 住	4603	下顎骨	連合部	－	9. 93	
1 住	7617	下顎骨	連合部	－	21. 59	Li123cm123 Ri123 部分歯槽・Li12m2 Ri1 歯根残存。変形
1 住	7618	下顎骨	連合部	－	4. 92	Li123c Ri1 部分歯槽・Li1 歯根・Lc 残存
1 住	7619	下顎骨	連合部	－	8. 48	Li123c Ri123cm123 部分歯根穴残存
1 住	7776	下顎骨	連合部	－	9. 31	Lp1m1 部分歯槽残存・Li1i2P1m1 歯根残存
1 住	8352	下顎骨	連合部	－	7. 61	
1 住	8624	下顎骨	連合部	－	8. 01	
1 住	8624	下顎骨	連合部	－	2. 32	上記個体とは別個体。幼獣
1 住	一括①	下顎骨	連合部	－	5. 24	

第11表 イノシシ下顎骨（歯槽が残存する下顎枝）観察表

遺構	No.	部位	残存部分	左右	質量 (g)	備考
1 住	3924	下顎骨	(××) P34 部分	R	2. 96	P3 歯根残存
1 住	4530	下顎骨	(×××) P4M12 部分	R	11. 36	P4M1 歯根残存
1 住	4874	下顎骨	(××) M12 部分	R	9. 17	M12 歯根残存
1 住	4875	下顎骨	(×××) m23M1 部分	R	8. 84	m23M1 歯根残存
1 住	4887	下顎骨	(×××) P4M12 部分	R	9. 50	P4M12 歯根残存
1 住	5549	下顎骨	(××) m23 部分	R	4. 96	m23 歯根残存
1 住	6521	下顎骨	(×) m1 部分	L	1. 36	
1 住	7478	下顎骨	(××) P1m1 部分	L	2. 07	P1m1 歯根残存
1 住	7616	下顎骨	(×××) M123 部分+翼突筋窩	R	18. 13	M3 部分歯槽未完成
1 住	7616	下顎骨	(×××) P234 部分	R	6. 59	
1 住	7617	下顎骨	(××) M12 部分	L	7. 39	M2 部分歯槽未完成
1 住	7618	下顎骨	(××) m23 部分	L	4. 39	m2 歯根残存
1 住	7618	下顎骨	(××) m23M1 部分	R	4. 16	m3 歯根残存
1 住	7638	下顎骨	(××) m12 部分	L	1. 56	m12 歯根残存
1 住	7775	下顎骨	(××××) P4M123	L	6. 11	M1 歯根残存

遺構	No.	部位	残存部分	左右	質量 (g)	備考
1 住	7784	下顎骨	(××) P23 部分	L	3.14	
1 住	8357	下顎骨	(××) m3M1 部分	R	4.16	
1 住	8465	下顎骨	(×××××) m123M12	L	10.62	m23M1 歯根残存
1 住	8534	下顎骨	(××××) P4M123 部分	R	15.58	P4M123 歯根残存
1 住	8537	下顎骨	(×××) P234 部分	L	3.29	
1 住	8537	下顎骨	(×××) P234 部分	R	4.90	P2 歯根残存
1 住	8624	下顎骨	(×) m2 部分	L	1.62	m2 歯根残存
1 住	8675	下顎骨	(××) P123 部分	R	3.35	P1 歯根残存
1 住	8760	下顎骨	(××) P12 部分	R	1.71	
1 住	一括	下顎骨	(×××) m23M1 部分	L	6.20	

第12表 イノシシ下顎骨（関節突起）観察表

遺構	No.	部位	残存部分	左右	質量 (g)	備考
1 住	2603	下顎骨	関節突起	L	3.62	
1 住	2782	下顎骨	関節突起	L	6.19	
1 住	4373	下顎骨	関節突起	L	2.42	
1 住	4527	下顎骨	関節突起	L	1.26	
1 住	4871	下顎骨	関節突起	L	3.90	
1 住	7821	下顎骨	関節突起	R	5.67	
1 住	8197	下顎骨	関節突起	R	2.65	
1 住	8305	下顎骨	関節突起	R	2.54	
1 住	8468	下顎骨	関節突起	R	1.77	
1 住	8885	下顎骨	関節突起	R	4.22	
1 住	一括	下顎骨	関節突起	R	0.86	若い個体
1 住	一括②	下顎骨	関節突起	L	0.82	

第13表 イノシシ遺存体（下顎骨以外の部位）観察表

遺構	No.	部位	残存部分	左右	計測 (mm)	質量 (g)	備考
1 住	4953	第Ⅲ中手骨	近位部	L		3.40	
1 住	6054	第Ⅴ中手骨	遠位部	R		1.46	カットマークあり
1 住	7234	肩甲骨	関節窩～肩甲棘結節	R		17.94	
1 住	7336	足根骨	完存	R		3.81	
1 住	7366	距骨	完存	R	GLI : 36.9	9.48	
1 住	7449	腓骨	遠位部（腓骨外果）	R		1.32	
1 住	7748	中節骨	完存	?	GL : 17.5	2.18	
1 住	7985	第Ⅲ中手骨	遠位部	L		3.81	骨端：前面 C 後面 B。変形
1 住	7986	第Ⅳ中足骨	近位部	R		5.30	ひび割れ
1 住	7987	手根骨	完存	R		2.23	
1 住	8091	橈骨	近位部	L	Bp : 24.9	5.90	骨端：C 段階
1 住	8340	尺骨	滑車部（肘頭・尺骨体欠損）	L		10.24	小さい個体
1 住	8348	距骨	完存	L	GLI : 80.5	2.94	若い個体
1 住	8360	軸椎	歯突起～外側関節面（右のみ）	-		2.19	
1 住	8432	橈骨	近位部	R	Bp : 27.7	7.56	骨端：C 段階。ひび割れ・変形
1 住	8563	第Ⅲ中足骨	近位部	R		2.75	
1 住	8909	手根骨	完存	L		2.05	

第14表 岩口4区出土動物遺存体集計表

種名	同定資料数	質量 (g)	最少個体数
ニホンザル	2 (2.3%)	4.3 (0.8%)	1 (7.1%)
イノシシ	77 (87.5%)	411.6 (79.9%)	11 (78.6%)
ニホンジカ（角以外の部位）	9 (10.2%)	99.4 (19.3%)	2 (14.3%)
計	88	515.3	14

IV 発掘調査のまとめ

1 発掘調査の成果

今回の岩口遺跡4区の調査では、狭小な面積ではあるが、縄文時代晩期中葉の住居跡1軒と晩期前葉の竪穴状遺構1軒が検出された。縄文時代晩期の遺跡が少ない荒川右岸の武蔵野台地から丘陵部にかけてでは、貴重な発見例となっている。

1軒ではあるが検出された1号住居跡は、晩期前葉の安行3b式から中葉の安行3d式にかけての住居跡で、数回の建て替えが行われていた。また、1号竪穴状遺構は出土土器から晩期前葉の安行3b式期の遺構で、おそらく住居跡になるものと想定される。遺構内やグリッドからは後期中葉の加曽利B1式から晩期初頭の安行3a式までの土器群が出土していることから、遺跡は加曽利B1式期から安行3d式期まで断続的に継続していたものと判断されるが、その主体的時期は安行3b式から安行3d式であったと推測される。

さらに、1号住居跡は廃棄後にまだ埋まり切れない段階で、精神性の強い行為や祭祀行為が行われていたことが明らかになった。住居跡内1号土坑はシカのみ骨と石剣・千網型耳飾などが出土し、大洞C2式土器が伴っていたことから、時期の判別される貴重な事例となった。また、イノシシ骨のみが集積された場所や、集石遺構なども検出されている。住居跡の覆土内からは多様な遺物が出土しているが、これらの精神性の強い行為に起因するものであろうことが推測される。

また、調査区内からは遺構内を中心として獣骨の焼骨が多量に出土した。大半は骨粉化しているが、属性のわかる大型破片から、シカ骨は角を主体として体部が僅かであることが分かり、イノシシ骨の頭蓋骨ではほとんどが下顎骨のみであることが明らかとなった。獲物の解体・分配方法や、祭祀行為に供用される部位等の研究に示唆的な内容を有するものと思われる。同様に獣骨の住居跡内集積はさいたま市奈良瀬戸遺跡第3号住（宮内他1969）でも指摘されている。

これらの狩猟に使用されたと思われる石鏃が多量に出土した点も特徴といえるであろう。

2 縄文時代晩期中葉の住居跡について

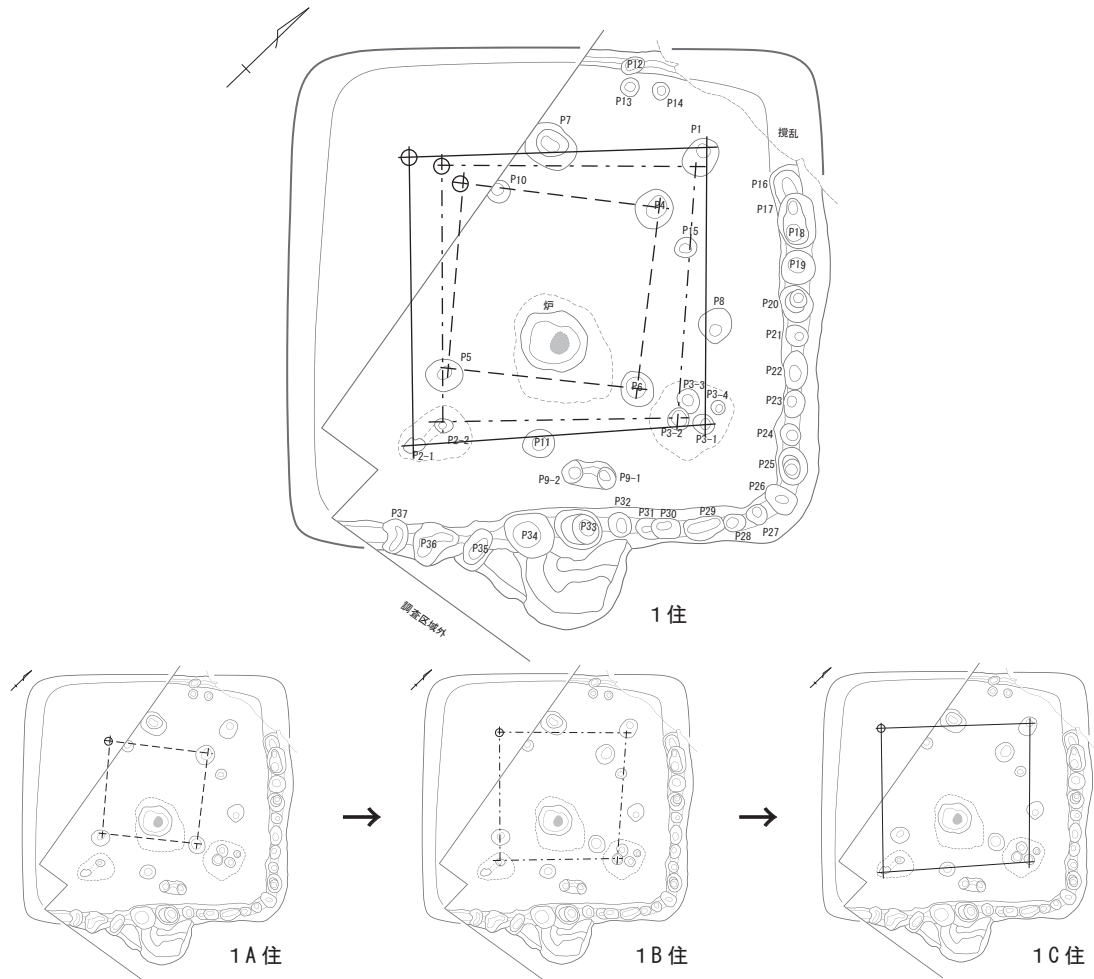
本遺跡検出の1号住居跡は、1辺8m弱のほぼ方形で、入り口部を含めると9m程の竪穴住居跡である。やや大型の住居跡と言えようか。

前述したように柱穴の本数などから数回、最大で4回の建て替え、最初の建築からでは、ほぼ同じ場所に5回竪穴住居を築いていたことになるが、検出された柱穴からでは5回分の支柱配置を復元することは不可能であった。そこで、柱穴の配置と、原則外側への拡張を根拠として、第55図のように想定し得る3回の建築を復元した。

住居跡の覆土内からは、晩期前葉の安行3b式から安行3d式までの比較的まとまった土器群が出土しており、様々な想定される状況から覆土中が一般的な堆積状態ではなかったことが推定された。覆土の土層断面からは最終床面の下層に掘り方とした土層が堆積しており、最終使用の炉からは安行3c式土器が出土していた。それらを総合的に検討した結果、掘り方と捉えた土層を安行3b式期住居の覆土、炉を安行3c式期と認定し、支柱穴の組み合わせからその間に明らかにし得る1A住から1C住までの3回の竪穴住居の建築を想定した。小さな住居から少しずつ大きな住居へと拡張されているが、1B住居での拡張が最も大きな変革と捉えられることから、この時期を安行3c式期と推定した。したがって、1号住居跡は安行3b式期以降安行3c式期までの間に2回の建て替え、柱穴からは3回以上の建て替えが行われた可能性が理解された。

しかし、覆土からは安行3b式から安行3d式の良好な土器群が出土しており、1号住居跡廃棄後の明らかに安行3c式以降の時期に流入もしくは遺棄されたものである。そして、安行3d式の時期にあつては1号住居の増改築に関与せず、その跡地を利用していることは明らかである。

今回の調査では、安行3d式期の確実な遺構は確認されていないが、安行3b式期から安行3d式期にかけて、住居構築の重複、増改築を含めて偶然とは言い難い「場」に対する強い継続性が窺



第55図 1号住居跡変遷図

われる。

そこで、県内の晩期前葉から中葉の安行3b式から安行3d式土器が出土する代表的な住居跡を第56図にまとめてみた。

1は飯能市の加能里遺跡8次の第1号住居（曾根原1989）で、武蔵野台地側では岩口遺跡4区と水系が異なるものの距離が最も近接した遺跡であり、出土遺物の構成や住居の形態等が近似する住居跡である。約長径5.5m×短径5mのやや長方形を呈するが、若干プランが歪んでいる。柱穴配置から何回かの建て替えが想定され、住居のプラン等もそれによって若干変形している可能性がある。

2はさいたま市（旧大宮市）奈良瀬戸遺跡第3号住居跡で、安行3c式から安行3d式が分離された著名な遺跡である。約長径6m×短径5.5mの若干長方形の住居で、加能里遺跡と同様に建て替えの可能性がある、安行3c式から安行3d

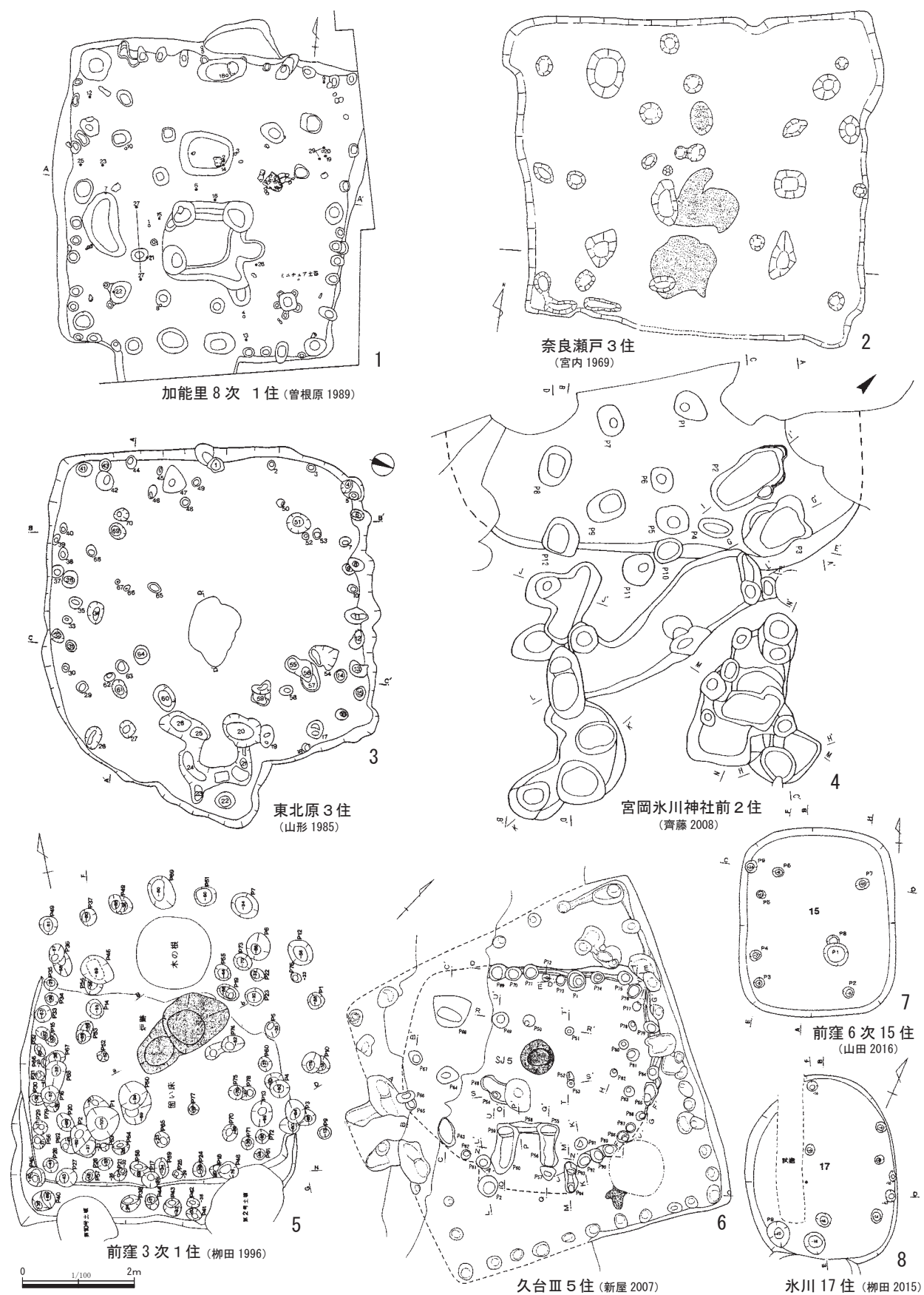
式への継続性が認められる事例である。

3はさいたま市（旧大宮市）東北原遺跡の第3号住居跡（山形1985）である。1辺6m前後の方形の住居跡で、やはり建て替える可能性がある。入り口部が住居の方形プラン内に取り込まれているが、これも何回かにわたる建て替え等の影響であろうか。

4は北本市宮岡氷川神社前遺跡第2号住居跡（齊藤2008）で、約半分程が調査されており、入り口部周辺に複数回にわたる重複か建て替えるの結果と思われる複雑な入り口部構造が窺える。入り口部右脇の床面に石冠と石剣の出土した土坑がある。径7m前後の規模が復元され、規模や住居内に精神性の強い遺構が構築されることで、岩口遺跡1号住に類似するものである。

5はさいたま市（旧浦和市）前窪遺跡3次第1号住居跡（柳田1996）である。約径5m前後の方形もしくは若干細長い長方形を呈する住居

IV 発掘調査のまとめ



第56図 晩期中葉住居跡の集成図

跡と思われる。方形状の住居 2 軒と円形の住居 1 軒の重複であるが、2 から 3 回の建て替えにより結果的に方形状住居跡のプランが長方形状へと変形する可能性が窺われる。

5 は蓮田市久台遺跡Ⅲの第 5 号住居跡（新屋 2007）で、晩期初頭の住居跡内に、主軸方向を変えて入れ子状に構築されている。約長径 4.5 m × 短径 4 m の入り口部が窄まる台形状もしくは団扇状のプランで、建て替え等が行われたかは不明である。東北原遺跡第 3 号住居跡と同様に、住居のプラン内に入り口部が収まる構造になっている。

7 はさいたま市前窪遺跡 6 次の第 15 号住居（山田 2016）で、約長径 3.3 m × 短径 2.8 m の隅丸長方形状を呈し、8 はさいたま市（旧大宮市）氷川神社遺跡第 17 号住居跡（柳田 2015）で、約長径 3.2 m × 短径 2.8 m の長楕円形状を呈する。両者とも、明瞭な炉跡は検出されず、住居跡というよりも小型の小竪穴状遺構と考えられる。

ある程度の形状が分かる安行 3 c 式前後の住居跡を検討したが、規模は 5 ～ 6 m 前後の方形もしくは隅丸方形状を呈するものが多く、重複や建て替えによって若干長方形状に変形している様相が把握される。これらの竪穴住居跡の他に、小型の隅丸長方形や長楕円形の小竪穴状遺構が存在しているものと判断される。その他、プランの変形した住居跡や、炉跡のみ検出されたものなどがあり、明瞭な竪穴構造を持たない平地式住居が存在する可能性も想定される。

そして、いずれも複数回の建て替えが想定され、重複事例を勘案したとしても、安行 3 b 式から安行 3 c 式にかけてほぼ同じ場所に住居を構築し、最終段階の安行 3 d 式に終焉を迎えている場合が多い。最終的に祭祀行為などの精神性の強い行為を行って「住居じまい」、もしくは集落を終焉させている可能性が高い場合も想定される。

なぜ同じ場所、特に住居跡に関して非常に継続性の強い行動様式を展開したかについては、不明と言わざるを得ない。しかし、窪地という利便な空き地を利用するという労働力の節約のためではなく、住居の窪地が先代もしくはその先の祖先との繋がりが強く意識される「聖なる場」で、そこ

に住み続けることは先祖代々からの連続性や一体感を具現化する象徴行為であり、精神性及び世界観を共有する人々の間で執り行われた行為であったであろうことが想像されるのである。

3 遺跡出土の縄文土器について

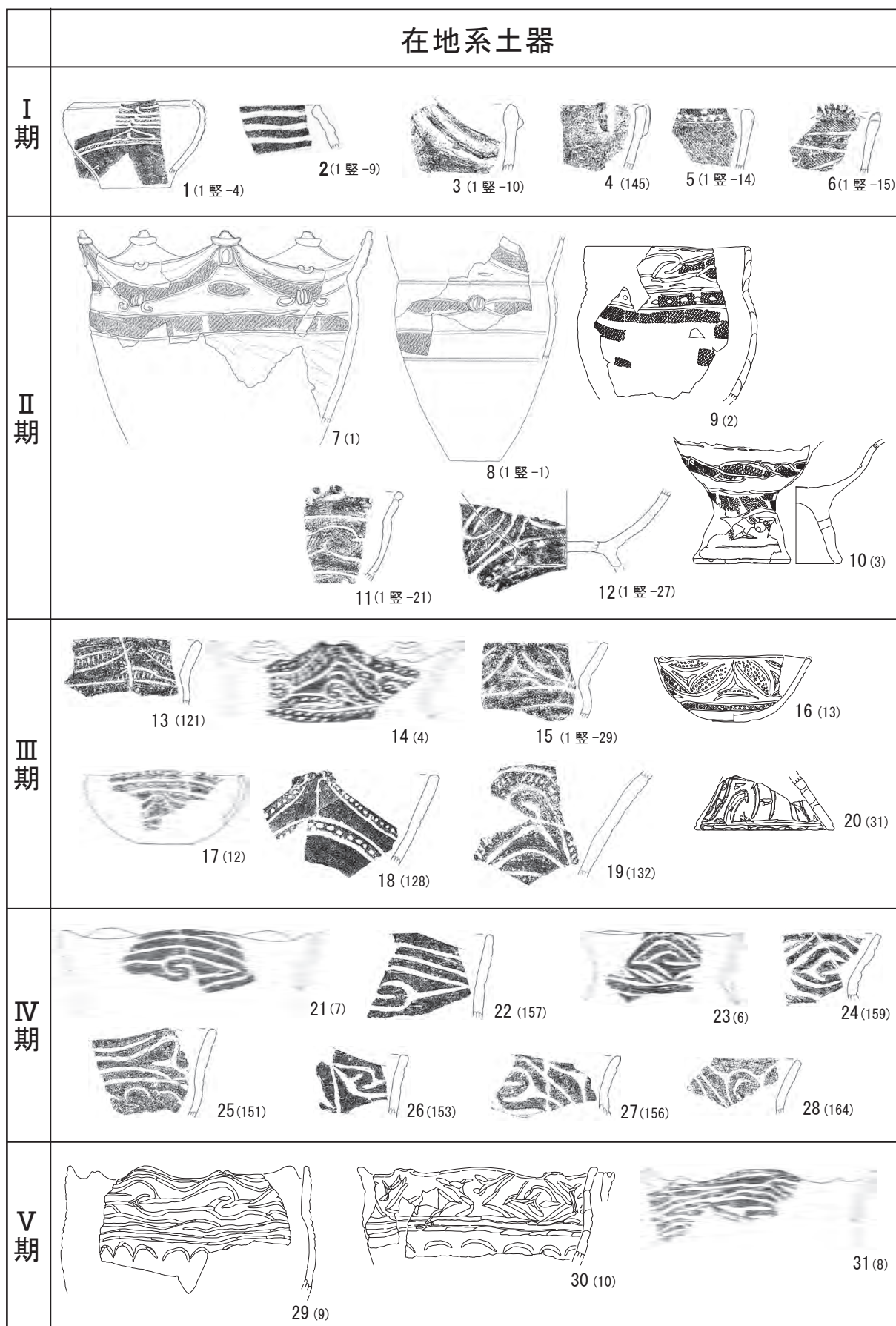
本遺跡出土の縄文土器は後期中葉の加曽利 B 1 式から晩期中葉の安行 3 d 式までと、それらに伴う異系統土器群で構成されている。個別の土器群については本文中に詳説しているので、ここでは在地系土器群と異系統系土器群に分け、その関係について大きく把握して置きたい。

まず本遺跡出土土器群を、便宜上 I 期から V 期に区分し、図示した（第 57・58 図）。I 期は加曽利 B 1 式から安行 2 式の後期中葉から末葉の土器群、II 期は安行 3 b 式を中心とした晩期前葉の土器群、III 期は安行 3 c 式を中心とした晩期中葉前半期の土器群、IV 期は安行 3 c 式から安行 3 d 式にかけての晩期中葉前半期から後半期にかけての土器群、V 期は安行 3 d 式を中心とした晩期中葉後半期の土器群である。大半は II ～ V 期の土器群であるが、安行 3 c 式から 3 d 式にかけて III ～ V 期に細分した形を採っている。


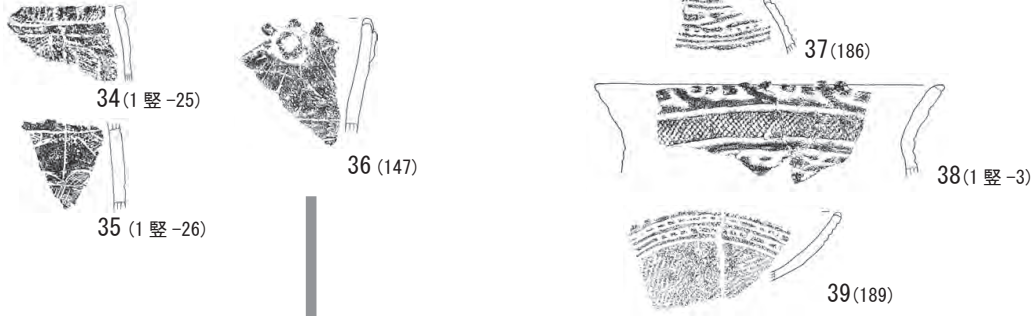
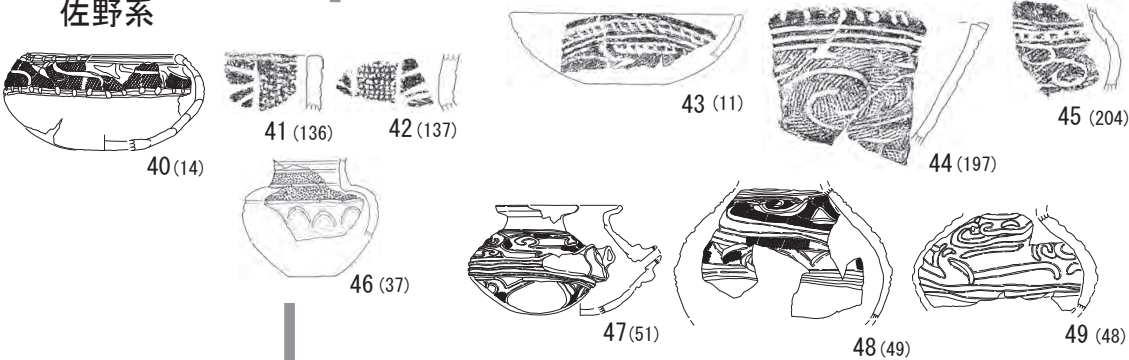
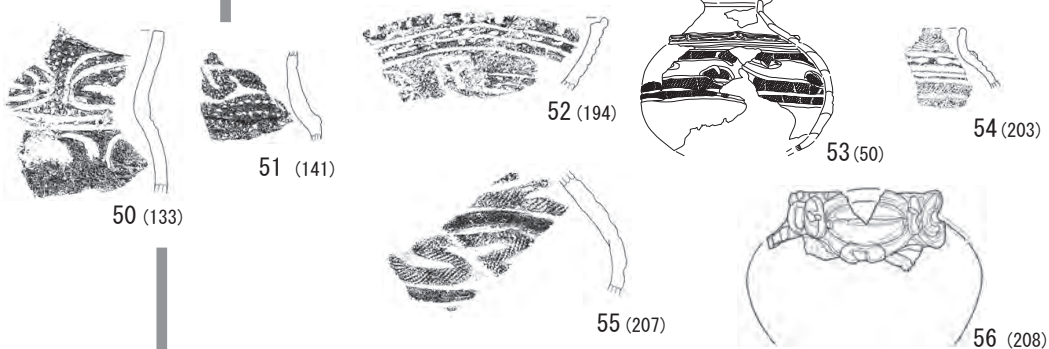
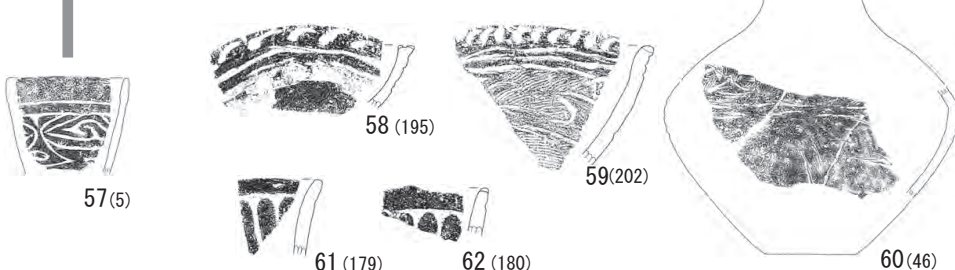
I 期では加曽利 B 1 式、B 2 式が少量出土し、その後、高井東式と安行 1 式、安行 2 式も少量出土するが、安行 1 式は客体的な存在となっている。この時期の異系統土器としては、新地式系の瘤付土器の破片（32・33）が若干出土している。

II 期は安行 3 b 式期であり、器形復元のできる多くの土器が出土した。5 単位大波状口縁で口縁部の三角区画文帯のみの深鉢（7）や、胴部文様帯に磨消縄文の連続レンズ状文を持つ深鉢（8）もある。平口縁深鉢では口縁部に帯状入組文（9）を施文するものがあり、台付鉢（10・11・12）でも帯状入組文が主文様となっている。

II 期の異系統土器としては、細密沈線文土器（34・35）と、細かな刺突文を施文する天神原式系土器（36）がある。36 は III 期に下る可能性もある。いわゆる姥山 II 式系の土器は見られない。東北系の大洞式系土器では羊歯状文を施文する注口土器（37）、口縁部と胴部に羊歯状文を施文する平口縁



第57図 岩口遺跡後晩期土器変遷図 (1)

	異系統系土器
I 期	<p>新地系</p>  <p>32 (91) 33 (1 豎-12)</p>
II 期	<p>細密沈線文系 天神原系 大洞系</p>  <p>34 (1 豎-25) 35 (1 豎-26) 36 (147) 37 (186) 38 (1 豎-3) 39 (189)</p>
III 期	<p>佐野系</p>  <p>40 (14) 41 (136) 42 (137) 43 (11) 44 (197) 45 (204) 46 (37) 47 (51) 48 (49) 49 (48)</p>
IV 期	 <p>50 (133) 51 (141) 52 (194) 53 (50) 54 (203) 55 (207) 56 (208)</p>
V 期	 <p>57 (5) 58 (195) 59 (202) 60 (46) 61 (179) 62 (180)</p>

第58図 岩口遺跡後晩期土器変遷図 (2)

IV 発掘調査のまとめ

の深鉢（3）や、平行沈線間の刻み状となる羊歯状文を施文する浅鉢（39）等があり、大洞BC式における時間差が感じられる。Ⅱ期の土器群は、1号竪穴状遺構で良いまとまりを見せている。

Ⅲ期は安行3c式期であるが、安行3b式から継続する安行3c式の前半段階の土器群は少ない。沈線区画内に複列の刺突文を施文する安行3c式後半段階を中心とする。そして、安行3d式と類似するモチーフの深鉢（14）や浅鉢（13・19）が目立ち、截然と区分することが難しい段階である。

異系統土器ではクランク文を持つ佐野式系の浅鉢（40）や、細かな刺突文を持つ天神原式系土器（44・42・46）がある。大洞式系土器群では浅鉢（43・44）と注口土器（47）、壺形土器（48・49）が中心となるが、雲形文などの崩れから大洞C1式の中でも後半段階の様相を持つものと判断される。注口土器47は受け口状の口縁部を持つ短頸壺状の器形を呈するもので、注目されよう。

Ⅳ期は区分の基準が曖昧で、判断が難しい段階である。Ⅲ期安行3c式からⅤ期安行3d式への移行期として設定したが、どちらかに収斂される可能性が高い。Ⅳ期在地系土器を安行3d式古段階として、在地系Ⅲ期の一部（14・16・19）や異系統系の天神原式系土器群（50・51）を同一段階に位置付けることも可能である。

一方、大洞式系土器群では大洞C1式の終末段階とした異系統系Ⅳ期（52～56）は、同Ⅲ期との区分が不明瞭である。在地系のⅣ・Ⅴ期を安行3d式、異系統系Ⅲ・Ⅳ期を大洞C1式の範疇で捉えた場合、在地系Ⅲ期と異系統系Ⅲ・Ⅳ期が大洞C1式期における平行関係となる。その場合在地系Ⅲ期の安行3c式新段階の土器群は、異系統系Ⅲ・Ⅳ期の土器群に対して量的に少なく、逆に、異系統系Ⅴ期の大洞C2式土器は在地系Ⅲ・Ⅳ期の安行3d式土器群に対して量的に少なく不均衡の状態が生じる。そのため、両者の移行期としてⅣ期を設けたが、連綿と系譜する土器群の区分の難しさを感じる。岩口4遺跡の大洞式系土器群の様相は、埼玉県西部地域における大洞C1・C2式の浸透の実相を示している可能性もある。今後隣接の岩口3区の整理結果と合わせて再考したい。

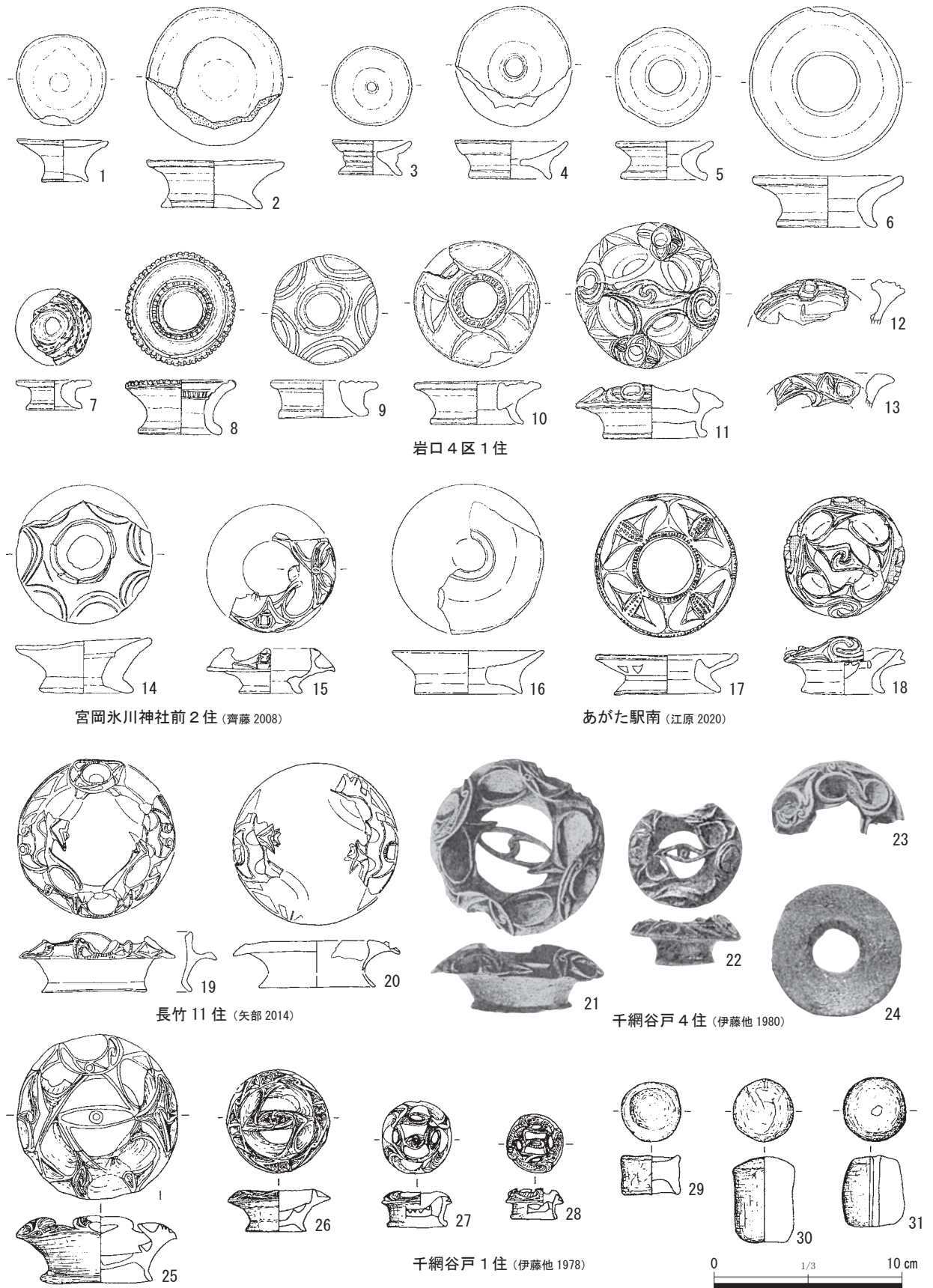
4 千網型耳飾の構造と変遷

本遺跡の1号住居跡からは、晩期前葉から中葉にかけての多様な耳飾が出土した。ここではその組み合わせと、「漏斗状透彫付大型耳飾」（増田1980）もしくは「大型漏斗状透彫付耳飾」（増田・小菅2007）とされる晩期中葉の特徴的な耳飾（ここでは千網型耳飾と仮称する）の構造分析とその変化変遷について検討したい。

まず、1号住居跡からは有文12点、無文18点の合計30点の耳飾が出土した。第21図の分布図に示したように覆土全体から出土しているが、第59図1・3～6・8～11は安行3d式期の祭祀遺構と捉えた住居内1号土坑内および周辺からまとまって出土している。それぞれ下面径が上面径より小さく、着装部が大きく屈曲する器形で、晩期中葉期の特徴をよく示している。そして、各タイプとも大小および中間的なサイズが揃っており、11の千網型耳飾が大洞C2式古段階の土器を伴っていることから、晩期中葉の大洞C2式古段階を下限とした時期の限定される一括性の高い資料であると評価されよう。

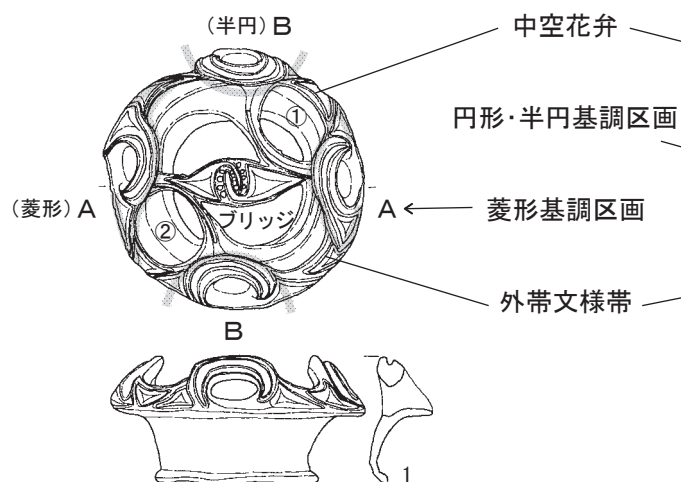
同様に、住居跡の覆土から出土した千網型耳飾とそのセットを同図に示した。14・15は北本市宮岡氷川神社前遺跡第2号住（齊藤2008）の資料で、千網型と弧線文を描く漏斗状器形の耳飾である。14は岩口1号住の無文6の耳飾に、弧線文を施文した同系統上のものと思われる。19・20は加須市長竹遺跡第11号住（矢部2014）の資料で、2点の復元可能な千網型耳飾が出土している。21～31は千網谷戸遺跡出土の耳飾で、25～31は第1号住、21～24は第4号住出土である。いずれも時間差の有る土器を含む覆土からの出土であるが、第1号住の耳飾については中層を含む下層のものを選んだ。これらは総体的に時間差があるものと捉えられており、第1号住が古く、第4号住が新しく位置付けられている（増田1990）。岩口1号住の様相は千網谷戸第4号住に類し、千網谷戸第1号住に含まれている無文の耳栓状（30・31）のものは出土していない。時間的な差異のみならず、地域性も考慮する必要があるだろう。

岩口1号住の9～11の関係について触れてお

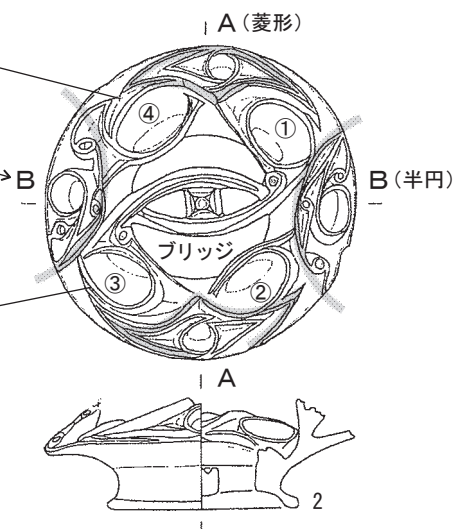


第59図 晩期中葉耳飾集成図

I 型 中空花卉 2 単位型

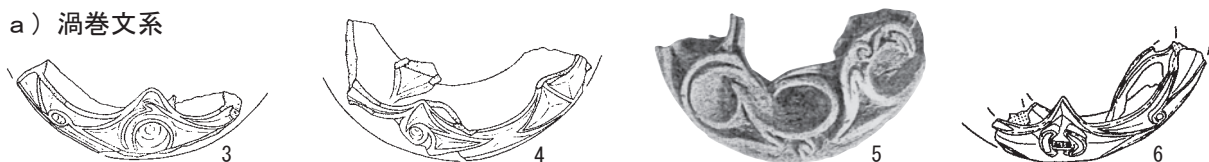


II 型 中空花卉 4 単位型

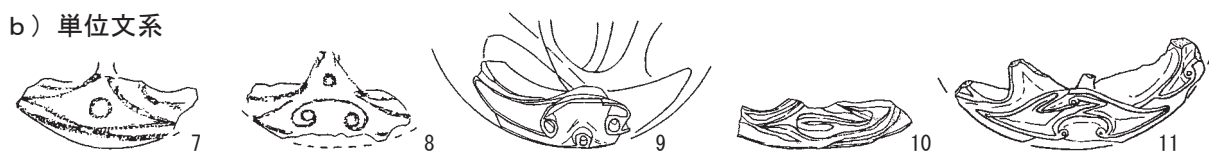


文様類型

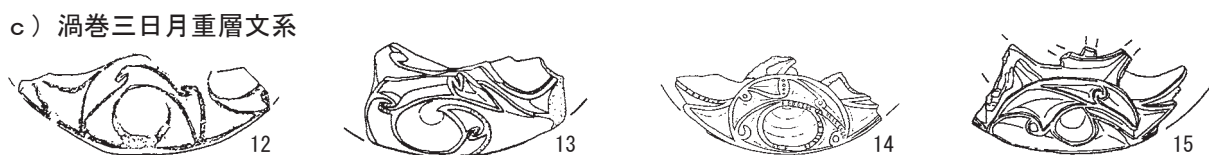
a) 渦巻文系



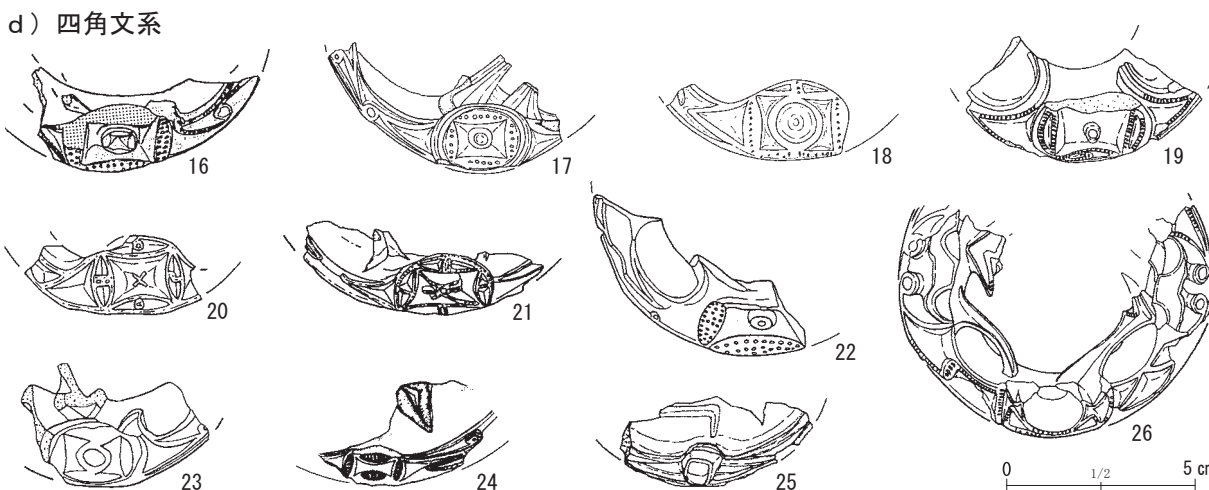
b) 単位文系



c) 渦巻三日月重層文系

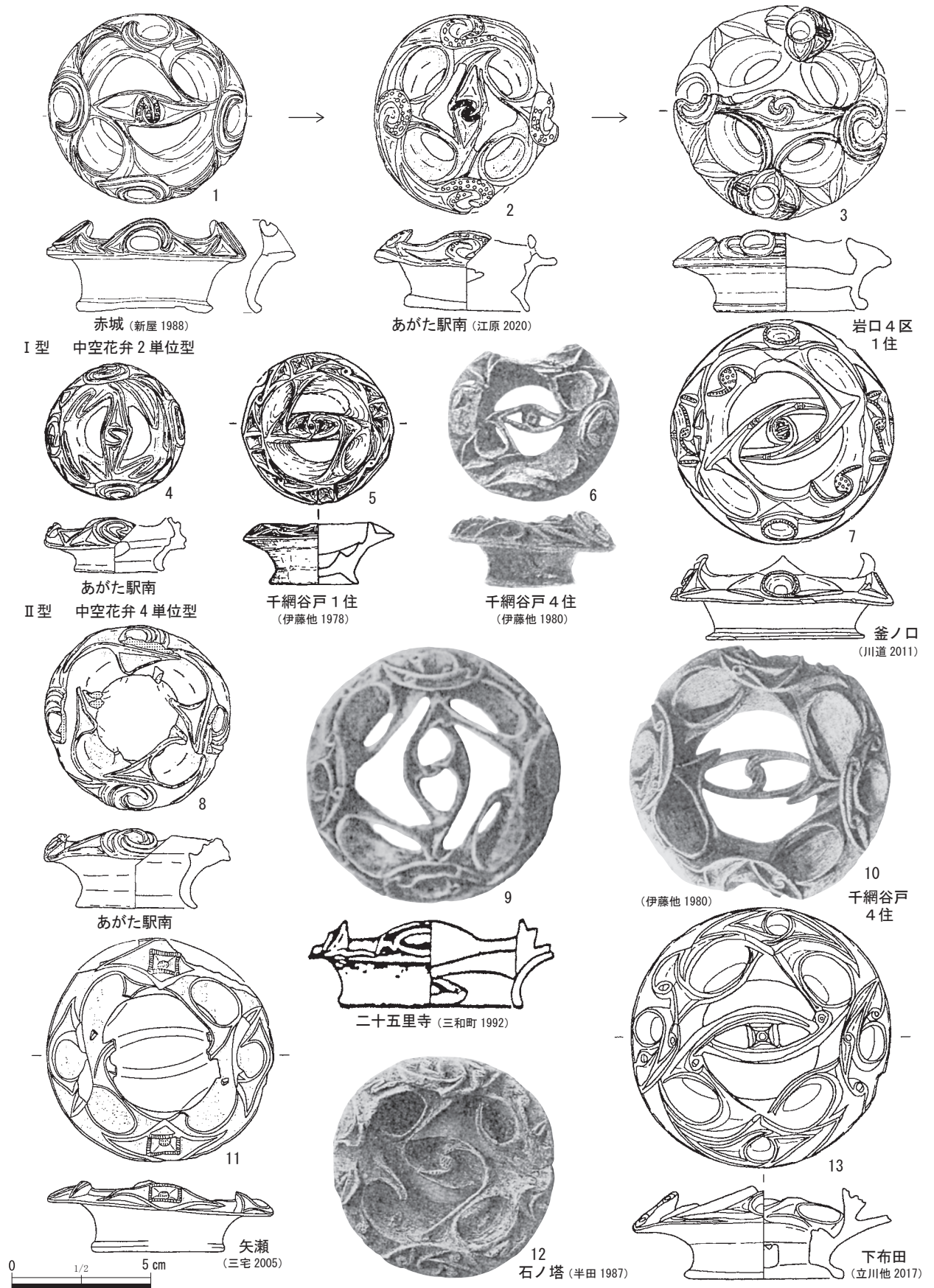


d) 四角文系



1: 赤城 (新屋 1988) 2: 下布田 (立川他 2017) 3・4・11・13・14・17 ~ 19・23・26: 長竹 (黒坂・金子 2024) 5: 千網谷戸 (伊藤他 1980)
6 ~ 8・12・15・16・20・21: あがた駅南 (江原 2020) 9: 釜ノ口 (川道 2011) 10・24: 後谷 (村田 2007) 22: 矢瀬 (三宅 2005) 25: 岩口

第60図 千網型耳飾構造図



第61図 千網型耳飾変遷図

IV 発掘調査のまとめ

きたい。11 は在地の胎土で製作され、モチーフ描出等も繊細さを欠き、いわゆる千網型とは質感が異なり在地で作られたものと判断される。対になる4単位構成のモチーフを持つ。9・10は上面が幅広の平坦面をなし、栃木県あがた駅南遺跡（江原 2020）のあがた類型とされた（角田 2023）器形に類似する。9は14のような在地系奇数単位の二重弧線文を持つものであるが、あがたタイプの器形の影響を受けて成立したものと判断される。また、10は9と同様の影響の上に、11と同様な対となる三角形文と半円モチーフの異なる4単位のモチーフを施文している。これはあがた駅南17の4単位構成との影響を受けた上で、11の千網型耳飾の対で異なるモチーフ構成の簡易版とも受け止められる。17自体も各種の系統的要素の影響関係の来歴の上に成り立っているものと思われる。

したがって、9～11と16～18は非常に近似した様相がみられ、11の千網型耳飾を介して、北関東や大宮台地、武蔵野台地において細かな情報交流を持ち、相互の影響関係の上に成立していることが看取される。これらから人の動きをどのように導き出すが、今後の検討課題であろう。

千網型耳飾の構造

千網型耳飾を理解するため、第60図上段に示したような部位に分け、構造分析を行った。まず、耳飾の名称は、正式には「大型漏斗状透彫付耳飾」であるが、便宜上「千網型耳飾」と仮称した。耳飾の外縁部の文様帯を**外帯文様帯**、内部の文様帯を**内帯文様帯**、内帯文様帯にあたる中央の連結部を**ブリッジ**、アーチ状部分を**中空花卉**と名付けた。外帯文様帯は均等に4単位の菱形状に区画され、対峙する区画相互に対となるモチーフが施文される。復元箇所を吟味する必要があるが、区画はモチーフによって菱形・三角形の形状を志向する**A区画**と、円形・半円形の形状を志向する**B区画**に区分される。ブリッジは透かしの有無で区分され、玉抱入組文や単位文の種類で分かれる。

外帯文様帯A・B区画内には、単純または複雑で自由闊達なモチーフが表現されているようであるが、本質的にはa)「渦巻文系」、b)「単位文

系」、c)「渦巻三日月重層文系」、d)「四角形文系」などを基本モチーフとした第60図に示したような変形文様で構成される。これらの文様は隆起線状の入組文、玉抱三叉文、Z状文などで連結されており、細かな刺突や刻みを施すものがある。

a) **渦巻文系モチーフ**…円形状を呈する単純な渦巻文（3）や、菱形区画の一部と一体化した剣先状渦巻文（4・5）等がある。菱形状文のA区画と組み合わせるものが多い。

b) **単位文系モチーフ**…区画内に円文（7）、両巻渦巻文（8・9）、Z状文などの単独のモチーフを施文するもので、a)と同様に菱形状のA区画と組み合わせるものが多い。

c) **渦巻三日月重層文系モチーフ**…渦巻文とその上部に玉抱入組文で連結された三日月状モチーフが組み合わさった、渦巻状文の変形したモチーフである（12～15）。特徴的なモチーフで、多くの耳飾に採用されている。円形・半円形状のB区画と組み合わせる場合が多い。

d) **四角形文系モチーフ**…円形モチーフの中に四角形状モチーフを入れ込むもの（17・23）、四角形モチーフの中に円形モチーフを入れ込むもの（16・18）、四辺で四角形を構成するもの（19～22・24）、単独の箱状四角形状文を施文するもの（25）などがある。円形・半円形状のB区画と組み合わせる場合が多い。

千網型耳飾の系列分類

千網型耳飾は、アーチ部分から変形した中空花卉の個数によって、第60図に示したI型の中空花卉2単位型とII型の中空花卉4単位型の大きく2型式に分類される。その類型を第61図に示した。

I型 中空花卉2単位型…4～7

I型の中でも、A・B区画に同一系統の文様を持つものと、A・B区画に異なったモチーフを持つ系列がある。

I型同一文様系…4・5

4は中空花卉が成立していない段階で、ブリッジからZ状の内文が派生し、中膨らみのブリッジにS字状モチーフが施文される、区画内にはほぼ同様な渦巻文であるa種の文様が4単位に繰り返され、A（a + a）+ B（a + a）の構成となる。

千網型耳飾成立期もしくは直前段階の、晩期初頭から前葉頃の可能性がある。

5は外帯の玉抱状入組文で区画連結された菱形区画にd種の四角形文を4単位揃えて施文するもので、4に類似する。径も小さく、大洞BC式期あたりに想定されている(増田1990)。A(d+d)+B(d+d)となる。

I型異種文様系…6・7

6はブリッジに透かしを持ち、A区画にc種に変化しつつあるa種渦巻文、B区画にd種四角形文を構成するもので、大洞C1式期あたりに想定されている(増田1990)。A(a+a')+B(d+d')となる。

7は大型化し、ブリッジに透かしを持ち、A区画にa種、B区画にd種の文様を施文する。中空花卉の無い部分に、内文としてクランク状の玉抱状入組文を施文する。第59図25も同様の内文を持つ。A(a+a)+B(d+d)となる。

このように、I型では古段階で同一文様の繰り返しを、新しい段階では異種文様を施文するものがある。同一文様多単位系から異種文様系へと変遷するのであろうか。

II型 中空花卉4単位型…8～13

I型と同様に同一文様系と、異種文様系がある。

II型同一文様系…8～10

8は径が小さく中空部分が不明瞭であるが、a種をやや変形させた渦巻文類を繰り返している。A(a+a)+B(a+a)となる。

9は大型化してブリッジに透かしを持ち、A・B区画に渦巻文から変形したc種の相互に類似した渦巻三日月重層文を施文する。A(c+c)+B(c+c)となる。

10は大型化してブリッジに透かしを持ち、9と同様にc種の渦巻三日月重層文の繰り返し施文のようであるが、A・B区画のモチーフに若干の違いがある。A・B区画の判断は難しいが、三日月重層文に菱形区画を意識する山形文が組み込まれていることから、こちらをA区画とした。A(c'+c')+B(c+c)となる。

II型異種文様系…11～13

11はブリッジが不明であるが大型で、A区画

に単位文的なd種の四角形文、B区画に渦巻文と菱形文の融合した9・11に類する単位文の翼状文を施文する。比較的単純な構成で、A(d+d)+B(b+b)となる。

12は11の構成と類似し、ブリッジに透かしは無いがb種の翼状文とc種の渦巻三日月重層文で構成される。A(b+b)+B(c+c)となる。

13は著名な下布田遺跡の千網型耳飾で、最大級のものである。透かしを持つブリッジの中央にd種の単位文を持つ。A区画にはa種の渦巻文、B区画にはc種の渦巻三日月重層文を施文する。A(a+a)+B(c+c)の構成となる。

そこで、類似する渦巻文を施文する文様系統の1～3の千網型耳飾の変化を比較すると、赤城遺跡の1はI型のほぼ同一文様系で、渦巻文と剣先状渦巻文との使い分けから、A(a+a)+B(a'+a')となる。ブリッジにZ字状文を持つ。あがた駅南遺跡2は渦巻文が単独と入組状文へと変化し、天神原式の影響と思われる細かな刺突文が施されている。全体構成は1に近く、A(a+a)+B(a'+a')となろう。岩口遺跡3はブリッジに透かしは無いが入組状のモチーフとなり、径も大きくなる。背割り状の隆起線による渦巻文は1からの系譜と捉えられ、円形で花卉状の異種文様との構成で、A(a+a)+B(d+d)となる。それぞれの幅と高さの扁平率は、1が47%、2が42%、3が38%となり、変化の方向性を示しているものと捉えられる。およそ北関東から大宮台地、武蔵野台地における一つの系列として1～3のようなI型、II型に渦巻文の系列変遷があり、1が安行3b式～3c式、2が安行3c式、3が安行3c式～安行3d式の時期に納まるものと推定される。

土製耳飾については、器形や文様の系統分類とその変遷、着装の意味、保有量の相違(設楽1983、吉田2003、吉岡2019、角田2023)などについて詳細な分析から総合的な研究が行われてきた。ここでは晩期中葉期の精巧な造りの「大型漏斗状透彫付耳飾」(仮称千網型耳飾)に限定し、土製耳飾終末期の様相について検討した。

千網型耳飾は薄手の精巧な造りであることから、

IV 発掘調査のまとめ

全体構造が分かる残存率の高いものは非常に少ない。少数例からではあるが、構造的な分析からⅠ型とⅡ型に分類可能で、両者に同一文様もしくは同類文様の反復施文を行う系列と、対区画の相互に異種文様を施文する系列が存在し、両者が同様な系列的変遷過程をたどることが想定された。

そして、千網型耳飾の成立段階の安行3b式前後段階では同一文様の反復施文が特徴的であり、安行3c式～3d式の最終段階では大型化し、異種文様構成の増加することが把握された。しかし、一方では同一文様を少し変形させながら継承施文する系統も存在する。したがって、難しいながら

も時期推定を行いつつ、製作技法も含めて千網型耳飾の型と文様の系列的变化及びその地域性を把握し、異種文様構成の成立が何を意味しているのか探っていく必要がある。耳飾が身体装飾品であるのみならず、何らかの表示装置（吉岡 2010）であるとすれば、その相違は必ずや意味を持っているものと考えられるのである。

また、今回は触れられなかったが、ブリッジの取り付け位置関係とその型式学的な検討、千網型耳飾の成立過程における大宮台地型耳飾（吉田 2008）等との関係性についても今後の検討課題としたい。

参考・引用文献

- 新屋雅明 1988「赤城遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第74集
新屋雅明 2007「久台遺跡Ⅲ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第339集
伊藤晋祐・増田修・高橋哲 1978「千網谷戸遺跡発掘調査報告」桐生市文化財報告第3集
伊藤晋祐・増田修・高橋哲 1980「千網谷戸遺跡調査報告」桐生市文化財報告第4集
江原 英 2020「あがた駅南遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告第396集
川道 享 2011「釜ノ口遺跡3」伊勢崎市文化財調査報告第100集
黒坂禎二・金子直行 2024「長竹遺跡Ⅵ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第483集
齊藤成元 2008「宮岡氷川神社前遺跡 第3次調査」北本市埋蔵文化財調査報告書第16集
三和町 1992「二十五里寺遺跡」『三和町史 資料編 原始・古代・中世』
設楽博己 1983「土製耳飾」『縄文文化の研究』9
曾根原裕明 1989「加能里遺跡第8・9次調査」『飯能の遺跡（8）』飯能市内遺跡群発掘調査報告書6
立川明子他 2017「東京都調布市史跡下布田遺跡総括報告書」調布市教育委員会
角田祥子 2023「土製耳飾りの様相」『縄文時代における情報伝達と物資流通システムに関する基礎的研究』
半田勝巳 1987「石ノ塔遺跡」新田郡藪塚本町教育委員会
増田 修 1990「縄文時代の耳飾り」『月刊文化財』11 平成2年
増田修・小菅奨夫 2007『第44回企画展 千網谷戸遺跡発掘60年』岩宿博物館
柳田博之 1996「前窪遺跡発掘調査報告書（第3次）」浦和市遺跡調査会報告書第213集
柳田博之 2015「氷川神社遺跡」さいたま市遺跡調査会報告書第162集
矢部 瞳 2014「長竹遺跡Ⅰ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第413集
山形洋一 1985「東北原遺跡発掘調査報告―第6次調査―」大宮市文化財調査報告第19集
山田尚友 2016「前窪遺跡（第6次・第7次）」さいたま市遺跡調査会報告書第111集
宮内正勝他 1969「奈良瀬戸遺跡」大宮市教育委員会
三宅敦気 2005「上組北部遺跡群Ⅱ / 矢瀬遺跡」月夜野町教育委員会
村田章人 2007「後谷遺跡 第4次発掘調査報告書」桶川市教育委員会
吉岡卓真 2010「関東地方における縄文時代後期後葉土製耳飾りの研究」『千葉縄文研究』4
吉岡卓真 2019「後晩期の土製耳飾り」『身を飾る縄文人』先史文化研究の新展開2
吉田泰幸 2003「縄文時代における土製栓状耳飾りの研究」『名古屋大学博物館報告』19
吉田泰幸 2008「土製耳飾りの装身原理」『縄文時代の考古学』10

写真図版



1 : 1号住居跡



2 : 1号住居覆土内遺構確認状況

図版 2



1 : 1号住居跡 調査風景



2 : 住居跡入口部



3 : 炉跡



4 : P3-1 ~ 4 (住居内1号土坑)



5 : P2-1・2



6 : P10



7 : 南東コーナー 壁柱穴



8 : 東壁 壁柱穴



1 : 住居内 1 号土坑と出土石剣



2 : イノシシ骨集中区



3 : 住居内 1 号集石



4 : 住居内 2 号集石



5 : 独鈷石 (第 48 図 460)



6 : 石剣 (第 48 図 462)



7 : 注口土器 (第 26 図 51) と耳飾 (第 36 図 304)



8 : 壺 (第 26 図 47)



1 : 深鉢 (第 24 図 9)



2 : 深鉢 (第 24 図 2)



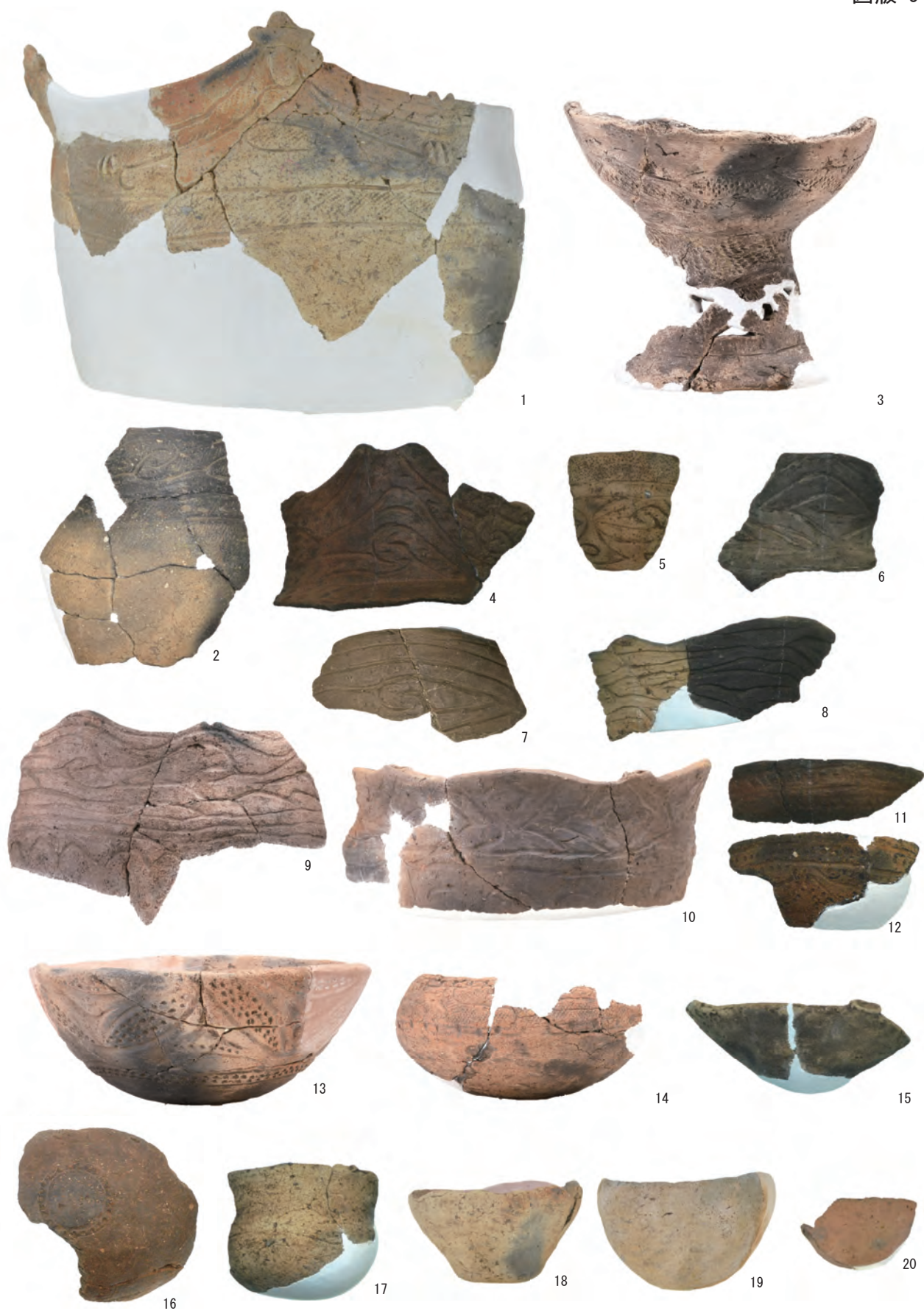
3 : 深鉢 (第 24 図 1)



4 : 鉢 (第 28 図 64)



5 : 1号竪穴状遺構



1号住居跡出土土器 (1)



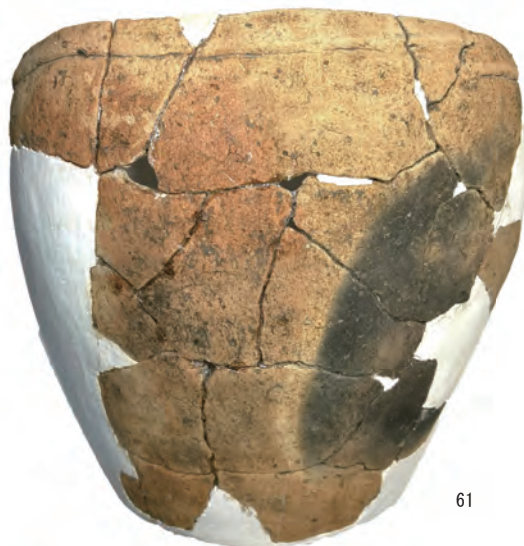
1号住居跡出土土器 (2)



59



60



61



62



63



64

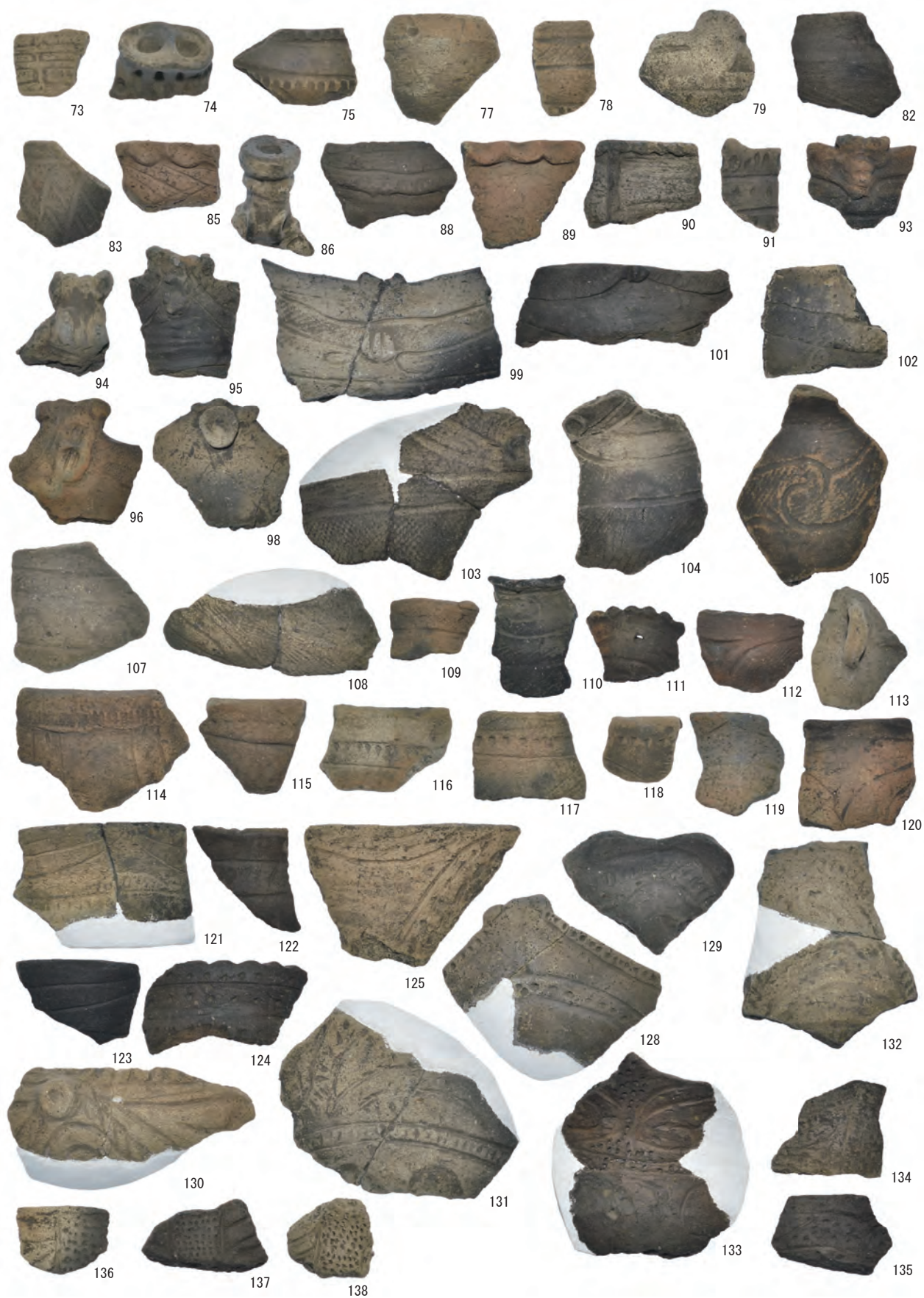


70

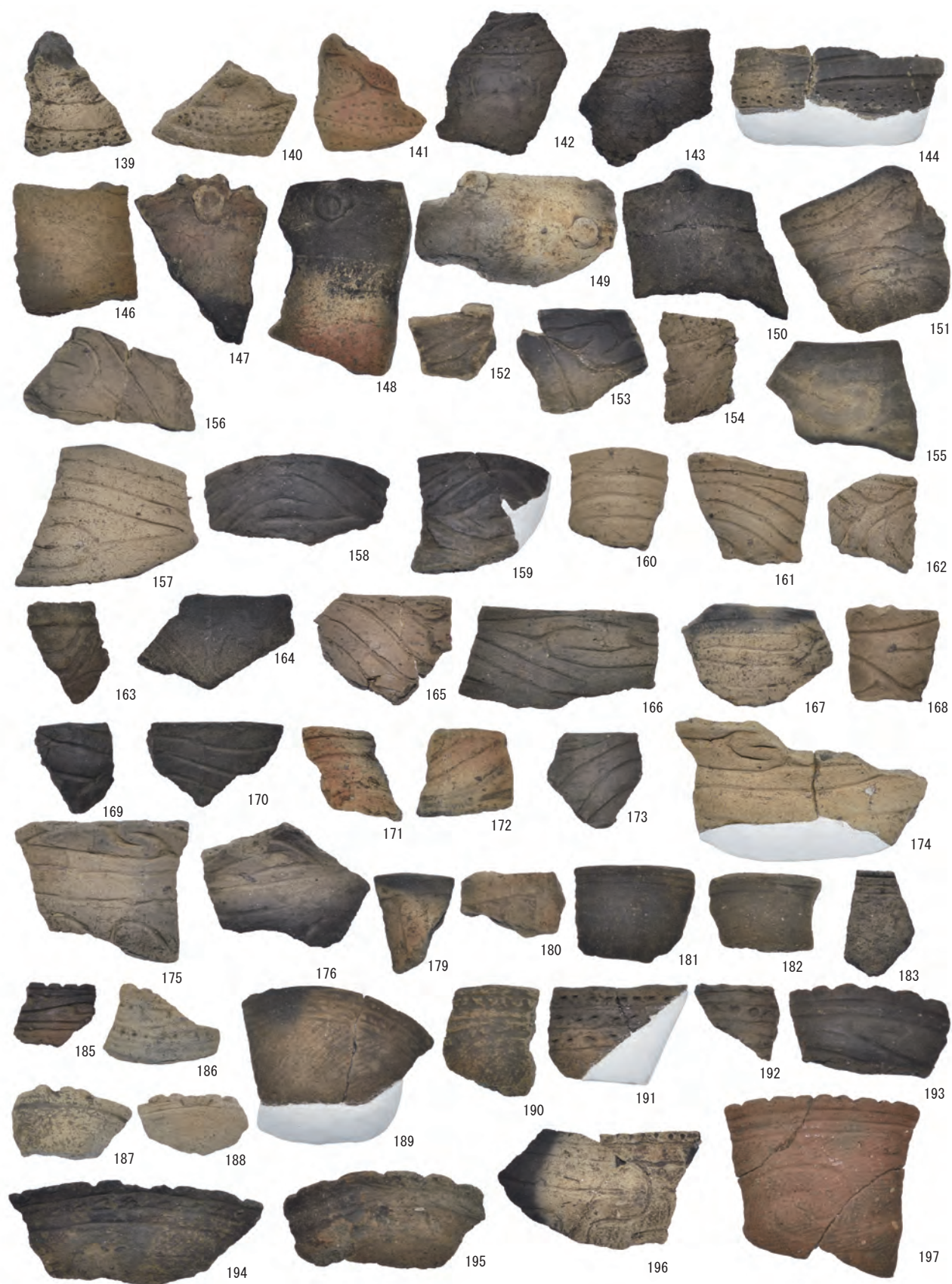


71

1 号住居跡出土土器 (3)



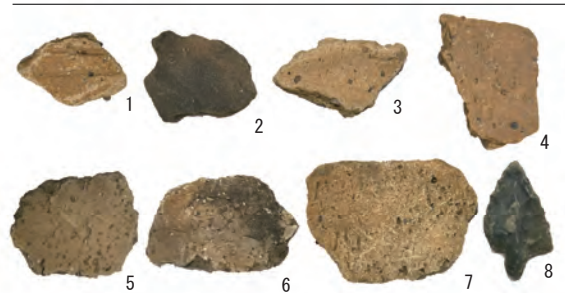
1 号住居跡出土土器 (4)



1 号住居跡出土土器 (5)



1 号住居跡出土土器 (6)



1号住居跡炉跡出土遺物

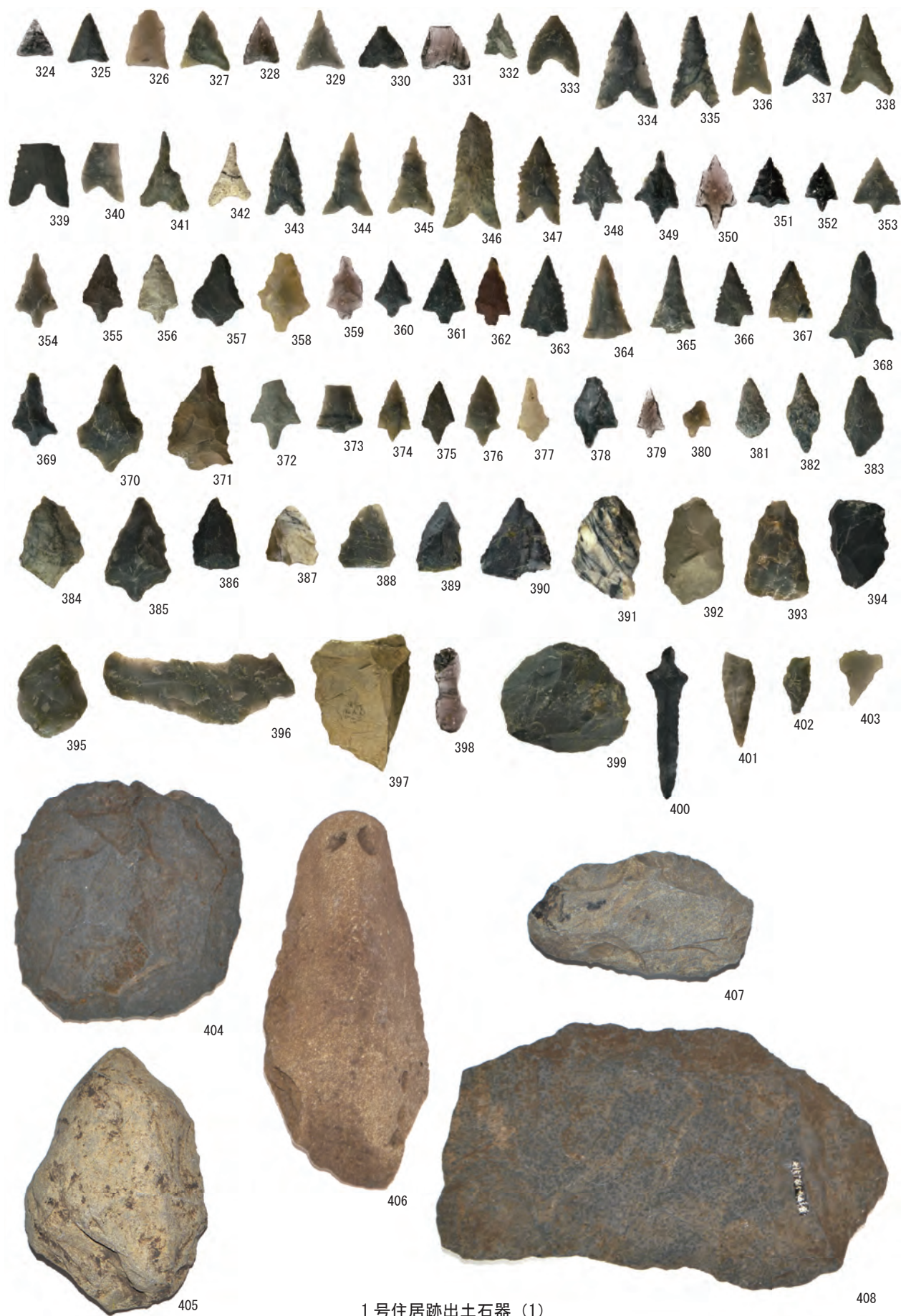


1号住居跡出土土器 (7)

1号住居跡イノシシ骨集中区出土遺物



1 号住居跡出土耳飾



1 号住居跡出土石器 (1)



1号住居跡出土石器 (2)



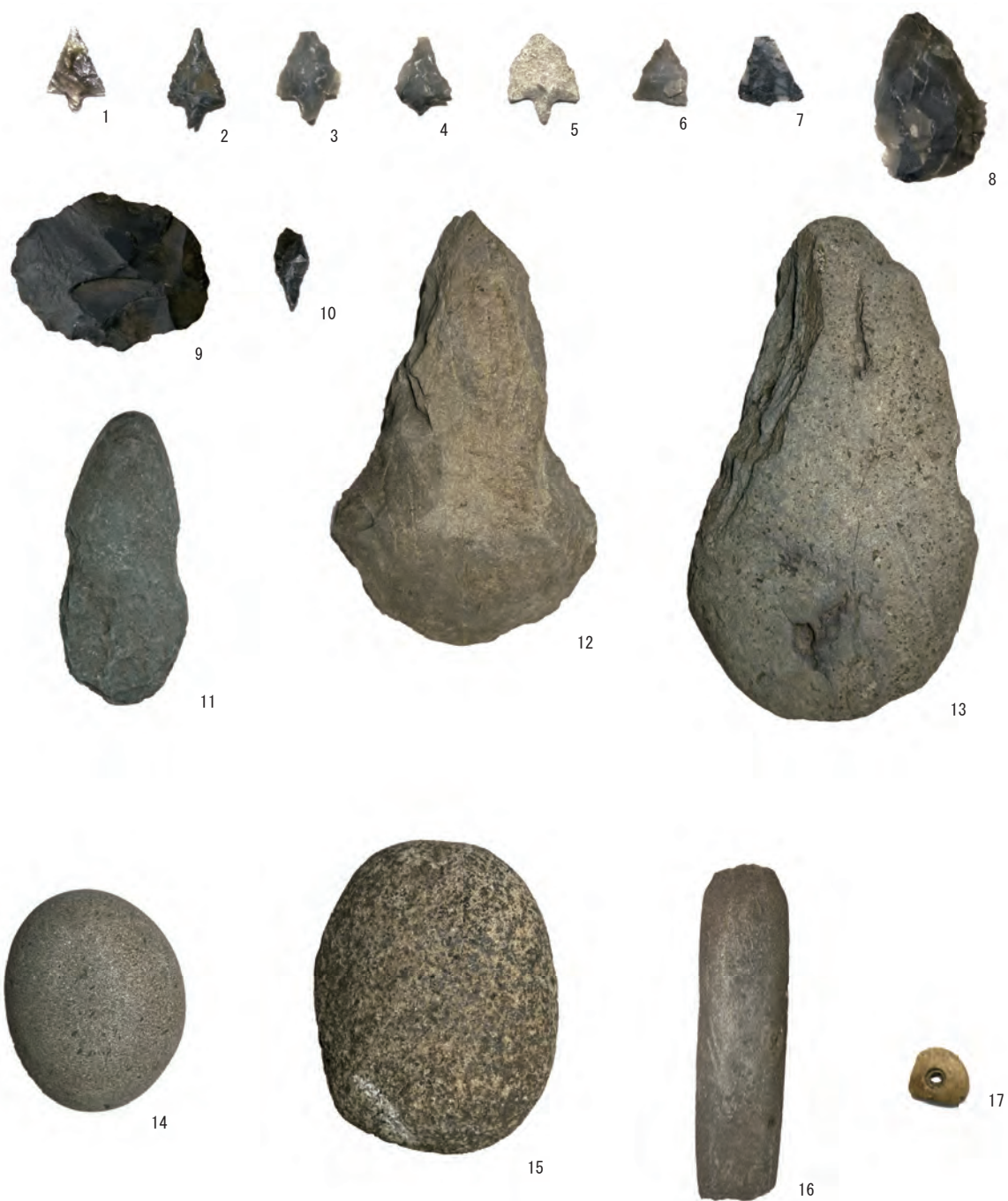
1 号住居跡出土石器 (3)



1号住居跡出土石器(4)・石製品



1 号竖穴状遺構出土土器・石器



報 告 書 抄 録

ふ り が な	いわぐちいせきよんく
書 名	岩口遺跡4区
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	坂戸市埋蔵文化財発掘調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第50集
編 著 者 名	金子直行、山本良太
編 集 機 関	坂戸市教育委員会
所 在 地	〒350-0292 埼玉県坂戸市千代田一丁目1番1号 TEL 049-283-1331
発 行 年 月 日	2025（令和7）年3月26日

ふ り が な 所 収 遺 跡 名	ふ り が な 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いわぐちいせきよんく 岩口遺跡4区	さかどしおおさだわめ 坂戸市大字多和目 あざいわぐちうしろ 字岩口後630番地1	11239	27-104	35° 55′ 18″	139° 20′ 03″	2000.7.23 ～ 2000.8.29	97 m ²	個人住宅建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物	特記事項
岩口遺跡4区	集落跡	縄文時代 後期中葉 ～ 晩期中葉	堅穴住居跡	1軒	縄文土器（深鉢、台付鉢、鉢、浅鉢、壺、注口土器）、土製品（ミニチュア土器、耳飾、土製円盤）石器（石鏃、石匙、搔器、石錐、磨製石斧、礫器、砥石、敲石、窪石、石皿、石核、石錘、垂飾、独鈷石、石棒、石剣、石刀）、骨角器	遺構内を中心にシカ骨（角が主体）や、イノシシ骨（頭蓋骨でほぼ下顎骨のみ）等の焼骨が多量に出土した。

要 約	<p>岩口遺跡4区では、縄文時代晩期中葉の住居跡1軒と晩期前葉の堅穴状遺構1軒が検出された。</p> <p>1号住居跡は、晩期前葉の安行3b式から中葉の安行3d式にかけての住居跡で、数回の建て替えが行われていた。また、1号堅穴状遺構は出土土器から晩期前葉の安行3b式期の遺構で、住居跡と想定される。</p> <p>遺構内やグリッドからは後期中葉の加曽利B1式から晩期中葉の安行3d式までの土器群が出土していることから、遺跡は加曽利B1式期から安行3d式期まで断続的に継続していたものと判断され、その主体的時期は安行3b式から安行3d式であったと推測される。</p> <p>また、1号住居跡では廃棄後のまだ埋まり切らない段階において、精神性の強い行為や祭祀行為が行われていたことが明らかになった。特に住居跡内土坑ではシカのための骨と石剣・千網型耳飾などが出土しており、大洞C2式土器が伴っていたことから、時期が判定できる貴重な事例と言える。また、イノシシ骨のみが集積された場所や、集石遺構なども検出されており、これらからは精神性の強い行為が推測される。</p> <p>本調査は、当該期の遺跡が少ない荒川右岸の武蔵野台地から丘陵部における貴重な調査事例となった。</p>
-----	---

坂戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第50集

岩口遺跡4区

令和7年3月26日発行

編集・発行 埼玉県坂戸市教育委員会
埼玉県坂戸市千代田一丁目1番1号

印刷 朝日印刷工業株式会社
群馬県前橋市元総社町67番地

